

読み聞かせ **A** **B** **C**

改訂版

集団の子供たちへの
読み聞かせに



目次

はじめに	1
読み聞かせガイド	2
集団への読み聞かせにおすすめの絵本リスト	6
凡例	6
創作絵本	7
昔話絵本	31
知識の絵本	41
おはなし会のプログラムの作り方	49
プログラム事例	50
件名索引	55

はじめに（改訂版の発行にあたって）

この本は、小学校等で集団の子供たちに読み聞かせを始めようという人、また、すでに読み聞かせをしているが、もっと学びたいという人のためのガイドブックです。

『読み聞かせガイド』では、読み聞かせにどのように取り組むか、その考え方や姿勢を記しています。

『集団への読み聞かせにおすすめの絵本リスト』では、集団の子供たちを対象とした読み聞かせに向く絵本210冊を紹介しています。

『おはなし会のプログラムの作り方』と『プログラム事例』では、おはなし会のプログラムを立案するときの考え方と具体的なプログラム例を示しています。

巻末の『件名索引』は、絵本を選ぶ際の参考となるよう掲載しました。

このたびの改訂では、『集団への読み聞かせにおすすめの絵本リスト』の「知識の絵本」に10冊を追加しました。読み聞かせというと、最初に物語の絵本が頭に浮かびますが、自然や科学の世界の美しさや不思議さを子供たちに伝える知識の絵本にも、読み聞かせを楽しむことができるものがあります。

また、絵本リストの「読み聞かせの時間」について、修正が必要なものは改めました。

ここに掲載している絵本を実際に読むと、子供たちにとってよい絵本とはどのようなものかがわかってくるでしょう。

このガイドブックを道案内に、子供たちとの読み聞かせのひとときをさらに豊かにしてください。

読み聞かせガイド

これから読み聞かせをする方へ

● 子供時代の読書は生涯にわたる宝となります。

子供はお話を聞いたり、本を読んでもらうことが大好きです。子供は、お話や本の世界の中で主人公とともに冒険をし、読み終わった後も、空想を膨らませ、繰り返し楽しめます。

子供時代に読んだ本は、強く心に残り、生涯にわたる宝となります。

● 読み聞かせは読書への一番の近道です。

子供は文字を読めるようになって、自ら本を読み、本の世界を楽しむまでには、時間がかかります。読書に興味を持ってもらうには、まずは大人がお話や本の楽しさを知らせることから始めましょう。その一番の近道が読み聞かせです。自分で読書を楽しめる高学年の子供でも読み聞かせてもらおうと、一人で読むときは違った深い世界を味わえます。

● 本の力を信じ、子供が本を楽しむ力を信じるところから出発しましょう。

学校などで初めて読み聞かせをするときは、子供たちが聞いてくれるか、この絵本でよいのか心配でしょう。日頃から、自分自身が本に楽しみを見出し、本は自分の世界を広げてくれると信じていれば、読み聞かせの成功に一步近づいているのです。

まず、本の力を信じ、子供が本を楽しむ力を信じるところから出発しましょう。

● 集団の子供たちへの読み聞かせは、何を読むかが重要です。

我が子に絵本を読み聞かせるには、難しい決まりはありません。それぞれの家庭で満足するやり方で楽しめばよいのです。

しかし、集団の子供たちの場合、子供の絵本に対する興味・関心は様々です。参加している子供たちが、「ああ、おもしろかった」と満足できる絵本、読み終えた後に、心に刻まれるような絵本を選びたいものです。

● 世代を超えて読み続けられた絵本から、選んでいきましょう。

では、どのような絵本を読み聞かせたらよいでしょう。

日本で絵本の出版が盛んになってから、半世紀がたっています。その間に生まれた絵本の中には、長い間子供に愛読され、同時に大人にも支持されてきた絵本があります。このような絵本は、今も昔と同じように子供を喜ばせます。

このガイドブックでは、世代を超えて読み続けられてきたものを中心に、210冊の絵本を紹介しています。まず、ここに挙がっている絵本をじっくりと読んでください。リストの中に、好きな絵本がありましたか？ 子供たちが喜んでくれると思ったら、どうぞその絵本を読んでください。

読み聞かせをするにあたって

● お互いに練習をすると、さまざまな発見があります。

読み聞かせは、生の声がたよりです。一番後ろにいる子供にまで届く声で、繰り返し練習してください。仲間同士でお互いに、練習してみてください。適切な読み方ができるようになるだけでなく、人が読むのを聞くと、一人だけでは気づかなかった絵本の楽しさがわかるなど、多くの発見があります。

● お話のイメージを描きながら読んでいくと、自然に子供にもおもしろさが伝わります。

お話自体がおもしろいのですから、演じて読む必要はありません。お話のイメージを描きながら読むと、自然に子供たちにも内容がわかり、そのおもしろさが伝わります。特に、ゆっくり読むように心がけましょう。普段、声に出して本を読む時より、もう一段階ゆっくり読むと、ちょうどよい速さになります。

大人は、子供たちの目に見える反応を期待しがちです。わっと笑ったり、問いかけに口々に答えたりすると、うれしくなります。けれども、子供は本を読んでもらっているときには、本の世界にすっかり入っているのです。読み終わった後、ため息をついたり、ぼんやりしたり、描かれたイメージに圧倒されたりしているのです。

見た目の反応に一喜一憂せず、子供たちの心が動いていることに気づいてください。

● どの子供も十分楽しめるように、心をくばります。

周囲が静かなこと、聞き手全員が楽に絵を見られることが大切ですが、様々な事情でよい環境が整わない場合もあります。その場その場で次善の対応をしましょう。

人数が多い場合には、両端に座る子供にも見えるように詰めて座るとか、読み手が一歩さがるなど、どの子供も絵本が見えるよう、始める前に確認しましょう。

聞き手も読み手も心を落ち着かせてから、読み始めます。

● 絵本の持ち方、ページのめくり方に気をつけます。

聞き手の子供たちが床に座っているときには、読み手は椅子に座り、聞き手が椅子に座っているときには、読み手は立って読むとよいでしょう。椅子に座る場合には、姿勢正しく、座ります。立つ場合には、読み手は少し足を開き、しっかり立ちます。

絵本は、持ちやすいほうの手で、しっかり持ちます。ゆらゆらゆれたり、傾いたりしないように気をつけてください。特に、本が上向きにならないように注意します。ページをめくるときは、めくる方の手であらかじめページの端に手をかけておき、スムーズにめくってください。

表紙と裏表紙が一つの絵になっているときは、読み終えてから、広げてしっかりと見せると印象が深まります。

● 記録を取ると、いろいろなことが見えてきます。

読み聞かせた絵本や子供たちの様子を記録に取り、仲間と共有しましょう。長い目で見た子供たちの反応や成長、その絵本の持ち味が見えてきます。また、複数の人で読み聞かせを

行っている場合には、これまでどのような絵本を読んできたかがわかるので、次のプログラム作成の参考になります。

Q & A

1 昔話や古い時代を描いた絵本は、今の子供にはわからないのでは？

確かに井戸や囲炉裏、薪割りや田植えなど、子供が知らないことや経験したことのないものが、たくさん登場します。けれども、『うまかたやまんば』では、やまんばに追いかけられる怖さは、今の子供にもよくわかります。『ペレのあたらしいふく』では、しっかりと働き、自分の力で服を手に入れるペレをカッコいいと思います。物語の本質に子供が共感できるかどうか大切です。

2 10分間の読み聞かせの時間に、ぴったりの絵本がなかなか見つからないのですが。

絵本により話の長さは違います。同じ絵本でも、読み手や聞き手の状況によって、かかる時間が異なります。10分に収めようとすると、不自然な選び方や読み方になってしまいます。例えば、学校で、休み時間に行う場合には、事前に関係者で話し合い、7分で終わる日も、15分かかる日もあることを互いに了解しておくといよいでしょう。話がとても長い絵本の場合には、2日にわたって読み聞かせる方法もあります。続きを読むときには、前の日に読んだあらすじを話してから始めると、聞きやすくなります。

3 騒がしくて、なかなか聞こうとしません。

子供は本来絵本の読み聞かせが好きですが、楽しめない場合には、複数の原因が考えられます。一つは、選んだ絵本がふさわしくない場合です。年齢よりやさしすぎたり、難しすぎたり、あるいは大人が一方的に何かを伝えたい、という思いだけで絵本を選んでいませんか？ もう一度、子供たちにどのような絵本がふさわしいかを考えてください。

また、読み手が、選んだ本に自信がない場合、子供はそれを見抜きます。自分が選んだ本の力を信じているか、もう一度原点に立ち返って考えてみてください。

子供たちが、絵本を読んでもらった経験が少なく、本の楽しさを知らない場合もあります。その場合は、焦らず、少し対象年齢が低く、親しみやすい絵本から入るなど工夫してみてください。子供たちに一番近い担任の先生が、本について話したり、読み聞かせをすることも効果的です。読み聞かせを続けていくと、子供たちは絵本の楽しさにだんだんと気づいてきます。

4 本の題を言うと「それ知ってる！」と言われてしまいます。知らない絵本を読んだ方がよいのでしょうか？

たいていの場合、知っている子供は数人で、聞き手の大部分は知らないでしょう。その「知っている」も知っているから「その本はいや」なのではなく、おもしろいから読んでという方が多いように思います。自分が選んだ本が楽しく、子供たちを喜ばせる、と確信しているのであれば、読み続けてかまいません。一度読んだことがあっても、しばらくたってまた読むと、聞き手は新たな発見をします。よい絵本は読み返すたびに、聞き手にも読み手にも新しい喜びを与えてくれます。

5 後ろの子に、絵が見えないのですが。

絵本は、元来少人数で楽しむものですから、教室などでは後ろからは見えにくくて当然です。前のほうに詰めて座ることが難しい場合には、絵本をやめて、昔話や物語の本を読み聞かせるのもよい方法です。言葉だけでお話を楽しむなら、遠い席の子供も近い席の子供も同じように楽しむことができます。絵がない分、子供たちは自由にイメージを拡げることができ、大人が思いも及ばぬ深い体験をすることがあります。特に、語りによって伝えられてきた昔話は、絵がなくても十分楽しむことができます。

集 団への読み聞かせにおすすめの絵本リスト

このリストは、小学校などで集団の子供たちに読み聞かせをする方のために、都立多摩図書館がおすすめする絵本を選んだものです。

読み聞かせの際に、参考にしてください。

凡 例

- 集団への読み聞かせに適した絵本 210 冊を掲載しています。
- 210 冊の内訳は、創作絵本 120 冊、昔話絵本 50 冊、知識の絵本 40 冊です。
- 絵本は、創作、昔話、知識の絵本ごとに書名の 50 音順に配列しています。
- 各絵本の事項について

番号	書 名 著 者 名	ISBN コード	出版社		出版年
			幼	対象年齢	高
		あらすじ	都立多摩図書館によるコメント		
	絵本の表紙写真				

- ・ 書誌事項は絵本の情報源の記述のとおり。
- ・ 対象年齢と読み聞かせの時間は、目安です。

対象年齢	幼：幼児	低：小学校低学年
	中：小学校中学年	高：小学校高学年
- ・ あらすじはストーリーの最初から最後まで記述し、絵本 1 冊の内容がわかるようにしています。
- ・ 読み聞かせの参考になるよう、絵本の魅力や子供の反応、読むときの注意事項などをコメントとして記しました。
- 平成 30 年（2018 年）11 月現在購入できる絵本には、ISBN を付しています。小学校等での選書の参考にしてください。

1 あおい目のこねこ

エゴン・マチャーセン さく・え せたていじ やく

978-4-8340-0040-5



昔、青い目の元気な子ネコが、ネズミの国を探しに勇んで出かけた。途中、5匹の黄色い目のネコたちに出会った。ネコたちは青い目をばかにしたが、子ネコは平気だった。ある日大きな犬がやってきて、ネコたちをおどした。青い目の子ネコは偶然、犬の背に乗ってしまい、犬はどンドン走っていった。着いたところは、ネズミの国。子ネコは、みんなを呼んできて、ネズミをたくさん食べて、丸々太る。

福音館書店	1965
幼 低 中 高	9分

どんなひどい目にあっても、大きな青い目を動かして「なーに、なんでもないさ」と元気に世の中を渡っていく。そんな子ネコを誰もが応援せずにはられない。「1のまき」から「7のまき」まで章が分かれたしゃれた体裁。ストーリーは単純なので、幼い子供から十分楽しめる。

2 あおくときいろちゃん

レオ・レオーニ 作 藤田圭雄 訳

978-4-7834-0000-4



あおくんは、仲良しのきいろちゃんと遊びたくなり、あちこち探すと、街角でばったり出会う。二人がうれしくて抱き合うと、緑色の体になってしまう。楽しく遊んで、家に帰ると、親たちに緑の子はうちの子ではないと言われて泣く。すると、黄色の涙と青い涙がこぼれ、二人は元のおおくときいろちゃんに戻る。親たちも喜んで子供を抱きあげると、青と黄色が重なって緑色になり、疑問が解ける。子供たちは、晩ご飯まで楽しく遊ぶ。

至光社	1967
幼 低 中 高	3分

色紙をちぎって、人物や家、山を表し、色が重なることで別の色ができることを活かした異色な絵本。子供たちは、丸くちぎった色紙をあおくんやきいろちゃんとしてすぐに認め、重なったところの色が変わる不思議を受け入れる。

3 あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま

イ・ヨンギョン ぶん・え かみやにじやく

978-4-8340-1633-8



昔、頭に赤手ぬぐいをかぶったお針の上手なおくさんがいた。ある日、おくさんがうたた寝をしていると、裁縫に使うものさしや鋏、針、糸など七つの道具が、自分の自慢話を次々にしゃべりだした。それを聞いたおくさんは一番偉いのは私だと大声で言って、寝てしまう。怒られた道具たちはしょんぼり。おくさんも悪夢を見て泣き出し、目が覚めると道具たちに謝った。それからは皆で仲良くお針に励むようになった。

福音館書店	1999
幼 低 中 高	7分

韓国の『古随筆閨中七友争論記』をもとに創作した絵本。民族衣装を着たゆびぬまきばあちゃんやいとねえさんなど七つの道具が争う姿はユーモラスで、独特の味わいがある。やや年齢の高い読者には、韓国の暮らしぶりが伝わる絵が興味深い。

4 あくたれラルフ

ジャック・ガントス さく ニコール・ルーベル え いしいももこ やく

978-4-924938-26-7



セイラのネコ、ラルフは家族を困らせてばかりいる。ある晩家族でサーカスを見に行ったが、いたずらがひどくて、置き去りにされる。ラルフはサーカスで働かされ、食べ物ももらえず、逃げ出す。ごみの中で眠って病気になるが、探しに来たセイラと再会する。セイラはラルフを抱きしめ、家に連れて帰る。ラルフはやわらかいベッド、温かいミルク、そして友達がいることがうれしくて、これからは皆を困らせないと思うのだが。

童話館出版	1994
幼 低 中 高	8分

パーティでクッキーを全部一口ずつ味見したり、お父さんのパイプでシャボン玉を吹いたり、ラルフはやりたい放題。その破天荒ぶりが小気味よい。子供たちは、一人でさまようラルフの運命にはらはらし、ハッピーエンドに安堵する。型にとらわれない表情豊かな絵もぴったり。

5 あたしもびょうきになりたいな！

フランツ＝ブランデンベルク さく アリキ＝ブランデンベルク え ふくもとゆみこ やく 978-4-03-201290-3



エドワードが病気になった。お母さんはベッドにご飯を運び、お父さんは冷たいタオルを当て、おばあちゃんは本を読んでくれる。でも元気なエリザベスは、何でも自分でしなくてはならない。「あたしもびょうきになりたいなあ！」すると、何日かたって、エリザベスは病気になり、同じように看病してもらうことになる。でもよくなったエドワードがいろいろなことができるのがうらやましい。やがて元気になった二人は、家族の喜ぶことをしてあげる。

偕成社	1983
幼 低 中 高	4分

誰もが経験する病気の兄弟へのやきもちや自分が病気になったときの辛さが、ネコの家族を通して語られる。エドワードとエリザベスは姉弟。表情豊かなネコたちが、子供の気持ちを代弁している。挿絵が細かいので少人数向き。

6

アンガスとおひる

マージョリー・フラック さく・え 瀬田貞二 やく

978-4-8340-0422-9

福音館書店	1974
幼 低 中 高	4分



しりたがりやの子犬のアンガスは、生垣の向こうから聞こえてくるやかましい音が気になって仕方がない。ある日、その音の正体を突き止めようと外に飛び出して、2羽のアヒルと出会う。アンガスはほえて、アヒルを追いかけるが、やがて攻守交替。アヒルにしっぽをつつかれて逃げ出し、安全な家にやっとたどり着く。

子犬の目の高さから描かれた明るい絵は、お話を雄弁に語り、幼い子供はアンガスになりきって聞く。「ガー、ガー、ゲック、ガー！」「ウーウーウーウーワン！」などの鳴き声が耳に心地よく、繰り返して楽しむ。続編に『アンガスとねこ』『まいごのアンガス』がある。

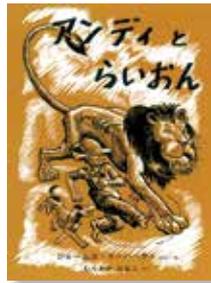
7

アンディとらいおん

ジェームズ・ドーハーティ ふん・え むらおかはなこ やく

978-4-8340-0003-0

福音館書店	1961
幼 低 中 高	9分



アンディは図書館でライオンの本を借りて夢中で読む。翌朝になっても頭はライオンのことで一杯。登校中、アンディは本物のライオンに会い、足に刺さっていた太いとげを抜いてあげる。それからまもなくサーカスがやってくるが、ライオンが逃げ出し、アンディと鉢合せする。ところがそれは助けたライオンだった。二人は大喜びで踊りだす。アンディは、ライオンと公会堂まで行進し、勇敢だったご褒美に市長からメダルをもらう。

起承転結のはっきりしたストーリーが、きびきびした文で語られる。3章に分かれているので、長い読み物のような雰囲気があり、読者を満足させる。黄土色と黒の2色で描かれた絵からは、登場人物の動きが勢よく伝わってくる。

8

アンナの赤いオーバー

ハリエット・ジューフェルト ふん アニタ・ローベル え 松川真弓 やく

978-4-566-00288-3

評論社	1990
幼 低 中 高	9分



終戦後、アンナには新しいオーバーが必要になったが、お店には何もない。お母さんは、うちにある素敵な物と引き換えにオーバーを手に入れる方法を考えた。おじいさんの金時計でお百姓さんから羊毛をもらい、ランプでおばあさんに糸に紡いでもらい、自分たちで糸をコケモモで赤く染める。アンナは協力してくれた人をクリスマスに招待し、新しいオーバーを見せる。

第二次大戦後の物資不足のヨーロッパが舞台。手仕事が生きていた時代、お母さんとアンナが、一人一人にお願いしてオーバーを手に入れるまでが暖かく丁寧に語られる。コートの子色色が印象深い。

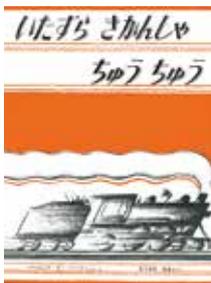
9

いたずらきかんしゃちゅうちゅう

バージニア・リー・パートン ふん・え むらおかはなこ やく

978-4-8340-0004-7

福音館書店	1961
幼 低 中 高	12分



小さな機関車のちゅうちゅうは、重い客車を引いて、毎日大きな町から小さな町へと走っている。機関士と機関助手、車掌の3人が親切に世話してくれる。ある日、ちゅうちゅうは、客車を引くのが嫌になり、一人で勝手に走り出す。汽笛を鳴らして勢よく走っていくと、みんなびっくり。機関士たちはあわてて追いかけて、廃線で迷子になって座り込んでいたちゅうちゅうを見つける。ちゅうちゅうはもう逃げ出したりしないと誓う。

機関車が主人公の乗り物絵本の古典。黒い木炭画から、勢よく走るちゅうちゅうやあわてて逃げる動物や人間が飛び出すように描かれている。長い話の絵本だが、ドラマチックな展開に幼児から楽しめる。

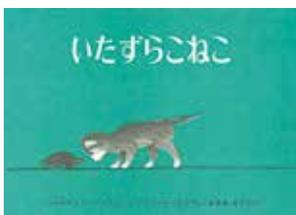
10

いたずらこねこ

バーナディン・クック ふん レミイ・シャーリップ え まさきりこ やく

978-4-8340-0037-5

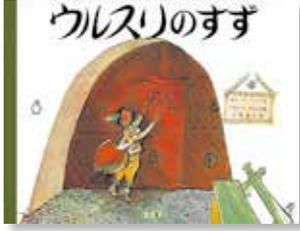
福音館書店	1964
幼 低 中 高	9分



小さな池に小さなカメがすんでいる。隣には、いたずらな子ネコがいて、ある日2匹は庭の真ん中で出会う。子ネコがカメの甲羅をぼんとたたくと、カメは頭を引っ込める。びっくりした子ネコがまたたたくと、足も引っ込める。やがてカメは手足を出して、子ネコの方へゆっくり歩き出す。子ネコはカメを見ながら、うしろにさがっていくうちに、池に落ち、びっくりして家に逃げ帰る。

どの見開きにも、黒い直線が引かれ、その両端に池と子ネコの家のある垣根が描かれている。その真ん中でカメと子ネコが出会う。子供は、カメと子ネコの一挙手一動をしっかりと理解して、楽しむ。びっくりする子ネコに笑ったり、池に落ちそうな場面にはらはらしたり。子供の気持ちに添って丁寧に読んであげたい。

11	ウルスリのすず ゼリーナ・ヘンツ 文 アロイス・カリジェ 絵 大塚勇三 訳	978-4-00-112677-8	岩波書店		1973
			幼	低	中



山の子ウルスリは働き者。明日は春を迎える鈴行列のお祭で、男の子たちは鈴を借りに行く。ウルスリは一番小さい鈴しかもらえず、がっかりする。だが、山の夏小屋に大きな鈴がかかっていたのを思い出し、雪の山を一人で登っていく。夏小屋ですてきな鈴を手に入れたウルスリは、翌朝、山を駆け下りると、行列の先頭に立って行進する。その後、家に帰り、両親とご馳走を食べる。

息子の帰りを待って不安な夜を過ごす両親、無事帰ってきたウルスリ、抱き合い、ご馳走を食べる一家。冒険の末の大団円は明るく伸びやかな喜びにあふれている。カリジェはスイスの画家で、山の子供たちの暮らしや自然を素朴で温かい雰囲気にも描いている。早春にお勧め。

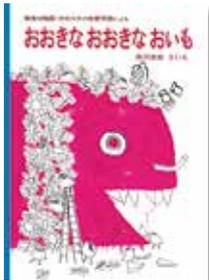
12	おおきくなりすぎたくま リンド・ワード 文・画 渡辺茂男 訳	978-4-593-56123-0	ほるぷ出版		1985
			幼	低	中



ある日、クマの毛皮を手に入れたくてジョニーくんが森に行くと、子グマに会う。うちにつれて帰ると、子グマは何でも食べてどんどん大きくなる。そのうちよその家のトウモロコシや蜂蜜まで食べて、村のやっかいものに。ジョニーくんは、仲間と暮らすように言い聞かせ、遠くの森に連れ出すが、何度やっても戻ってきてしまう。とうとうお父さんと相談し、鉄砲で撃つ決心をするが、偶然動物園の人に会い、クマは動物園に引き取られて幸せに暮らす。

舞台はアメリカ。モノクロの絵は迫力があり、人間を困らせる野生のクマの荒々しさと愛嬌を見事にとらえている。読みごたえのあるストーリー。

13	おおきなおおきなおいも 赤羽末吉 さく・え	978-4-8340-0360-4	福音館書店		1972
			幼	低	中



あおぞらようちえんの芋ほり遠足が雨で一週間延期になり、子供たちはつまらない。先生から、一週間たつとお芋は土の中でどんどん大きくなると聞き、大きな紙をつないで大きな大きなお芋を描くことになる。できたお芋を掘って、ヘリコプターで運び、恐竜いもごうるすを作って遊び、それから小さく切ってお料理する。たくさん食べたら、おならで空を飛んで、らくちんらくちん。

新宿区立鶴巻幼稚園の実践に基づく話。大勢の子供たちで描きあげたお芋は、何枚ページをめくっても「まだまだ」と続き、聞き手を驚かす。どんどん広がる子供たちの自由な空想が愉快。一筆書きのような黒の線画に、おいしそうなお芋が目を惹く。

14	大雪 ゼリーナ・ヘンツ 文 アロイス・カリジェ 絵 生野幸吉 訳	978-4-00-112676-1	岩波書店		1965
			幼	低	中



明日は子供のそり大会。ウルスリは妹のフルリーナに、糸屋の店でそりに飾る毛糸をもらってくるようにと命じる。吹雪になり、ウルスリは帰ってこないフルリーナを探しに行く。倒れた木の間に毛糸を見つけ、雪の下からフルリーナを助け出し、背負って帰る。次の日、ウルスリたちのそりは見事に毛糸と枝で飾られていた。春になり、二人は倒れた木の代わりに、新しい木を植える。

フルリーナを雪崩から救ったのは「あらしの木」で、動物たちはその木の下に隠れて嵐を避けるという。スイスの人々の素朴な暮らしや信仰、厳しい自然が、抑えた色調の暖かな絵を通して謳われる。文章が詩的なため、ややわかりにくいので、丁寧に読み聞かせたい。

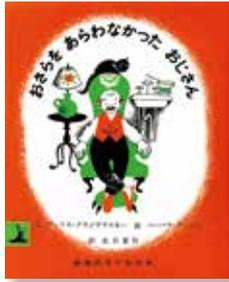
15	おかえし 村山桂子 さく 織茂恭子 え	978-4-8340-0482-3	福音館書店		1989
			幼	低	中



タヌキの家の隣りにキツネが越してきた。キツネがイチゴを持って挨拶に来たので、タヌキはお返しにタケノコを持っていく。するとキツネはお返しのお返しに花瓶と花を持ってきて、タヌキは…という具合にお返しをやり取りしているうちに、家の物すべて、さらに子供と自分までお返しにしてしまう。これは引っ越したのと同じだと考えたキツネは、挨拶に行こうとイチゴを摘みにいくと、タヌキ一家と出会い、仲良くイチゴを食べる。

画面の両側にタヌキとキツネの家があり、家の中の物が次々入れ替わっていく様子は、芝居を見るようである。「おかえしのおかえしのおかえしのおかえし」だんだん長くなる挨拶や子供まで贈りあうナンセンスがおかしい。

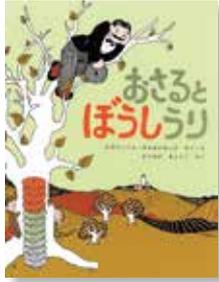
16	おさらをあらわなかったおじさん フィリス・クラジラフスキー 文 パーバラ・クーニー 絵 光吉夏弥 訳 978-4-00-115135-0	岩波書店	1978
		幼 低 中 高	5分



一人暮らしの男の人が、ある時いつもよりおなかをすかせて帰ってきた。たくさん晩ごはんを作ってたくさん食べて、くたびれてしまい、お皿は洗わずに、流しに置いたままにする。翌日はもっとくたびれて洗わずじまい。そのうちきれいなお皿はなくなり、植木鉢や灰皿や鍋で食べ、家中は汚れたお皿で一杯に。何もかもを使い果たした時、雨が降ってくる。男の人はお皿を外に出して雨できれいにし、それから毎晩お皿を洗うようになった。

とんでもないものが食器になり、汚れたお皿がテーブルや椅子、床にまで積みあがりエスカレーターしていく事態に、子供は固唾を飲み、愉快な解決法におじさんと一緒にごきげんになる。赤茶と緑、黒の3色を使ったしゃれた絵が想像力をかきたてる。

17	おさるとぼうしうり エズフィール・スロポドキーナ さく・え まつおかきょうこ やく 978-4-8340-0979-8	福音館書店	1970
		幼 低 中 高	8分



昔、帽子を頭に乘せて売り歩く行商人がいた。ある日、木の下でひと眠りして、目を覚ますと、帽子がなくなっていた。あちこち探すと、木の上でサルたちが帽子をかぶっている。帽子売りが、怒って指を突きつけると、サルたちも指を突きつけて「ツー、ツー、ツー」と言う。いくら怒っても、サルたちはまねをするばかり。とうとう帽子売りが、腹立ちまぎれに自分の帽子を地面に投げつけると、サルたちもまねをして、帽子は手元に戻ってくる。

一幕の芝居を観たような気持ちになる絵本で、幅広い年齢の子に喜ばれる。頭の上に様々な色の帽子を順番に乗せていく様子やサルの動作が丁寧に繰り返されるのが、耳に心地よい。

18	おじさんのかさ 佐野洋子 作・絵 978-4-06-131880-9	講談社	1992
		幼 低 中 高	7分



おじさんは、黒い立派な傘を大事にしている。いつも持って出かけるが、雨が降っても決してささない。傘がぬれるからだ。あるとき公園で雨にあり、男の子に傘に入れて頼まれるが知らんふりをする。男の子は友達の傘に入って「あめがふったらポンポロン」と歌いながら帰っていく。その歌が気になって、おじさんが自分の傘を開いてみると、確かにポンポロンと音がする。おじさんは傘をさして家に帰り、ごきげんになる。

雨が降ったら人の傘に入って、自分の立派な傘を使わないおじさん。ちぐはぐな行動の繰り返しが無モラス。青を基調にした伸びやかな絵から、雨の日の匂いや音が聞こえてくるようだ。

19	おしゃべりなたまごやき 寺村輝夫 作 長新太 画 978-4-8340-0378-9	福音館書店	1972
		幼 低 中 高	12分



王様は、鳥小屋にぎゅう詰めになっているニワトリがかわいそうになって、カギを開ける。するとニワトリが大脱走。城中大騒ぎになり、家来たちは犯人を探し回る。王様はカギをこっそり捨てるが、ニワトリに見られて、「だまっている」と口止めする。そのニワトリの卵が夕食の目玉焼きになり、王さまがナイフを入れると「だまっている」と言うので、コックさんに真相がわかってしまう。

王様の子供っぽい行動に、お城中が右往左往するナンセンスなお話。兵隊たちが、ニワトリに追いかけられる王様を助けようと発砲するなど、大仰なドタバタ劇がおかしい。大胆な色使いの絵は、とぼけた味わいがあり、お話にあってる。

20	おちゃのじかんにきたとら ジュディス・カー 作 晴海耕平 訳 978-4-924938-21-2	童話館出版	1994
		幼 低 中 高	5分



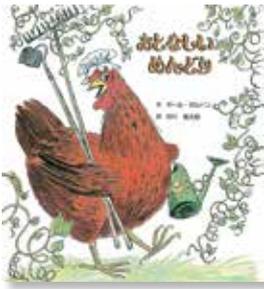
お茶の時間に、ソフィーとお母さんの家に大きなトラがやってきた。トラは「おちゃのじかんに、ごいっしょさせていただけませんか？」と言って、テーブルに着き、サンドイッチもパンもケーキも牛乳も、テーブルにあるもの全部を食べてしまう。さらに台所の冷蔵庫や戸棚の中のものも食べて、お礼を言って帰る。お父さんが帰ってきて、食べ物も飲み物もなくなったことを聞くと、一家はレストランに出かける。

礼儀正しいトラが、次々と食べ物物を平らげてしまうアンバランスが楽しい。特に、水道の蛇口から水を全部飲む場面には意表を突かれ、誰もが驚く。オレンジ色のトラが生き生きと描かれ、触りたくなるような暖かさがある。いろいろな食べ物が出てくるのもうれしい。

21 おとなしいめんどり
ポール・ガルドン 作 谷川俊太郎 訳

978-4-924938-06-9

童話館出版				1994
幼	低	中	高	5分



昔、ネコと犬とネズミとおとなしい赤いメンドリが小さな家に住んでいた。あるとき、メンドリが小麦の種を見つけ、「だれかこのこむぎをまいてくれる？」と聞かすが、3匹ともいやだと答える。メンドリは小麦を育て、粉にするまでの仕事を一人で行い、最後にお菓子を焼く。3匹はお菓子を食べる、と叫ぶが、メンドリは一人で作ったのだから、一人で食べると宣言して、食べてしまう。それからというもの3匹は仕事を手伝うようになる。

昔話を下敷きにした絵本。種まき、刈り取り、粉屋に運ぶ、お菓子を焼くとの4回の繰り返しがきちんと語られ、3匹の怠けぶりともメンドリの働きぶりが鮮明に浮かび上がる。画家が絵の隅々に工夫を凝らし、読者を楽しませてくれる。

22 おばあさんのすぷーん
神沢利子 さく 富山妙子 え

978-4-8340-0238-6

福音館書店				1970
幼	低	中	高	4分



山の中で一人暮らしをしているおばあさんは、スープを飲む古いスプーンを大事にしていた。ある日カラスがスプーンを取っていき、木のまたに隠す。やがてスプーンは、冬の風に吹き落とされ、3匹のネズミに見つげられる。ネズミたちはぴかぴか光るスプーンに顔を映して興味津々。スプーンに乗って山をすべり、ジャンプ。おばあさんの家に飛び込む。おばあさんは、スプーンが戻ってきたのを喜び、ネズミたちと楽しくおしゃべりをする。

初めてスプーンを見たネズミたちが、おっかなびっくり、顔を映してはしゃぐ様子が愉快で、結末もほほえましい。リズムカルな七五調の文章もお話に合い、地味な本だが読み聞かせると思った以上に喜ばれる。

23 おばけのジョージ
ロバート・ブライト さく・え 光吉夏弥 やく

978-4-8340-0873-9

福音館書店				1978
幼	低	中	高	5分



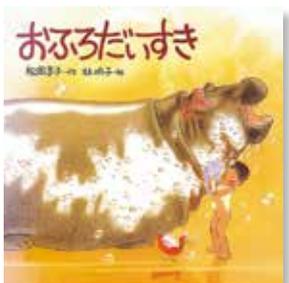
おばけのジョージは、ホイットィカーさんの家に住んでいる。毎晩同じ時間に階段をミシリ、ドアをギーと言わせて、家の人やネコやフクロウに時間を知らせていた。ある日、ホイットィカーさんが階段とドアを直したので、音がしなくなり、みんなは時間がわからなくなる。ジョージは家を出て、ウシ小屋で冬を過ごす。ホイットィカー家ではまた階段やドアがぎしむようになり、それを知ったジョージは大喜びで元の生活へ戻る。

おばけと言っても怖くはなく、人を脅すより、自分の方が怖くなるような小さくて愛すべきおばけの話。モノクロの挿絵が、登場人物の愛嬌のある表情をとらえ、親しみやすい。

24 おふろだいすき
松岡享子 作 林明子 絵

978-4-8340-0873-9

福音館書店				1982
幼	低	中	高	11分



〈ぼく〉が、おもちゃのアヒルとお風呂に入ると、湯船から大きなカメが現れ、ペンギンやオットセイ、カバも次々やってくる。〈ぼく〉がカバの大きな体を石鹸で洗ってやると、クジラがお湯のシャワーを浴びせる。みんなでお湯に入り、数を数えていると、お母さんが顔を出す。動物はいなくなり、〈ぼく〉はお母さんの広げたタオルに飛び込む。

お風呂場が大きくなり、不思議な空間が広がっていく様子が手に取るようにわかる。幼い子供は、〈ぼく〉になりきって楽しみ、「ぼく、おふろだいすき。きみも、おふろがすきですか？」の最後の問いかけに、「好き」と答える子も多い。文章は長いが、幼児でもよく聞く。

25 おまたせクッキー
パット＝ハッチンス さく 乾侑美子 やく

978-4-03-202400-5

偕成社				1987
幼	低	中	高	4分



ビクトリアとサムが、お母さんの焼いたクッキーを6枚ずつに分けようとしていると、「ピンポン」と玄関のベルが鳴り、お隣の子供二人がやって来る。3枚ずつに分けていると、また友達が来る。こうして次々子供たちが来て、とうとう12人揃い、クッキーが一人一枚になったとき、またベルが鳴る。おばあちゃんがたくさんのクッキーを持って登場し、みんなは大喜び。そこへまたベルの音が。

12枚のクッキーがどうなるか、最後までどきどきさせる。お母さんの「おばあちゃんのクッキーはとくべつよ」と繰り返す言葉が伏線になり、暖かい結末へ繋がる。舞台のように同じ室内が描かれ、話が進むに従って床が足跡で汚れ、子供たちの持ち物が増えるなど細部の変化も楽しい。

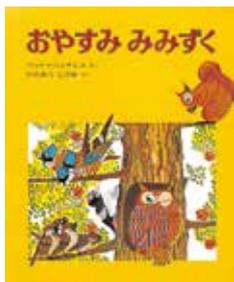
26

おやすみみみずく

パット＝ハッチンス さく わたなべしげお やく

978-4-03-201140-1

偕成社	1977
幼 低 中 高	5分



大きな木のうろで、ミミズクが眠ろうとすると、ハチがぶんぶん羽を鳴らす。ミミズクは「あーねむたい」。ミミズクは片目を開けてハチを横目で見ると、その後、リスが木の実をかりかりかじり、キツツキ、ムクドリ、スズメなど鳥たちが次々やってきてやかましく鳴き、ミミズクを寝かせてくれない。やっと暗くなり、鳥たちが静かに眠っていると、ミミズクが「ぶっきょっこー」と鳴き、今度は鳥たちが「あーねむたい！」。

色鮮やかな鳥たちの「きゆるきゆる」「じゅーじゅー」などにぎやかな鳴き声は何より楽しい。木を定点で描き、鈴なりの動物たちとミミズクの表情の対比や攻守逆転する結末が笑いを誘う。筋立てのしっかりした絵本と組み合わせると最適。

27

かあさんのいす

ベラ B.ウィリアムズ 作・絵 佐野洋子 訳

978-4-251-00508-3

あかね書房	1984
幼 低 中 高	10分



〈わたし〉はかあさんとおばあちゃんの3人家族。一年前に火事で何もかも失った。私たちが今欲しいのは、大きくてふかふかの椅子だ。一日中食堂で働くかあさんが痛む足を伸ばしたり、おばあちゃんがジャガイモをむくときに座れるような椅子。私たちは、大きなガラスびんに毎日細かいお金を貯めてきた。びんが一杯になったので、家具屋さんに行き、大きな花柄の椅子を買い、3人で座って写真を撮った。

子供が描いたような色彩あふれる絵が、心を寄せて暮らす一家の素朴な喜びや悲しみを伝える。貧しくても心温かい近所の人たちや、最後に新しい椅子を手に入れたかあさんと〈わたし〉の姿が幸せな読後感を残す。話が時系列に進まないの、幼い子供には理解しにくい。

28

かいじゅうたちのいるところ

モーリス・センダック さく じんぐうてるお やく

978-4-572-00215-0

富山房	1975
幼 低 中 高	5分



ある晩、男の子のマックスは、オオカミのぬいぐるみを着て、大暴れ。とうとうお母さんに夕ご飯抜きで寝室に放りこまれる。すると寝室が森になり、波が打ち寄せ、マックスは舟に乗って怪獣たちのいるところへ。怪獣たちはマックスを食べようとするが、マックスは怪獣ならしの魔法を使って、みんなの王様になり、踊りを踊って愉快に過ごす。やがて〈やさしいだれかさん〉が恋しくなり、再び航海して、元の寝室に戻ってくる。

グロテスクだが、どこか愛嬌のある怪獣が魅力。寝室にによきによき木が生えて、いつの間にか森になる場面や、怪獣たちとマックスの大胆な踊りなど、不思議な世界に子供を連れて行く。文章のない踊りの場面は、ゆっくり見せてあげたい。

29

かさどろぼう

シビル・ウェッタシンハ 作・絵 いのくまようこ 訳

978-4-19-862337-1

徳間書店	2007
幼 低 中 高	8分



スリランカの小さな村では、誰も傘を知らない。村のキリ・ママおじさんは初めて町へ行き、きれいで便利な傘に驚き一本買うが、帰り道で何者かに盗まれてしまう。何度買っても同じことが起きるので、傘に紙切れを入れておくことにする。やはり傘は盗まれ、紙切れをたどっていくと、森の木にずらりと傘がぶら下がっていた。おじさんは1本だけ残して傘を取り戻し、村のみんなに売る。また森へ行くと、いたずらな子ザルが傘の中に座っていた。

帰り道で何度も傘を盗まれてしまうのんきなおじさんは、犯人を憎むどころか、おかげで傘の店を開くことができた感謝する。おらからかて明るいお話。傘や人々の服装は独特の模様と色彩で印象深く、スリランカの暮らしを伝えてくれる。

30

かしこいビル

ウィリアム・ニコルソン さく まつおかきょうこ、よしだしんいち やく 978-4-89274-021-3

ペンギン社	1982
幼 低 中 高	2分



ある日、メリーのところへおばさんから遊びにいらっしやいと招待の手紙が届く。メリーは馬のおもちゃや人形、笛、ブラシ、兵隊人形のビルなど持って行くものを用意して、トランクに詰め始める。何度も工夫して詰めてもうまく入れられず、時間がなくなり、なんとビルを入れ忘れて出かける。ビルは涙をはらって起き上がり、全速力で走りに走り、ドーバー駅で追いつき、メリーに「かしこいビル！」とほめられ花束をもらう。

著者が我が子のために作った絵本。手作りの暖かさがあり、子供が自分の大切なものに寄せる愛情が絵の細部にまで込められている。幼い子供は、道なき道や線路の上を走る勇敢なビルに賞賛を送る。

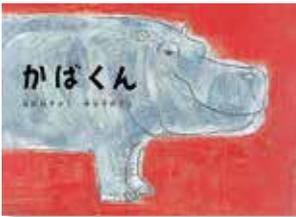
31 **がちょうのペチューニア** 富山房 1999
 ロジャー・デュボワザン 作 まつおかきょうこ 訳 978-4-572-00365-2
 幼 低 中 高 13分



ガチョウのペチューニアは本を拾い、「本に親しむ者は賢くなる」と信じて、いつも持ち歩く。得意のあまり首がどんどん長くなり、それを見て賢いと思ひ込んだ動物たちが相談を持ち込む。ペチューニアは、オンドリのトサカはプラスチックだとか、6は9より大きいなど間違った意見を言うので、動物たちは混乱する。花火をキャンデーと断言して大爆発、怪我をしたペチューニアは、大事なのは本の中身だと気づき、ABCの勉強を始める。

ペチューニアの知ったかぶりとそれに振り回される動物たちが滑稽。年齢の高い子供なら、作品に込められた辛口の皮肉に気づく。のどかで平和な農場を黄色や赤、青など鮮やかな原色で明るく描いている。

32 **かばくん** 福音館書店 1966
 岸田衿子 さく 中谷千代子 え 978-4-8340-0081-8
 幼 低 中 高 4分



動物園に朝が来た。カメの子を連れた男の子が、カバたちのところに野菜を持ってやってきた。目を覚ました大きいカバと小さいカバは、水の中をゆうゆうと泳ぐ。日曜日の動物園にはたくさんの子供たちがやって来て、カバが水から出ると、驚きの声を上げる。カバは大きな口をあけて、キャベツをまるごと食べ、お腹いっぱいになると寝てしまう。男の子が帰っていくと、動物園に夜が訪れ、カバたちは眠る。

詩のような文章でつづられた動物園のカバの一日を描いた絵本。子供は、ゆったりしたカバに共感し、キャベツを食べる場面に、喜ぶ。暖かく素朴な絵がお話にぴったり。リズムカルな言葉を楽しむように、ゆっくりと読み聞かせてあげたい。読み終わったら、表紙と裏表紙を広げると大きなカバが現れる。

33 **かもさんおとおり** 福音館書店 1965
 ロバート・マックロスキー ぶんとえ わたなべしげお やく 978-4-8340-0041-2
 幼 低 中 高 11分



ボストンに飛んできたカモのマラードさん夫婦は川の島に巣を作る。ある日8羽の子ガモがかえり、少し大きくなると公園に引越すことに。マラードおくと子ガモたちが一列に並んで道路を横切ると、車は警笛を鳴らして止まり、カモたちは「ぐうあー！」と大騒ぎ。交番の警官が飛んできて、「さあおとおり」と手招きする。ゆうゆうと通りを渡ったカモの親子は、無事公園に到着し、警官たちに「ありがとう」。

セピア色で描かれた絵は、カモたちの豊かな表情や活発な動き、柔らかい羽毛までとらえ、読者にカモの視点でボストンの町を見せてくれる。子ガモたちの名前が「ジャックとカックとラックとマックと…」とリズムカルで、子ガモの動きまで伝わってくるよう。

34 **ガンピーさんのふなあそび** ほるぷ出版 1976
 ジョン・バーニンガム さく みつよしなつや やく 978-4-593-50030-7
 幼 低 中 高 5分



ある日、川のそばに住むガンピーさんは、舟で出かける。子供たちが連れて行って頼むので、けんかをしない約束で乗せる。ウサギやネコ、犬、ブタたちも次々やってくるが、大人しくしていることを約束して、舟に乗せる。そのうち動物たちは約束を破り、けつとばしたり、けんかしたり大騒ぎ。とうとう舟がひっくりかえり、ずぶぬれに。みんなは野原を横切って、ガンピーさんの家に帰るとお茶をご馳走になる。

晴れた日に、緑に囲まれた川を舟で行くさわやかな絵本。約束を見事に破って、ヤギが蹴っ飛ばし、子ウシがどしんどしん歩き回り、大騒動になるのが愉快。何事もなかったように、落ち着いてお茶をふるまうガンピーさんも魅力的。続編に『ガンピーさんのドライブ』がある。

35 **きつねのホイティ** 福音館書店 1994
 シビル・ウェッタシンハ さく まつおかきょうこ やく 978-4-8340-0198-3
 幼 低 中 高 11分



スリランカの村に住む3人の元気なおかみさんの家に、食いしん坊ギツネのホイティが洗濯物を着こんで人間に化け、夕食を食べに来る。3人は、キツネの様子がおもしろくて、だまされたふりをするが、ホイティはいい気になって、森で3人をばかにした歌を歌う。歌を聞いた3人は、仕返しに花嫁衣裳を物干し綱に掛けておき、それを着てやってきたホイティに「はなむこさんはどこにいるの?」とからかってやりこめる。

「ホイティ トイティ ホイティティ!」と繰り返すホイティの歌が、調子がよくて、子供たちはとても喜ぶ。見返しに伝統食を作る様子が描かれるなど、絵が細部まで工夫され、スリランカの自然や人々の暮らしがわかる。おいしそうなお馳走が次々登場するのも魅力。

36

木はいいなあ

ジャニス＝メイ＝ユードリイ さく マーク＝シーモント エ さいおんじさちこ やく 978-4-03-327090-6



表紙をめくると、木が茂った森に男の子が寝転んでい
る。「木がたくさんあるのはいいなあ。木がそらをかくし
ているよ」と言葉が添えられている。木に登って海賊ごっ
こをする子供たち、紅葉した木の下で落ち葉の山を歩く
子供、木陰で休むウシ、木のおかげで暴風から守られて
いる家。四季を通して木のすばらしさを語り、最後に木
を植えようと呼びかける。

偕成社	1976
幼 低 中 高	4分

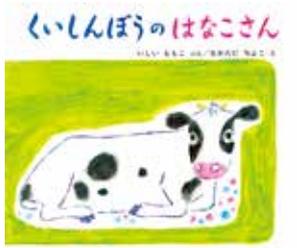
モノクロとカラーの絵が交互に
続き、枝を広げた様々な美しい木
と自然のなかで遊ぶ子供たちが詩
情豊かに語られる。木が人間に与
えてくれる遊びが余すところなく
描かれ、読み終わると正に、「木
はいいなあ」と実感できる。

37

くいしんぼうのはなこさん

いしいもこ ぶん なかたにちよこ え

978-4-8340-0047-4



春になり、子ウシのはなこは牧場へ行く。他の子ウシ
たちとちゃんばらごっこをして勝ち、女王になる。それ
からは水を飲むのも、木陰で休むのもはなこが一番。あ
る日、はなこはさつまいもとかぼちゃの山を一人で食べ
てしまう。翌朝、子ウシたちは、はなこが大きなアドバル
ーンのように膨らんでいるのに驚く。獣医さんが呼ばれ、
食べすぎでおなかにたまったガスを抜くと、「ぷすっ！」
「すすすす……」という音がして、はなこは元の大きさに
戻る。

福音館書店	1965
幼 低 中 高	12分

食べすぎで、大きくふくらんだ
はなこやガスが抜ける場面のおか
しきは、幼い子供にもよくわかる。
それからは、食べ過ぎたりしない
でおとなしい子ウシになったとい
う結末にもほっとする。明るくの
びやかな牧場の絵が、気持ちよい。

38

くまのコールテンくん

ドン＝フリーマン さく まつおかきょうこ やく

978-4-03-202190-5



ぬいぐるみのクマのコールテンくんは、デパートのお
もちゃ売り場で、早く誰か自分をうちに連れて行ってく
れないかと待っている。ある日、女の子が、コールテン
くんをほしがると言い、お母さんは、つり紐のボタンが取れ
ていると言い、行ってしまふ。その夜、コールテンくん
は、なくしたボタンを探して、デパートを探検し、警備
員に見つかって連れ戻される。次の朝、また女の子が来
て、コールテンくんを家に連れて帰り、二人は友達になる。

偕成社	1975
幼 低 中 高	8分

デパートの夜の探検が子供たち
をひきつける。エスカレーターを
山と勘違いしたりするような幼い
コールテンくんに、子供たちは共
感する。最後に、コールテンくん
と女の子が友達になるハッピーエ
ンドもうれしい。

39

くまのビーディーくん

ドン＝フリーマン さく まつおかきょうこ やく

978-4-03-202230-8



ビーディーくんは、セイヤーくんという男の子の持っ
ているぜんまい仕掛けのおもちゃのクマ。ある冬の日、
ビーディーくんは、ほらあなに住もうと雪の丘を登って
いく。ところが、ほらあなは、まっくらで寒い。家から
枕や懐中電灯をせっせと運んでいると、ぜんまいが切れ
て、ひっくりかえってしまう。そこへセイヤーくんがやっ
てきて、ねじを回してくれ、二人そろって家に帰る。

偕成社	1976
幼 低 中 高	7分

冒険心をそそる望遠鏡、置手
紙、ほらあななどが登場し、子供
は一生懸命なビーディーくんに心
を寄せて聞く。「なかはめっぽう
くらくて、」「こんどとってきたの
は——ほかならぬかいちゅうでん
とうでした」など、日常で耳にし
ない言葉が新鮮に響く。モノクロ
の絵が、素朴なお話にぴったり。

40

ぐりとぐら

ながわりえこ さく おおむらゆりこ え

978-4-8340-0082-5



野ネズミのぐりとぐらは、森で大きな卵を見つけ、カ
ステラを焼くことに決める。卵は大きすぎて運べないので、
材料や道具を運んできて、かまどを作り、材料をこ
ねて、焼き始める。ぐりとぐらが歌いながら焼けるのを
待っていると、よい匂いに鼻を動かしながら、森中の動
物たちがやってくる。2匹はおいしいカステラをみんな
にご馳走する。

福音館書店	1963
幼 低 中 高	5分

書名を聞くと、知っていると思
える子供も多いが、読み聞かせる
と、どの子も楽しんで聞く。おな
べから黄色いカステラが顔を出す
場面を喜び、手を出して食べるふ
りをする子もいる。ぐりとぐらの
歌やせりふのやりとりは、明るく
元気よく読みたい。続編が6冊あ
る。

41	ぐるんぱのようちえん 西内ミナミ さく 堀内誠一 え	978-4-8340-0083-2	福音館書店				1966
			幼	低	中	高	8分



ゾウのぐるんぱは、さびしがりや。ジャングルから働きに出るが、ビスケット屋では、はりきって特大ビスケットを作り、「もうけっこう」と断られる。どこへ行っても作るものが大きすぎて、出て行くはめに。ぐるんぱがしょんぼりと、自分で作ったものを車に乗せて走っていると、子供が12人いるお母さんに会い、遊んでくれと頼まれる。ぐるんぱがピアノを弾いて歌うと子供たちは大喜び。とうとう幼稚園を開くことになる。

5回、失敗をくり返し、安住の地を見つける話は、昔話のようなしっかりした構成を持ち、絵は明るく親しみやすい。大きな靴や皿で子供たちが遊ぶ最終場面は、楽しい雰囲気溢れ、多くの子供たちの支持を得る絵本である。

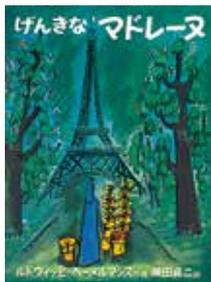
42	くんちゃんのだいらょう ドロシー・マリノ 文・絵 石井桃子 訳	978-4-00-110591-9	岩波書店				1986
			幼	低	中	高	6分



子グマのくんちゃんは、鳥たちが南の国へ渡ると聞いて、自分も行きたくなる。両親に見送られて、丘を登り、てっぺんの松の木まで来るが、お母さんにさよならのキスをしなかったのに気づき、丘を降りてキスをし、また引き返す。今度は双眼鏡があると気づいて家まで取りに帰る。それから釣竿、水筒と丘の上と家を行ったり来たり。とうとうくたびれて、昼寝をしてから出かけようと、ベッドに入ると、そのままぐっすり眠る。

思いついたことをすぐに実行するくんちゃんは、子供そのもの。くんちゃんの思いつきをいつも暖かく見守る両親の存在が、読者に安心感を与える。2色だけを使った素朴な絵がお話にあっている。くんちゃんシリーズは全7冊。

43	げんきなマドレーヌ ルドウィッヒ・ペーメルマン 作・画 瀬田貞二 訳	978-4-8340-0362-8	福音館書店				1972
			幼	低	中	高	5分



パリの古いお屋敷に、12人の女の子とミス・クラベルが暮らしていた。中でも小さいマドレーヌは元気なもの。ある真夜中、マドレーヌはおなかが痛くなり、病院で盲腸の手術を受ける。10日が過ぎて、ミス・クラベルと女の子たちがお見舞いに行くと、病室はおもちゃやお菓子でいっぱい。マドレーヌの手術の傷にみんなびっくり。その夜「もうちょうをきって、ちょうだいよー」と女の子たちが一斉にわめく。ミス・クラベルは一言、「げんきでなにより」。

泣いたり笑ったり、にぎやかに暮らす女の子たちは、国境を越えて子供の共感を呼ぶ。花屋や魚釣りをする人などが登場する街角の風景に、パリらしさが感じられる。続編に『マドレーヌといぬ』『マドレーヌといたずらっこ』などがある。

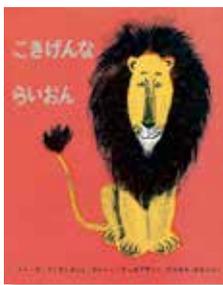
44	子うさぎましろのお話 ささきたづぶん みよしせきや え	978-4-591-00530-9	ポプラ社				1970
			幼	低	中	高	15分



北の国にクリスマスがやって来て、白ウサギのましろは、真っ先にサンタクロースからプレゼントをもらう。翌日、ましろは体を炭で黒くし、違うウサギのふりをして、プレゼントに種をもらう。ところが、黒くなった体はこすっても白に戻らない。ましろは種を神様に返そうと雪を掘って、地面に植える。すると体は元に戻り、翌年、種からは縦の木が生え、クリスマスにはおもちゃが鈴なりになる。

あっさりした絵がかえってお話のイメージを美しく想像させる。静かな精神性をたたえた話だが、子供はまずクリスマスツリーやサンタクロースの訪問の楽しさを堪能する。長い話だが、この話が好きな人が読み聞かせると、美しいイメージに導かれてよく聞いてくれる。

45	ごきげんならいおん ルイーズ・ファティオ おん ロジャー・デュボアザン え むらおかはなこやく	978-4-8340-0021-4	福音館書店				1964
			幼	低	中	高	9分



フランスの動物園に住むライオンは、いつもごきげん。町の人々は、みんなライオンと仲良しで声をかけてくれる。ある日、ライオンの家の戸が開いていたので、ライオンはみんなに会いに町へ行く。すると、普段は行儀のよい人たちが、逃げ出したり、買い物袋をぶついたり、大騒ぎ。飼育係の息子のフランソワだけが、いつものように声を掛けてくれ、二人は一緒に動物園に帰る。

ライオンと町の人々の思い違いが起こす騒ぎがユーモラスに描かれる。抑えた色調の絵が、しゃれた雰囲気を作り、ごきげんなライオンの個性を際立たせている。

46

こぎつねコンとこだぬきポン

松野正子 文 二俣英五郎 画

978-4-494-01202-2

童心社

1977

幼 低 中 高 23分



ひとりぼっちの子ギツネコンと子ダヌキポンは、川を隔てて出会い、友達になるが、両親から遊んではいけないと叱られてしまう。ある日、嵐が来て、川岸の木が倒れて橋ができる。コンとポンは橋を渡って再会し、お互いの姿に化けて遊んでいるうちに、その姿のまま相手の家に帰るはめになる。コンとポンはそれぞれの家で活躍し、親たちもその姿を見て心を許して仲良くなる。

コンとポンが、野山で元気に歌を歌ったり、化けっこをして遊ぶ姿は、人間の子供そのもの。友達を求めたり、家族のために一生懸命役立とうとする姿が共感を呼ぶ。長い話だが、丁寧に書かれているので、素直に読める。昔話の雰囲気漂わせた絵もよい。

47

こすずめのぼうけん

ルース・エインズワース さく いしいもこ やく ほりうちせい いち え 978-4-8340-0526-4

福音館書店

1976

幼 低 中 高 7分



ある日、子スズメはおかあさんから、初めて飛び方を教わる。はりきって一人で飛び続けるが、疲れてしまい、カラスに巣で休ませてほしいと頼む。カラスは、かあ、かあと鳴けない子スズメは仲間ではないからと断る。次に飛んでいった先でも断られる。疲れきった子スズメが地面をはねていくと、迎えに来たおかあさんに会い、おぶさって巣に帰る。

「おまえさん、くう、くう、くうっていえますか?」「いいえ、ぼくちゅん、ちゅん、ちゅんってきりいえないんです」子スズメと鳥の間でくり返しされる問答が、ドラマを盛り上げる。子供は、暗くなった空を一心に飛ぶ子スズメになりきって冒険し、幸せな結末にほっとする。

48

こねこのぴっち

ハンス・フィッシャー 文・絵 石井桃子 訳

978-4-00-110595-7

岩波書店

1987

幼 低 中 高 11分



りげっとおばあさんの家には、いろいろな動物がいる。一番小さい子ネコのぴっちは一人で外へ行き、立派なオンドリに会う。ぴっちはオンドリになりたくて、「こけこっこう!」と真似るが、オンドリたちがけんかを始めたので逃げ出す。ヤギにもアヒルにもなれず、ウサギ小屋で夜を過ごす。夜中にキツネたちにおそわれて、危うく犬に助けられる。仲間たちが庭でお祝いの会を開き、ぴっちはここが一番よいところだと思う。

ウサギ小屋で、大きく口をあけたキツネと翼を広げたフクロウの黒々とした姿には、荒々しい自然と恐怖を感じる。それだけに、読者はお祝いの会の底抜けの楽しさとおばあさんのごちそうに満足する。前編に『たんじょうび』がある。

49

サリーのこけももつみ

ロバート・マックロスキー 文・絵 石井桃子 訳

978-4-00-110590-2

岩波書店

1986

幼 低 中 高 11分



ある日、サリーはお母さんとこけもも山にコケモモ摘みに行く。一方、クマの親子もコケモモを食べに、山にやってくる。サリーは一人でコケモモを食べているうちに、お母さんグマをお母さんと思い込んで行ってしまふ。サリーに気づいたお母さんグマは、すぐに立ち去り、子グマを探しに行く。子グマも迷った末、サリーのお母さんに近づき、バケツの実を食べてしまふ。お互いに相手を勘違いした2組は、やがて再会を果たし、無事家に帰る。

2組の親子の動きが、絵と文で手に取るようにわかり、子供たちはすれ違いのドラマにはらはらしながら聞く。単色で描かれた絵は遠くからもよく見え、山にいる気分を満喫できる。地味な本だが、丁寧に読み聞かせると喜ばれる。

50

じごくのそうべえ 桂米朝・上方落語・地獄八景より

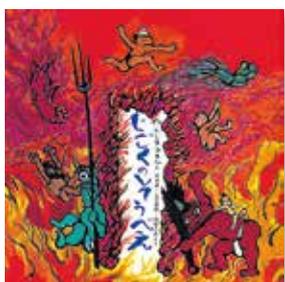
たじまゆきひこ 作

978-4-494-01203-9

童心社

1978

幼 低 中 高 9分



綱渡りから落ちて、死後の世界へ行った軽業師のそうべえは、歯ぬき師と医者、山伏と知り合い、4人で三途の川を渡る。閻魔大王に地獄行きを言い渡され、鬼に食べられたり、熱湯の釜に放り込まれたり。その度に4人は特技を生かして、切り抜け、鬼たちは右往左往。困り果てた鬼たちは、とうとうそうべえたちを地獄から追出す。

上方落語「地獄八景」を絵本にしたストーリーは、奇想天外で、展開が速く、笑いを誘う。関西弁を活かした語り口で聞くと、さらにおかしさが増す。会話だけで話が進む場面は、間をとって、誰の発言かわかるように工夫したい。

51	しずかなおはなし サムイル・マルシャーク ぶん ウラジミル・レーベデフ え うちだりさこ やく 978-4-8340-0017-7	福音館書店	1963
		幼 低 中 高	3分



ハリネズミの家族が、しんと寝静まった真夜中の森を散歩する。とうさん、かあさんとぼうやのハリネズミにこっそりしのびよる2匹のオオカミ。ハリネズミは、まりのように丸くなり、鋭い針を逆立ててじっと耐え続ける。オオカミは、ぼうやのハリネズミをくるくる回すが、とうさん、かあさんのとがった針に刺されて、悲鳴を上げる。遠くで鉄砲の音が響き、オオカミたちは驚いて逃げて行く。ハリネズミの家族は無事家へと帰りつく。

詩のような言葉で、夜の森のドラマが静かに語られる。白い月の光を浴びて、木々がそよぎ、動物たちがひそやかに動く夜の森が眼前に広がる。題名通り心に染み入る静かなお話。2匹のオオカミが登場する場面では、文章をずらし、絵と合うように工夫したい。

52	11匹きのねこ 馬場のぼる 著 978-4-7721-0004-5	こぐま社	1967
		幼 低 中 高	6分



11匹ののらネコはいつもはらぺこ。大きい魚がいると聞いて、勇んで遠い湖にでかけると、怪物のような魚が現れる。いかだで湖に乗り出し、一斉に飛びかかったが、跳ね飛ばされてしまう。ある晩、島の上で寝ている魚を見つけ、力をあわせて捕まえる。みんなに見せるまで絶対食べないと約束して、帰途に着くが、真つ暗闇の夜が明けると、ネコたちは大きなお腹になり、魚は骨だけになっていた。

とらねこたいしょうとネコたちが活躍する『11匹きのねこシリーズ』の第一作。くいしんぼうのネコたちの言動はとぼけた味わいがあり、笑いと共感を誘う。あっけらかんとした結末も納得できる。漫画家による絵は親しみやすく、本になじみのない子供でも気軽に楽しめる。

53	しょうぼうじどうしゃじぶた 渡辺茂男 さく 山本忠敬 え 978-4-8340-0060-3	福音館書店	1966
		幼 低 中 高	7分



じぶたは、古いジープを改良したちびっこ消防車。同じ消防署の梯子車と高圧車、救急車は、大きな火事に活躍するのを自慢し、小さな火事にしか出勤しないじぶたをばかにしている。ある日、山小屋が火事になり、せまい険しい山道に強い、ジープのじぶたが大活躍。新聞にも報じられ、一躍子供たちの人気ものになる。

半世紀以上読み継がれた古典的絵本。一生懸命働く消防車や消防署の緊迫した雰囲気は、時代を越えて子供たちを魅了する。子供は、小さなじぶたになりきって聞く。きびきびした文章と、写実的だがどこか表情が感じられる絵は、迫力があり、乗り物好きの子を満足させる。

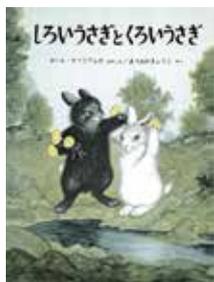
54	ジルベルトとかぜ マリー・ホール・エッツ 作 たなべいすず やく 978-4-572-00211-2	富山房	1975
		幼 低 中 高	6分



「おーい」と風が戸口で呼ぶと、〈ぼく〉は風船を持って出て行く。初め、風は大人しく風船を浮かべているが、突然さっと木の上に持っていき、返してくれない。風は洗濯物と遊ぶのも好き。りんごの実を木から落としてもくれる。でも風が強くなって、木を折ったり、柵を壊したりすると、〈ぼく〉は怖くなって家に駆け込む。

男の子と風のつきあいを描いた絵本。目に見えない風を見えるようにありありと感じさせる。子供は、ジルベルトとともに、体に風を感じ、自分の体験と重ねることが出来る。繊細な絵を味わうには、少人数向き。

55	しろいうさぎとくろいうさぎ ガス・ウイリアムズ ぶん・え まつおかきょうこ やく 978-4-8340-0042-9	福音館書店	1965
		幼 低 中 高	6分



白いウサギと黒いウサギが広い森に住んでいた。2匹が馬跳びをしていると、黒いウサギが座り込んで悲しそうな顔をする。白いウサギがわけを聞くとちょっと考えていたのだと答える。水を飲んでも、タンポポを食べても、黒いウサギは悲しそう。黒いウサギは、いつもいつまでも白いウサギといられるようにと願い事をしていたのだ。そこで2匹は一生懸命そのことを願って結婚し、それからは楽しく暮らす。

墨絵のような絵が、草原の広がりや澄み切った月の光などを幻想的に映し出す。一本一本の毛まで丁寧に描かれたウサギは、触りたくなるような愛らしさがある。センチメンタルにならないように読みたい。

56

しんせつなともだち

方軼羣 作 君島久子 訳 村山知義 画

978-4-8340-0132-7

福音館書店

1987

幼 低 中 高 4分



寒い冬、雪の中で子ウサギはカブを二つ見つける。一つを食べて、残りは友達のロバの留守宅に置いてくる。雪が降って食べ物がないだろうと思ったのだ。ロバは、サツマイモを見つけて家に帰ると、カブがあったので、イモを食べて、カブは友達の子ヤギに届ける。子ヤギは子ジカに、子ジカはウサギにカブを届ける。満腹で寝ていた子ウサギが目覚めると、自分のカブが友だちの手で戻ってきたことを知る。

横長の画面を舞台のように使った素朴な温かみのある絵で、動物たちの行動がはっきり描かれている。文章にはない、動物たちのログハウスや和風の家での暮らしが描き込まれている絵は、物語を膨らませている。

57

スキーをはいたねこのヘンリー

メリー・カルホーン 文 エリック・イングラハム 絵 猪熊葉子 訳

978-4-86057-028-6

リブリオ出版

2002

幼 低 中 高 14分



後ろ足で立って歩くのが好きなネコのヘンリー。ある日うちの人たちと出かけるが、雪の山小屋に置き去りにされる。ヘンリーは、初めてネコ用のスキーを履いて、山を下りることにする。よちよちと歩いていくうちに、だんだん調子が出て、風を切って坂を滑り、大ジカやウサギと競争する。日が暮れてくたびれた頃、コヨーテが追いかけてくる。もうだめかという時、急な斜面に出て、一気に滑り降り、探しに来た家族に再会、ほっとして甘える。

ヘンリーが松の枝をストックに、雪の斜面をさっそうと滑る姿は真に迫っている。雪山の変化が美しく描かれ、物語に真実味を添えている。続編がある。

58

すてきな三にんぐみ

トミー＝アンゲラー さく いまえよしとも やく

978-4-03-327020-3

偕成社

1969

幼 低 中 高 4分



黒マントに黒い帽子の泥棒3人組。夜になると馬車を止め、乗客のお金や財宝を奪って、山の隠れ家に運び込む。ある晩、馬車にいたのは小さなティファニーちゃん一人。隠れ家に連れてこられたティファニーちゃんは宝の山を見て、これをどうするのと聞く。3人組は相談して、淋しく暮らしている孤児を沢山集め、お城を買って、みんな一緒に暮らすことに。子供たちはどんどん増えて村を作り、3人組のような三つの高い塔を建てた。

「おどしのどうぐはみつ。ひとつ、ラッパじゅう。ふたつ、こしょう・ふきつけ。」など、リズムカルでメリハリの効いた文が、活劇風のストーリーに合っている。黒いシルエットで描かれた泥棒たちが印象深い。幅広い年齢の子供に喜ばれる。

59

スモールさんのうじょう

ロイス・レンスキー ふん・え わたなべしげお やく

978-4-8340-2019-9

福音館書店

2005

幼 低 中 高 4分



スモールさんは、農場に住んでいる。朝早く起きて家畜小屋の動物たちにえさをやり、牛乳を絞って、トラックに牛乳缶を乗せる。ウシを牧場へ連れて行く。このようにスモールさんの一日の仕事は続く。春にはトラクターで畑を耕し、夏には麦刈り。お百姓さんの一日と一年がわかる絵本。

素朴な絵と具体的な行動を語る無駄のない文章が、子供に農場の仕事をはっきりと教えてくれる。実際に体験したような気分を味わえる。スモールさんのシリーズには『スモールさんはおとうさん』『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』などがある。

60

せんたくかあちゃん

さとうわきこ さく・え

978-4-8340-0897-5

福音館書店

1982

幼 低 中 高 7分



洗濯の大好きなかあちゃんがいた。ある日ネコや犬、子供、下駄や傘までごしごし洗い、庭に干すと、かみなり様が落ちてくる。かあちゃんが無理矢理かみなり様を洗うと、目鼻が消えてしまう。子供たちがクレヨンで描いてやると、すっかりいい男になり、大喜びで空に帰る。次の朝、汚れたかみなり様がたくさん落ちてきて、「せんたくしてくれえ」「いいおとこにしてくれえ」とかあちゃんに頼む。

元氣なかあちゃんの活躍が、動きのある親しみやすい絵で描かれ、気軽に楽しめる。台所道具や子供、ネズミ、時計、ソーセージなどあらゆるものが干されている場面やかみなり様がひしめいている絵が圧巻。細かいところまで楽しむには、少人数がよい。

61	そらいろのたね なかがわりえこ さく おおむらゆりこ え	978-4-8340-0084-9	福音館書店				1967
			幼	低	中	高	5分



ゆうじくんが森のキツネと取り替えた〈そらいろのたね〉を埋めると、豆ぐらいの空色の家が出てきた。家は少しずつ大きくなり、「おや、すてき！」とヒヨコや、ネコ、ブタが入っていく。家はお城のように大きくなり、町中の子供と森中の動物もやってきた。そこへキツネが来て「ぼくのうちだからね」とみんなを追い出すと、空色の花びらが散るように家は崩れてしまう。

地面から生えた家が、お日さまの光と水をもらって、どんどん育っていく様子は、子供の等身大の憧れと共感を呼ぶのか、多くの子に喜ばれる。明るい色彩の親しみやすい絵も人気で、『ぐりとぐら』や『いやいやえん』の主人公が登場するのも楽しい。春の読み聞かせに。

62	ターちゃんとうりかん ドン・フリーマン さく さいおんじさちこ やく	978-4-593-50007-9	ほるぷ出版				1976
			幼	低	中	高	7分



夏休み、ターちゃんは両親と海辺へキャンプにやってくる。新しい長靴をはいて魚釣りに出かけると、去年仲良かったペリカンと再会する。ターちゃんが砂浜で長靴を脱ぎ、杭に腰かけると、目の前でペリカンは海へ飛び込み、魚をひとすくいして飛んでいく。やがて潮が満ち、長靴はどこかに流されてしまう。ターちゃんが砂山を登って探しに行くと、ペリカンがいて、大きく開けた口の中には長靴があった。

ターちゃんとうりかんとの交流をゆったりと描く。横長な紙面を使って、子供の目線で海や海岸の変化を見事にとらえている。目立たない本だが、海や海の生き物を身近に感じられ、読み聞かせると思いのほか子供たちに喜ばれる。

63	だるまちゃんとうんぐちゃん 加古里子 さく・え	978-4-8340-0124-2	福音館書店				1967
			幼	低	中	高	5分



だるまちゃんは、てんぐちゃんの持っているうちわがほしくて、お父さんのだるまどんにねだる。お父さんは家中のうちわを出してくれるが、どれもてんぐちゃんのうちわとは違う。だるまちゃんはヤツデの葉のうちわにすることを思いつく。てんぐちゃんはだるまちゃんのヤツデの葉のうちわを見て、ほめてくれる。だるまちゃんは、てんぐちゃんの持っている帽子やはきもの、鼻も工夫して手に入れ、二人は仲良く遊ぶ。

帽子やはきものがたくさん並んだ場面が楽しい。だるまちゃんとうんぐちゃんのやりとりやだるまどんの「これはおおまがいのとんちんかん」など時代がかったせりふが、味わい深い。細部まで楽しむには、少人数向き。ユニークな主人公たちが活躍するだるまちゃんシリーズは他にもある。

64	ちいさいおうち バージニア・リー・パートン ぶんとなえ いしいももこ やく	978-4-00-110553-7	岩波書店				1965
			幼	低	中	高	15分



静かな田舎にちいさいおうちが建っていた。ちいさいおうちは移り変わる一年の景色を眺め、幸せに暮らしていたが、やがて周りに道路ができ、家がどんどん建ち始める。車や電車が走り、高架線や高いビルに囲まれ、ちいさいおうちに住む人は誰もいなくなる。そこへおうちを建てた人の子孫がやってきて、広い野原の真ん中におうちを移すことにする。新しい場所に落ち着いたちいさいおうちは、うれしそうにっこりする。

日本では1965年の初版以来、読み継がれた古典的絵本。ヒナギクの咲く田舎に住み、やがて高層ビルに囲まれるおうちは、生き物ではないが、表情が感じられ、子供はおうちの運命に心を寄せる。見返して、ちいさいおうちとその時代の歴史をたどるなど、隅々まで楽しめる。

65	ちいさなねこ 石井桃子 さく 横内裏 え	978-4-8340-0087-0	福音館書店				1967
			幼	低	中	高	4分



小さなネコは、お母さんネコが見ていない間に、一人で外に出かける。子供に捕まって逃げ出したり、車にひかれそうになったりして走っていくと、大きな犬と出会う。犬に追われて、木に登って鳴いていると、お母さんネコが駆けつける。お母さんは犬を追い払い、我が子を口にくわえて家に連れ帰る。小さなネコはお母さんにおっぱいをもらう。

小さなネコの動きを具体的にとらえた文章と写実的な絵が事件を的確に物語り、幼い子はネコになりきって聞く。「ちいさなねこ、おおきなへやにちいさなねこ」で始まる文章はリズム感がある。素直に読めば、自然と場面の緊迫感などを伝えることができる。物語絵本を読み始めた幼い子にふさわしい。

66 **ちいさなヒッポ**
 マーシャ＝ブラウン さく うちだりさこ やく 978-4-03-327250-4

偕成社 1984
 幼 低 中 高 4分



カバのヒッポは、生まれたときからいつもお母さんといっしょ。ヒッポはお母さんから、カバの言葉、「グアオ」を教わる。ある日、カバたちが川底で眠っているとき、ヒッポは一人で水面へ行き、大きなワニにつかまってしまう。ヒッポが「グアオ！たすけて！」と叫ぶと、お母さんも大声で叫び返し、ワニをくわえて振り回す。それからヒッポはお母さんに、どんな時でも「グアオ」を忘れてはいけないと言われる。

「グアオ！こんばんは」「グアオ！あぶないよ」と繰り返されるカバの言葉を丁寧に読みたい。木目を生かした版画により、アフリカの草原や川辺で暮らすカバたちが伸び伸びと描かれている。ページの隅に、ワニの姿をいち早く見つけ、危ないと注意する子供もいる。

67 **ちびゴリラのちびちび**
 ルース・ボーンスタイン さく いわたみみ やく 978-4-593-50077-2

ほるぶ出版 1978
 幼 低 中 高 3分



小さなかわいいゴリラのちびちび。お母さんもお父さんも、動物たちはみんなちびちびが大好き。ライオンはちびちびを喜ばせようと尻尾を引っ張らせてくれる。カバのおばあさんは背に乗せてどこでも連れて行ってくれる。ところがある日、ちびちびは大きくなり始める。どんどん大きくなって、とうとう立派なゴリラに。動物たちがちびちびのところへやってきて、「おたんじょうびおめでとうちびちびくん！」と歌ってくれる。

小さくてかわいかったちびちびが、画面から溢れるほど大きく成長する姿に子供たちはびっくりする。そして「みんなはいまでもちびちびがだいすきです」という最後の文章に安心する。誰からも愛され、大切にされるちびちびの幸せがまっすぐに伝わってくる。

68 **チムとゆうかなせんちょうさん**
 エドワード・アーディゾーニ さく せたていじ やく 978-4-8340-1711-3

福音館書店 2001
 幼 低 中 高 12分



海岸に住んでいるチムは船乗りになりたいと思っているが、両親は許してくれない。ある日こっそり汽船に乗り込むが、見つかり、船長の命令で甲板掃除をさせられる。チムはつらい仕事にも一生懸命取り組み、やがて船員たちから頼りにされるようになる。しかし嵐が来て船は岩にぶつかり横倒しに。船に取り残されたチムが、船長とともに波にのまれそうになったとき、救命ボートに救われる。チムは家に帰り、両親はチムの希望を認めてくれる。

海洋冒険を描いた絵本。小さなチムが時には涙を流しながら、懸命に働き、一人前に認められていく姿に子供たちは共感する。港の様子や船での生活が丁寧に書き込まれ、読者は船や船員の生活への憧れをかきたてられる。細部の絵を楽しむには少人数がよい。

69 **つきのぼうや**
 イブ・スパンク・オルセン さく・え やまのうちきよこ やく 978-4-8340-0456-4

福音館書店 1975
 幼 低 中 高 5分



つきのぼうやは、お月さまに、地上の池にいるもう一人のお月さまを連れてくるように頼まれ、空を駆け下りていく。雲や飛行機、鳥の群れを過ぎ、丘の上まで降りてくる。さらに街の通りへ降り、船着場を越え、水中に飛び込むと、水底で手鏡が光っている。のぞきこむと、つきのぼうやの顔が写る。ぼうやはかわいいお月さまを見つけたと思って、手鏡を持ち帰る。お月さまは、鏡に写る自分を美しい友達だと思って幸せになる。

つきのぼうやが上から下へ落ちていく場面を縦長の本の形を生かして描いている。明るい空色を背景に、つきのぼうやが下りながら、リンゴもぎの女の子からリンゴをもらったり、煙の中を通過して真っ黒になったりする場面に、絵巻を見るようなおもしろさがある。

70 **ティッチ**
 パット・ハッチンス さく・え いしいもこ やく 978-4-8340-0449-6

福音館書店 1975
 幼 低 中 高 2分



ティッチは小さな男の子。兄さんのピートと姉さんのメアリは大きな自転車を持っているが、ティッチが持っているのは小さな三輪車。兄さんたちは木や家の上まで上がる凧を持っているが、ティッチの凧車は手の中で回るだけ。ピートは大きなシャベルを、メアリは大きな植木鉢を、ティッチは小さな種を持っている。その種を植木鉢にまくと、芽を出してぐんぐん伸び、皆の背丈よりも大きくなった。

ティッチの持ち物は、凧車、ラップ、釘、種とどんどん小さくなる。それだけに最後の逆転が、胸のすくような快感を残す。幼い子供から楽しめるが、最後の逆転を理解できないこともある。聞き手の兄弟関係によっても受け止め方が異なるなど、興味深い。

71	どうながのプレツェル マーグレット・レイ ぶん H.A.レイ え わたなべしげお やく 978-4-8340-0731-2	福音館書店	1978
		幼 低 中 高	5分



5月のある朝、5匹のダックスフントが生まれる。その中の一匹、プレツェルは胴がずんずん伸び、世界一胴長のダックスフントになる。誰もが注目するのに、向かいの家のグレタだけは知らん顔。プレツェルはグレタに結婚を申し込むが、「どうながなんてだいきらい」と言われてしまう。ある日、グレタが深い穴の中に落ちて泣いていると、プレツェルが穴の中へ長い胴を伸ばし、救い上げてくれる。2匹は結婚し、5月のある朝、5匹の子犬が生まれる。

明るく親しみやすい絵が、ストーリーをしっかりと語り、誰もが楽しめる絵本。長い胴体のプレツェルが得意そうに歩く様子がユーモラスで、結末もほほえましい。5月の読み聞かせにぴったり。

72	時計づくりのジョニー エドワード・アーディゾーニ 作 あべきみこ 訳 978-4-7721-0147-9	こぐま社	1998
		幼 低 中 高	17分



ジョニーは手先が器用で、物を作るのが上手。『大時計のつくりかた』という本を読み、自分も作ろうと思いつが、親も学校の先生も相手にしてくれない。学校の子たちにはいじめられ、部品はなかなか手に入らない。でも友達のスザンナや鍛冶屋のジョーに助けられ、ついに大時計は完成する。ある日、どんな時計でも作れる道具をお父さんから贈られ、ジョニーはジョー、スザンナと共に時計作りの会社をつくる。

鍛冶屋や振り子の大時計など時代を感じさせるが、小さなジョニーが勇気と智慧をふりしぼって、根気強く立派な時計を作り上げる工程には誰もが魅了される。大時計の仕組みにさりげなく触れている点も子供の興味をそそる。

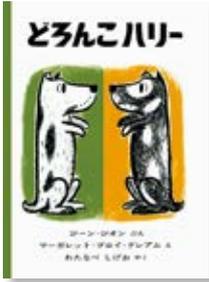
73	どろんここぶた アーノルド・ローベル 作 岸田稔子 訳 978-4-579-40243-4	文化出版局	1971
		幼 低 中 高	9分



お百姓さんの家の子ブタは、柔らかい泥んこに沈んでいくのが大好き。ある朝、お百姓夫婦は家中を大掃除し、ブタ小屋の泥もきれいにしてしまう。子ブタは怒って家から逃げ出し、大きな町までやってくる。そこで泥んこだと思い、セメントの中に飛び込んでしまう。動けなくなった子ブタの周りに町中の人が集まってくる。通りかかったお百姓さんに助けられ、無事我が家に帰ると、大好きな泥んこができていて、子ブタは喜んで座り込む。

泥んこに満足そうに沈んだり、情けない様子でセメント漬けになったり、子ブタの表情が豊か。幅広い年代に喜ばれる。版型が小さいので、少人数向き。

74	どろんこハリー ジーン・ジオン ぶん マーガレット・プロイ・グレアム え わたなべしげお やく 978-4-8340-0020-7	福音館書店	1964
		幼 低 中 高	5分



ハリーは、黒いぶちのある白い犬。お風呂が大嫌いで、ある日、お風呂にお湯を入れる音を聞くとブラシを裏庭に埋め、外へ抜け出す。蒸気機関車の煙でススだらけになり、工事現場で遊び、すっかり汚れて、白いぶちのある黒い犬になってしまう。家に帰るが、家の人たちはハリーだとわからない。ハリーは裏庭に埋めたブラシを掘り出して口にくわえ、家のお風呂に飛び込むと、子供たちが洗ってくれ、やっとハリーだとわかる。

黒いぶちのある白い犬が、白いぶちのある黒い犬になり、お風呂嫌いのハリーが体をきれいにしてもらいたがるなど逆転の現象が愉快。挿絵も親しみやすく、遠くからもよく見え、読み聞かせに最適。『うみべのハリー』『ハリーのセーター』があり、季節に合わせて楽しめる。

75	なにをかこうかな マーグレット&H・A・レイ 作 中川健蔵 訳 978-4-579-40194-9	文化出版局	1984
		幼 低 中 高	4分



ウサギのビリーが絵を描いていると、子犬のペニーがやってきて、頭を描かなくては、と言ってビリーの絵に自分と同じような頭を描きたす。次にアヒルのグレタが水かきを、ヤマアラシが針を、ニワトリがとさかを描き加える。みんなが描き加えたので、変な絵になってしまい、ビリーは自分の絵が描きたかったと泣き出す。みんなも自分の絵が描きたかったことに気づき、それぞれ自分の絵を描き始める。ビリーも絵が完成して大満足。

話が進むにつれて、動物の絵がおかしなことうになっていくのが、おもしろい。左右のページで同じような絵が並ぶので、幼い子供たちには読んでいる場面を指差した方がわかりやすい。明るい単純な挿絵は誰からも喜ばれる。

76

にぐるまひいて

ドナルド・ホール ぶん バーバラ・クーニー え もきかずこ やく

978-4-593-50139-7

ほるぶ出版				1980
幼	低	中	高	7分



10月、家中で一年間かけて作り育てたものを荷車につみこむ。父さんはウシに荷車をひかせて、遠いポーツマスの市場に10日かけて行き、ヒツジの毛、ショール、ろうそく、ほうぎ、じゃがいもを売る。最後には荷車やウシまで手放し、町の店で鍋と刺繍針、ナイフ、はっかキャンディを買って、家へと帰る。家族は新しい鍋で夕飯を食べ、ナイフで木を削り、刺繍をしながら冬を越す。春になると辺りの自然が目覚まし、家族は作物を植える。

100年以上前のアメリカの農民の生活を淡々と伝えている。自然の中で、力を合わせて働く家族の喜びが、暖かい素朴な絵から伝わってくる。木々に囲まれた家や空色の荷車、敷物やほうぎなど、手作りの品の美しさが印象深い。秋の読み聞かせにふさわしい。

77

二ひきのこぐま

イーラ 作 松岡享子 訳

978-4-7721-0100-4

こぐま社				1990
幼	低	中	高	7分



春になるのを待ちかねていた2匹の子グマは、お母さんが出かけている間に、外へ飛び出す。草原でおいかけっこや隠れんぼ、木登りをしているうちに、気がつくとき迷子になってしまう。子ウシやウマにたずねても、お母さんは見つからない。そこへカラスが飛んできて、子グマをしかる。くたびれた子グマは一眠り。カラスが子グマを探していたお母さんを案内してくれ、親子は無事に再会する。

モノクロの写真絵本。草原を飛び回ったり、タンポポの匂いをかいだり、木登りをしたり、伸び伸びと振舞う子グマの姿を自然にとらえている。本物のクマたちが、お話の主人公になっている点が、何よりも魅力である。

78

ねえ、どれがいい？

ジョン・バーニンガム さく まつかわまゆみ やく

978-4-566-00198-5

評論社				2010
幼	低	中	高	4分



「もしもだよ、きみんちのまわりがかわるとしたら、こうずいと、おおゆきと、ジャングルと、ねえ、どれがいい？」に始まり、次々に奇想天外な質問が続く。「クモのシチュー、カタツムリのだんご、ムシのおかゆ、ヘビのジュース」のどれがいいかなど、選択に悩む質問ばかり。最後は「もしかしてほんとうは、もうじぶんのベッドでねむりたい？」思わず「うん」と答えてしまう問いかけで終わる。

笑ってしまうような質問から、どれも選びたくないという質問までさまざま。読み手と聞き手がやりとりをしながら楽しむことができる。「これがいい」「これはいや」などいろいろな意見や考えが飛び交い、一味違った読み聞かせができる。

79

ねこのくにのおきやくさま

シビル・ウェッタシンハ さく まつおかきょうこ やく

978-4-8340-1364-1

福音館書店				1996
幼	低	中	高	10分



ネコの国の人たちは、働き者で何不自由なく暮らしていたが、何かが足りないと感じていた。ある日お面をかぶった二人組が、船でやってきた。二人は太鼓をたたいて歌い、踊った。ネコたちは初めて聞く歌と踊りが大好きになり、王様は、お客にお面を取るように頼む。お面の下から現れたのはネズミ。王様は二人へ感謝し、その勇気をたたえて、決して食べてはならないとネコたちに命じる。ネズミたちは島を去るが、楽しむことを知ったネコたちは幸せになる。

不気味なお客たちの訪問で始まったお話が、やがて楽しい場面になり、最後に大逆転へと導かれる。起承転結のはっきりしたストーリーに、多くの子供がひきつけられる。丸々太ったネコたちやお面をかぶった不思議なお客の絵は、動きがあって、ユーモラス。

80

ねずみくんのチョコッキ

なかえよしを 作 上野紀子 絵

978-4-591-00465-4

ポプラ社				1974
幼	低	中	高	2分



お母さんに編んでもらった赤いチョコッキは、ねずみくににぴったり。それを見たアヒルが「ちょっときせてよ」と借りて着る。それを見て、「ちょっときせてよ」とサルが着て、オットセイが着て、チョコッキは次々と借りられ、少しずつ伸びていく。ゾウが着ているのを見つけたねずみくんは、伸びきったチョコッキにがっかり。最後の場面では、ゾウが、チョコッキの真中にねずみくんと座らせて、鼻のブランコで遊んでいる。

会話の繰り返しで話が進むので、間をとって読むとわかりやすくなる。チョコッキを無理やり着ている動物たちの表情はおかしく、またどんどん動物が大きくなる展開にも期待が高まる。軽いお話なので、おはなし会ではしっかりしたストーリーの本と組み合わせるとよい。

81 のろまなローラー
小出正吾 さく 山本忠敬 え

978-4-8340-0089-4



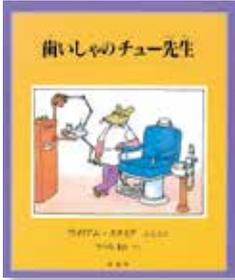
ローラーが、重い車をごろごろ転がし、道を平らにしながらか進んでいる。大きなトラックや立派な自動車が、のろまなローラーをばかにして、追い越していく。それでも汗をかきかき道を直していくと、追い越していった車たちがパンクで立ち往生している。ローラーは車たちを励まして先へ行く。やがて修理を終えた車が追いつき、いばったことを謝り、お礼を言うと元気よく走り去る。ローラーは山の上まで来ると、今度は後戻りしながら帰っていく。

福音館書店				1967
幼	低	中	高	6分

まっすぐ前を進むローラーと3台の車が繰り返し登場する単純で安定した構成である。子供は、周囲から何を言われても、最後には立派な仕事をして、みんなから感謝されるローラーに自分を重ねて楽しむ。簡略化した町を背景に、やや擬人化された車が力強く描かれ、車好きの子供に喜ばれる。

82 歯いしゃのチュー先生
ウィリアム・スタイグ ぶんとえ うつみまお やく

978-4-566-00290-6



ネズミのチュー先生は、とても腕利きの歯医者で、大きな動物には口の中に入って治療をする。ネコや危険な動物の治療はお断りだが、ある日歯が痛くて泣いているキツネの治療をしてあげることになる。ところがキツネは痛みがとれてくると、恩を忘れ、先生を食べようとする。それに気づいたチュー先生とおくさんは、治療の仕上げにもう虫歯にならない薬と言って、歯がぴったりくっつく液体をぬって、キツネに見事仕返しをする。

評論社				1991
幼	低	中	高	9分

小さなチュー先生が、ハシゴや滑車を使って大きな動物の歯を治療する様子などがわかりやすく描かれていて、楽しい。悪巧みをめぐらすキツネが逆にだまされるのもおかしく、子供たちに支持される絵本。続編に『ねずみの歯いしゃさんアフリカへいく』がある。

83 はけたよはけたよ
かんざわとしこ ぶん にしまきかやこ え

978-4-03-204030-2



たつくんはパンツをはこうと片足を上げるが、ひっくり返ってしまう。何べんやってもはけない。嫌になってお尻を出したまま外に飛び出すと、動物たちが寄ってきて、しっぽのないお尻を見て笑う。家へ帰り、お母さんに汚れたお尻を洗ってもらい、パンツをはこうとするが、またひっくり返る。それならと、尻もちをついたままはいてみたら、上手くはけた。お母さんが縫ってくれた赤いズボンをはいて、たつくんは得意顔で動物たちに見せに行く。

偕成社				1970
幼	低	中	高	4分

パンツを自分ではける幼児たちにとっては、ちょっと優越感を持って楽しめる絵本。パンツをはかず飛び出すたつくんや、お母さんにお尻を洗ってもらう場面、動物たちがしっぽをびゅうっとふってみせる場面など、うれしそうに聞いている。

84 はじめてのおつかい
筒井頼子 さく 林明子 え

978-4-8340-0525-7



5歳のみいちゃんは、ママに頼まれて牛乳を買いに、はりきって出かける。自転車にどぎんとしたり、友達と会ったり、ころんでお金を落したり。やっと着いたお店には誰もおらず、呼んでも返事がない。他のお客がやってきて、声をかけるとおばさんが出てくるが、みいちゃんには気がつかない。みいちゃんが意を決して大声で呼ぶと、やっとおばさんが出てきて、気づかなかったことを謝る。こうしてみいちゃんは牛乳を買うことができた。

福音館書店				1977
幼	低	中	高	6分

初めておつかいに行く子供の誇らしさと緊張が伝わり、子供たちは自然にみいちゃんに寄り添って物語に入る。横長の画面を生かして、町や家の様子を丁寧に描いている。看板の文字や人々や動物を丹念にたどると、物語とは別の発見ができて楽しい。

85 はたらきもののじょせつしゃけいていー
バージニア・リー・パートン ぶんとえ いしいももこ やく

978-4-8340-0509-7



トラクターのけいていーは、じえおぼりすという町の道路管理部で働いている。夏には道路を直し、冬になると除雪車になる。ある日大雪が降り、人も車も外に出られなくなると、けいていーは警察署、郵便局、駅の前など町中の雪を次々とかきのけ、道をつけていく。おかげで車は走り、人々は外に出られるようになる。けいていーはどんなに疲れても最後まで仕事をやり遂げ、家に帰る。

福音館書店				1978
幼	低	中	高	10分

雪におおわれた静かな町をけいていーだけが最初から最後まで、一生懸命働いている。真っ白だった町から、道や家、建物が現れ、人々が動き出す。子供たちは最後までがんばって働くけいていーを心から応援し、絵の細部まで楽しむ。

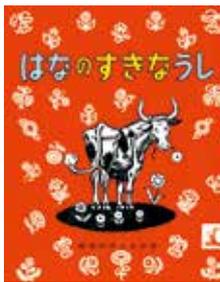
86	はちうえはぼくにまかせて ジーン・ジョン さく マーガレット・ブロイ・グレアム え もりひさし やく 978-4-89274-016-9	ペンギン社	1981
		幼 低 中 高	8分



トミーは、夏休みに旅行する人の鉢植えを預かることにした。家中が鉢植えでいっぱいになり、トミーはご機嫌だが、おとうさんは不機嫌。ある晩、トミーは植物がどんどん伸びて家を壊す夢を見る。そこで図書館の本で調べて、伸びすぎた木を刈りこみ、切った枝を小さな鉢に植える。やがて旅行してきた人が帰ってきて、前より元気になった植物に大喜び。トミーは子供たちに小さな鉢植えをあげる。次の日一家はいなかへ遊びに出かける。

ジャングルのようになった居間や鉢植えだらけの風呂場、トミーの夢の場面、また、お父さんとのやり取りがおもしろい。夏休み前の読み聞かせにぴったり。トミーとお母さんの会話で始まる冒頭がわかりにくい。表題紙から話が始まるので、丁寧に見せていくとよい。

87	はなのすきなうし マンロー・リーフ おはなし ロバート・ローソン え 光吉夏弥 やく 978-4-00-115111-4	岩波書店	1954
		幼 低 中 高	11分



昔、スペインにふえるじなんどという子ウシがいた。他の子ウシは駆け回っていても、ふえるじなんどは一人静かに花の匂いをかいでいるのが好きだった。ある日、マドリッドから闘牛選別に男たちがやってきた。そのとき、ふえるじなんどはハチに刺され大暴れ。それを見た男たちは、猛牛と信じ闘牛場へ連れていく。ふえるじなんどは、女の人が頭に差している花の匂いをかいで、闘牛士たちには知らん顔。とうとう牧場に戻され、幸せに暮らす。

1954年の初訳以来、長い間読まれ続けた絵本。黒一色の絵が、ウシや人物の動きを活写している。コルクの木にコルクの栓が突っていたり、気取った闘牛士の様子などに、ユーモアが漂う。闘牛士とふえるじなンドの対決と、意表を突く結末が暖かな読後感を残す。

88	はなをくんくん ルース・クラウス ぶん マーク・シーモント え きじまはじめ やく 978-4-8340-0095-5	福音館書店	1967
		幼 低 中 高	3分



森に雪が降っている。雪の下の穴や木の洞の中で、野ネズミやクマ、カタツムリ、リスたちが眠っている。突然、みんな目を覚まし、鼻をくんくんさせながら、雪の上を走っていく。たくさんの動物の群れが一斉に同じ方向にかけていく。みんなが鼻をくんくんさせて、立ち止まって、笑ったり踊ったり。その真ん中には、雪の中に黄色いお花がひとつ咲いている。

雪が降る幻想的な森と愛嬌のある動物たちを墨絵のようなモノクロで描いている。モノクロに慣れた目に、最終場面の明るい黄色い花が印象深い。表紙も黄色と黒で、早春を思わせる作りになっている。春を迎える季節に読みたい。

89	はらぺこあおむし エリック＝カール さく もりひさし やく 978-4-03-328010-3	偕成社	1989
		幼 低 中 高	3分



葉っぱの上の小さな卵から生まれたあおむしは、おなかがぺこぺこ。月曜日にリンゴを1つ食べるが、まだおなかはぺこぺこ。火曜日にはナシを2つ、水曜日にはスモモを3つ食べる。こうして一週間食べ続けたあおむしは、土曜日にはおなかが痛くなる。でも次の朝に葉っぱを食べると元気になり、ちっぽけだった体は大きくなる。さなぎになって何日も眠り、やがてきれいなチョウになる。

コラージュの絵には独特の味わいがある。あおむしが食べた穴から顔をのぞかせる繰り返しが、幼い子供にも、ストーリーの展開を目に見えるようにわからせてくれる。単純な仕掛けが、大きな効果をあげているので、素直に読み聞かせたい。

90	はろるとむらさきのくれよん クロケット・ジョンソン 作 岸田衿子 訳 978-4-579-40245-8	文化出版局	1972
		幼 低 中 高	8分



はろるとは月夜の散歩がしたくなり、紫のクレヨンで月と道を描いて歩き出す。はろるとがクレヨンで描くものは次々と本物になり、不思議な冒険が始まる。ドラゴンを描くと、怖くなって手が震え、線が波型に。波型の線はいつの間にか水になり、はろるとはおぼれそうになるが、すばやくボートを描いて乗り込む。冒険の末、疲れて帰りたくなる。そこで自分の家の窓とベッドを描き、ベッドに入って眠る。

はろるとのクレヨンから思いもかけない絵が生まれ、どんどん話が進んでいく。読者も参加しているような楽しさがあり、親しみやすく、だれもが気軽に楽しめる絵本。続編に『はろるとのふしぎなぼうけん』と『はろるとまほうのくにへ』がある。

91

ハンダのびっくりプレゼント

アイリーン・ブラウン 作 福本友美子 訳



ハンダは、果物を七つ入れた籠を頭に寄せ、友達のアケヨの村へ歩いていく。するとサルが木から手を伸ばしてバナナを取る。次はダチョウがグアバを取り、他の動物も次々と果物を皆取ってしまうが、ハンダは気づかない。村まで来るとヤギが飛び出してミカンの木に激突。その勢いでミカンが籠の中にたくさん落ちる。ハンダは知らずに籠に入ったミカンをアケヨにプレゼント。アケヨはびっくりするが、ハンダはもっとびっくりする。

光村教育図書

2006

幼 低 中 高 4分

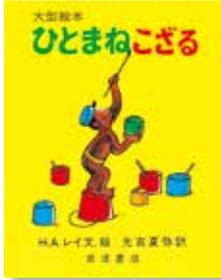
アフリカのケニアを舞台にしたお話。文章には動物の行動は全く書かれていない。読者だけが、動物たちが果物を取っていくのを目撃する。絵を読む楽しさが味わえる。鮮やかな色彩あふれる果物や動物、アフリカの子供たちの様子が生き生きと伝わってくる。

92

ひとまねこざる

H.A.レイ 文・絵 光吉夏弥 訳

978-4-00-110922-1



知りたがりやの子ザルのじょーじは、動物園から逃げ出し、バスの屋根に乗って町を見物。おなかすいて、レストランの台所でスパゲッティを鍋から食べていると、コックさんに見つかり、皿洗いを手伝う。次に高いビルの窓ふきの仕事を紹介してもらう。ここでもじょーじは、知りたがりぶりを発揮して、次々事件を起こし、最後は黄色い帽子のおじさんに助けられる。じょーじは、自分が主役の映画に出演し、映画が完成すると友達を残らず招待する。

岩波書店

1983

幼 低 中 高 11分

じょーじは、やりたいことをやって窮地に立たされるが、必ず親切な人や黄色い帽子のおじさんに助けられ、うまく切り抜ける。次から次へ事件を巻き起こすじょーじに子供は笑ったり、はらはらしたりしながら、先へ先へと読み進み幸せな結末に満足する。全シリーズ6冊。読書が苦手な子供にも喜ばれる。

93

100まんびきのねこ

ワング・ガアグ ふん・え いしいももこ やく

978-4-8340-0002-3



昔、おじさんとおばあさんが寂しいので、ネコを飼うことにした。おじさんが出かけると、ネコでいっぱい丘に出る。どのネコもかわいくて、おじさんは全てのネコを連れて帰る。しかしおばあさんからこんなにたくさんは飼えないと言われ、ネコたちに一番きれいなネコを決めさせようとする。するとみんなは喧嘩を始め、とうとう痩せた子ネコだけが残る。二人が、その子ネコにミルクをやると丸々したきれいなネコになる。

福音館書店

1961

幼 低 中 高 11分

昔話のような構成をもち、繰り返しを多用した素朴で奇想天外なお話。「ひゃっぴきのねこ、せんびきのねこ、ひやくまんびき、一おく、一ちょうひきのねこ」の繰り返しだが、耳に心地よい。ネコたちが池の水を飲み干す場面、山の草を食べつくす場面に子供たちは驚く。

94

ふきまんぶく

田島征三 文と絵

978-4-03-331010-7



夏の夜、ふきちゃんは向かいの山にきらきら光るものを見つけて行ってみると、たくさんのふきの葉っぱだった。ふきちゃんはふきの葉のように頭の上に夜露を乗せたり、茎のすべり台ですべったりして遊ぶ。ふきちゃんがみんなから「ふきまんぶく」（ふきのとう）と呼ばれていると話すと、ふきたちは喜ぶ。季節が過ぎて冬の終わり、山の中に暖かそうところが現れる。ふきちゃんが行ってみると、そこにはたくさんのふきまんぶくが顔を出していた。

偕成社

1973

幼 低 中 高 7分

夏の夜の不思議な冒険が幻想的に描かれる。村の夜道をしっかりと足取りで歩くふきちゃんから、山の子供のたくましさや土の香りが漂う。舞台は東京都日の出村、昭和40年代の村の暮らしが伝わる。

95

ふしぎなたけのこ

松野正子 さく 瀬川康男 え

978-4-8340-0068-9



山奥の村の話。たろはタケノコ掘りに行くが、ひょんなことからタケノコがたろを乗せたまま、ぐんぐん伸びてしまった。両親や村人たちが、斧でタケノコを切ると、タケノコはたろを乗せたまま、幾つもの林や山を押し分けて倒れる。村人はタケノコに沿って走り、たろのところに着く。そばには海が広がり、みんなは魚や貝を採って大喜びで村へ帰る。その後村人たちはタケノコを伝えて、海に行けるようになり、幸せに暮らす。

福音館書店

1966

幼 低 中 高 4分

昔話風の楽しいほら話。雲を突き抜けるほど伸びたタケノコを画面を縦に長くして描き、そこから倒れていく様子を見事に描いている。

96	ふしぎなナイフ 中村牧江、林健造 さく 福田隆義 え	978-4-8340-1407-5	福音館書店				1997
			幼	低	中	高	2分



表紙をめくると、ステンレスのナイフの写実的な絵。次ページには「ふしぎなナイフがまがる」の文章に、ナイフの刃がぐにやりと曲がっている。さらに「ねじれる」では、ねじれたナイフが描かれている。「おれる」「われる」「とける」と続く文章に従って、ナイフが自在に姿を変え、最後にふくらんだナイフが割れて、終わる。

リアルなナイフの絵が、思いもかけない変化を遂げるが、それでもなおリアルな感覚を失わない。白い紙にナイフだけを描いて、読者を不思議な世界へと案内する。おはなし会では、しっかりしたストーリー絵本と組み合わせるとよい。

97	フレデリック ちょっとかわったのねずみのはなし レオ＝レオニ 作 谷川俊太郎 訳	978-4-7690-2002-8	好学社				1969
			幼	低	中	高	5分



牧場の古い石垣に5匹の野ネズミが住んでいた。野ネズミたちは、冬に備えて食べ物をせっせと集めるが、フレデリックは座っているだけ。みんなが何をしているかと聞くと、フレデリックは、お日さまの光、色や言葉を集めていると答える。冬、食べ物もなくなり凍えそうになると、フレデリックは、お日さまの光や花や葉の色について話す。みんなには暖かい日の光や色が見え、舞台俳優のように詩を語り終わったフレデリックに拍手喝采する。

貼り絵を用いた独特の絵が、印象深い。象徴的なストーリーなので、やや年齢の高い子供に向く。

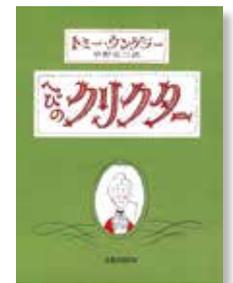
98	ふわふわくんとアルフレッド ドロシー・マリノ 文・絵 石井桃子 訳	978-4-7690-2002-8	岩波書店				1977
			幼	低	中	高	7分



おもちゃのクマのふわふわくんは、アルフレッドといつもいっしょ。でもトラのしまくんがやってくると、アルフレッドはしまくんとばかり遊ぶようになる。ある日、仲間に入れてと言ったふわふわくんをアルフレッドは投げつけてしまう。ふわふわくんは起き上がると大きな木に登り、降りてこない。アルフレッドは泣いて、また友達になると言う。ふわふわくんは飛び降り、3人はクッキーを分けあって食べる。

幼い子供同士の仲間はずれをおもちゃを通して具体的に描き、子供の共感を呼ぶ。アルフレッドの泣き声を聞いた両親が、高い枝にいるふわふわくんを降ろそうとハシゴや長い長い棒を準備する様子がユーモラス。

99	へびのクリクター トミー・ウンゲラー 作 中野完二 訳	978-4-579-40099-7	文化出版局				1974
			幼	低	中	高	7分



フランスに住むボドさんは、息子から誕生日のお祝いを受け取った。中に入っていたのはヘビ。クリクターと名づけられたヘビは、ボドさんに可愛がられ、だんだんと長く、強くなる。クリクターは学校で子供たちの勉強を手伝ったり、遊んだり、とても親切。ある晩、ボドさんの家に泥棒が入るが、クリクターは泥棒に飛びかかり、ぐるぐる巻きにしてしまう。クリクターは町中から愛され、尊敬され、長く幸せに暮らす。

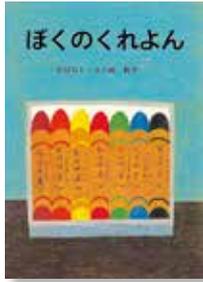
クリクターが、ボドさんの編んだ長いセーターを着たり、長いベッドに横たわったり、長い体を生かして、縄跳びの縄になったり、滑り台になったりする姿が楽しい。緑を基調としたしゃれた絵で、幅広い年齢層に受け入れられる。

100	ペレのあたらしいふく エルサ・ベスコフ さく・え おのぞらゆりこ やく	978-4-8340-0462-5	福音館書店				1976
			幼	低	中	高	5分



着ている上着が短くなったペレは、自分の子ヒツジの毛を刈る。おばあちゃんの畑仕事やウシの番をして、ヒツジの毛を糸に紡いでもらう。ペンキ屋さんのお使いをして、青い染め粉を手に入れ、自分で糸を染める。妹の世話をし、おかあさんに布を織ってもらい、おしまいに、仕立て屋さんの手伝いをして、服に仕立ててもらう。日曜の朝、新しい服を着たペレは、子ヒツジに「あたらしいふくをありがとう！」と言う。

100年前のスウェーデンの古典的絵本。ペレが自分の力で新しい服を手に入れるまでを丁寧に暖かく描く。ヒツジの毛が服になるまでの長い工程に改めて驚く。子供たちは、誠実で勤勉なペレに、憧れと共感を抱く。登場人物が勢ぞろいする最後の場面は、ゆっくりと見せたい。



ここにあるクレヨンはとても大きい。これはゾウのクレヨン。ゾウが青いクレヨンでびゅーびゅー描くと、カエルが池だと思って飛び込む。赤いクレヨンで描くと動物たちは火事だと思って逃げ出す。黄色で描くと大きなバナナだと思われる。ゾウはライオンに怒られてしまうが、まだまだ描き足りなくてクレヨンを持って駆け出していく。

初めは普通のクレヨンに見えたのが、ごろごろころがって、ゾウの大きなクレヨンだとわかる。そこで驚き、さらにゾウが鼻でびゅーびゅー描く絵の大きなことにびっくりする。クレヨンで画面いっぱい描かれた絵が楽しいナンセンス絵本。



まあちゃんは短いおっぱ。でも、ずっとずっと伸ばすんだと、友達のはあちゃんとみいちゃんに言う。橋の上からおさげをたらしして魚がつれるくらい、左右のおさげを木に結んで家中の洗濯物をいっぺんに干せるくらいに長くする。シャンプーをつけて洗えば、雲まで届くソフトクリームになる。パーマにすれば、森になって、小鳥もリスも虫たちもみんな集まる。はあちゃんもみいちゃんも、とってもいいとうっとりする。

まあちゃんが繰り広げるおおらかな空想が楽しい。著者が描いた素朴な絵がお話にぴったりで、誰からも喜ばれる1冊。続編に『まあちゃんのまほう』がある。



小さなお人形が、誰も知らない間に、スーパーの冷凍庫の中に落ちてしまう。お人形は、寒い冷凍庫の中を歩き回り、ビルのような食品の箱に押しつぶされそうになる。あるとき、お店に来た女の子がお人形を見つけ、暖かい服を縫って、次々と届けてあげる。お人形はオーバーや帽子を着て大喜び。女の子はとうとうお店の人に頼んで、お人形を家に連れて帰り、それからはお人形は楽しく暮らす。

女の子が小さな服を作ったり、お人形がマッチ箱でベッドを作ったりする場面には、おままごのような楽しさがある。お人形が冷凍庫の中で歩き回ったり、アイスクリームを食べたりする冒険の話なので、男の子も楽しめ、読んだ後にはスーパーの冷凍庫を覗きたくなる。



一人ぼっちのかんたが、神社の森でめちやくちやな歌を大声で歌うと、変な声に呼ばれて木の穴にすいこまれる。着いたところは夜の山。3人の化け物たちが遊ぼうと飛んできた。かんたは木から木へ飛びまわったり、お宝を交換したり、縄跳びをしたり、3人組と愉快地遊ぶ。やがて化け物たちは眠ってしまうが、かんたは一人で月を見ているうちに心細くなり「おかあさーん」と呼ぶ。するとあつという間に元の神社に戻る。

かんたが歌う「ちんぷくまんぶくあつらこのきんぴらこ」や3人組の名前やせりふは、声に出すと調子がよく、繰り返し唱えたい。リズムカルに読み聞かせたい。正体不明の化け物たちは、日本の風土を感じさせ、どこか不思議な怖さがある。夏の読み聞かせによい。



トミー・ナマケンボは、電気じかけの家に住んでいる。朝はベッドが自動的にトミーを風呂おけに落とし、電気水かきまわし機が体を洗う。次に乾燥室では、温風がトミーを乾かし、歯みがきも着がえも自動装置がしてくれる。食事も機械が口に流し込む。ところがある時、嵐で電気が止まり、一週間後、再び動き出した家は、トミーを冷たい水のお風呂に落とし、7日分の食事をふりそそぐ。

電気じかけの装置が克明な絵で描かれ、興味深い。自動着替え装置や車つき移動台、電気食事機などの動きが丁寧に説明され、実際にこんな装置があるような錯覚を抱く。嵐の後、機械に翻弄されるトミーの姿に笑いながらも、共感と同情を覚える。

106

もりのなか

マリー・ホール・エッツ ぶん・え まさきりこ やく

978-4-8340-0016-0

福音館書店				1963
幼	低	中	高	5分



ぼくは新しいラッパを持って森へ散歩に行った。昼寝から起きたライオンが、髪をとかし散歩についてきた。2匹のゾウは、セーターと靴をはいてやってきた。クマやコウノトリ、サル、ウサギも加わり、ぼくがラッパを吹くと、動物たちはほえたり、うなったり森の中を行進した。おやつを食べて、ハンカチ落としやかくれんぼうをした。ぼくが鬼になり、動物たちが隠れると、お父さんが迎えに来た。ぼくはお父さんの肩車でみんなに別れを告げた。

大人には物足りなく思えるかもしれない話だが、子供は日頃の遊びがそのまま絵本の冒険につながり、深い満足を感じる。子供の視線で捉えた木々はモノクロで描かれ、本当に森の中に入ったような静謐さを感じる。静かに読み聞かせたい。続編に『またもりへ』がある。

107

ゆうかなアイリーン

ウィリアム・スタイグ 作 おがわえつこ 訳

978-4-915632-32-7

らんか社				1988
幼	低	中	高	8分



アイリーンは、仕立てあがったばかりのドレスを具合の悪いお母さんに代わって、お屋敷まで届けに行く。雪と風の中を進んでいくと、強い風がドレスを吹き飛ばし、ドレスは消えてしまう。アイリーンは足をくじき、道に迷い、雪にうもれ、暗くなった頃、お屋敷にたどり着く。すると目の前の木にドレスが張り付いている。無事ドレスを手に入れた奥様は、アイリーンの勇気をほめ、パーティに招待してくれる。

アイリーンに襲いかかる大変な事態。お母さんから頼まれた仕事をやりぬこうとするアイリーンには、誰もが応援したくなる。初めが少しわかりにくいので、お母さんがドレスを仕立てている表題紙の場面からゆっくり見せていきたい。

108

ゆかいなかえる

ジュリエット・ケペシュ ぶん・え いしいももこ やく

978-4-8340-0033-7

福音館書店				1964
幼	低	中	高	4分



水の中にたくさんあった卵は、魚に食べられ、四つだけがオタマジャクシからカエルに成長する。4匹のカエルは、泳ぎの競争をしたり、カタツムリの隠しっこをしたりと、楽しく遊ぶ。危険なサギやカメから上手に身を隠し、トンボの卵と水草でおいしいご飯を食べる。夏の夜を歌って過ごしたカエルたちは、冬が来ると温かい土の中で春まで眠る。

カエルの1年を青と緑を基調とした軽妙な絵で語る。「そしてゆきのふる ふゆがくると、あたたかい つちのなかで、はなさくはるまで ねむります」のようなリズムカルな文章が耳に心地よく、繰り返し楽しめる。

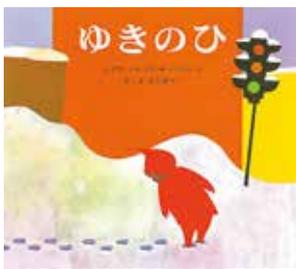
109

ゆきのひ

エズラ＝ジャック＝キーツ ぶん・え きじまはじめ やく

978-4-03-328120-9

偕成社				1969
幼	低	中	高	5分



冬のある朝、ピーターが目を覚ますと、雪がたくさん積もっていた。ピーターはマントを着て外に出ると、雪に足跡をつけたり、筋をつけたりして遊んだ。木から雪を落とし、雪だるまを作り、雪山をすべり、たっぶり遊んで家に帰ると、お母さんに雪の中の冒険のことを話した。次の日も新しい雪が降り、ピーターは友達といっしょに深く積もった雪の中へ出かけた。

雪の一日を過ごす男の子の喜びが素直に伝わってくる。カラージュの手法を使った絵は、澄み切った青空と静かな雪景色、その中で遊ぶ赤いマントのピーターを印象深く描いている。雪の日の読み聞かせにふさわしい。

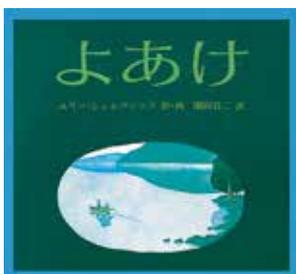
110

よあけ

ユリー・シュルヴィッツ 作・画 瀬田貞二 訳

978-4-8340-0548-6

福音館書店				1977
幼	低	中	高	5分



夜明け前の湖のほとりで、おじいさんと孫が毛布にくるまって眠っている。静まり返り、動くものもない。そよ風にさざなみが立ち、もやがこもり、鳥が鳴き、あたりは少し明るくなる。おじいさんは孫を起こし、水を汲むと火をたく。二人はボートに乗って湖に漕ぎ出す。日が昇り、湖と周囲の山は一斉に緑色になる。

唐の詩人柳宗元の詩「漁翁」からモチーフをとり、選びぬかれた最小限の言葉で読者を夜から夜明けへと移る湖へと連れて行く。特に最後の場面の変化は鮮やかで、自然の静けさや移ろいをたっぶり味わえる。

111

よかったねネッドくん

レミー・シャーリップ さく やぎたよしこ やく

978-4-03-201430-3

偕成社

1997

幼	低	中	高	3分
---	---	---	---	----



ネッドくんパーティーの招待状が届くが、会場は遠いフロリダだった。友達が飛行機を貸してくれるが、途中で爆発。でもパラシュートで無事脱出、と思ったらパラシュートには穴が開いていた。空中をまさかさまに落ちるが、下にはやわらかい干し草の山があった。でも干し草には尖った草かきが。こうして次々に襲いかかる困難を偶然の幸運で乗り越え、最後にたどりついたところは、ネッドくんの誕生日パーティーだった。

「よかった」と「でも、大変」が交互に続き、よかったページはカラー、大変のページはモノクロで描き分け、主人公の運命が一目でわかる。ネッドくんを応援しながら、あまりにも突飛な事件の連続に子供たちは大いに楽しむ。おまけの一冊としても最適。

112

よるのねこ

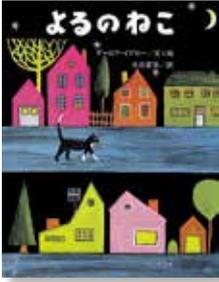
ダーロフ・イブカー 文と絵 光吉夏弥 訳

978-4-477-02003-7

大日本図書

1988

幼	低	中	高	6分
---	---	---	---	----



お百姓さんのリーさんは、夜になると、ネコを家の外に出してやる。人間の目には真っ暗で何も見えないが、ネコの目には昼間のようにはっきり見える。寝ている犬やハト。色とりどりの花や蛾。納屋の裏のトラクター。牧場のウシやウマ。畑を荒らすウサギたち。森の中のシカやキツネ。ネコは町に着くと、仲間たちと遊び、朝になると家に帰ってくる。リーさんからミルクをもらって、ひじかけいすで眠る。

物のシルエットだけが浮かぶ夜の風景をネコの目で見ると、昼間のようによく見える。人間の目とネコの目で見た同じ風景が交互に描かれ、その違いが発見を呼ぶ。悠々と歩く野性味あふれるネコも魅力。

113

ラチとらいおん

マレーク・ベロニカ ぶん・え とくながやすもと やく

978-4-8340-0045-0

福音館書店

1965

幼	低	中	高	8分
---	---	---	---	----



世界中で一番弱虫な男の子、ラチのところへ小さな赤いライオンがやってくる。ライオンはラチと体操をしたり、怖い犬のそばを通るのを励ましたり、強くなるのを手伝ってくれる。ある日ラチはライオンと相撲をとって勝つ。友達が、いじわるなのっぽにボールを取られてしょんぼりしていると、ラチはのっぽを追いかけてボールを取り戻す。気がつくともライオンがいない。ライオンは、他の弱虫の子供のところへ行くと手紙を残して去っていく。

緑とオレンジ、黄色、黒の4色のみを使った絵は明るく、独特な雰囲気がある。二人で体操をする場面や手紙の絵、のっぽを追いかける場面など、読者が喜ぶ工夫がされている。弱虫のラチに共感するのか、男の子に喜ばれる。版が小さいが、比較的遠くからもよく見える。

114

りんごのき

エドアルド・ペチシカ ぶん ヘレナ・ズマトリーコバー え うちだりさこ やく 978-4-8340-0334-5

福音館書店

1972

幼	低	中	高	7分
---	---	---	---	----



雪で庭が一面真っ白になったとき、男の子のマルチンは棒のようなリンゴの木を見つける。お父さんは、ウサギが木をかじらないように、幹に金網を巻きつける。春になると、リンゴの花にミツバチが集まる。夏、マルチンはたっぷり水をあげる。秋、葉がタンポポのように黄色くなるとリンゴが赤くなる。マルチンは、飛び上がってリンゴをとると、うれしそうに家に入る。

季節とともに変化していくリンゴの木を見て喜んだり、疑問に思ったりするマルチン。読者も絵本を通してリンゴの一年を体験できる。明るい絵が子供の共感を呼ぶ。さりげなく目鼻がついているリンゴの木にも親しみを感ずる。

115

ろくべえまってるよ

灰谷健次郎 作 長新太 絵

978-4-580-81393-9

文研出版

1975

幼	低	中	高	8分
---	---	---	---	----



一年生のえいじくんたちは、犬のろくべえが穴に落ちているのを見つけた。穴は深くて真っ暗。懐中電灯で照らして「ろくべえ。がんばれ。」と言ったり、シャボン玉を吹いたりするが、ろくべえはぴくりとも動かない。大人が何人も見に来たが、誰も助けてくれない。みんなは必死で考えて名案を思いつく。ろくべえの恋人のクッキーをかごに入れて穴に降ろすのだ。やってみると、2匹はかごに乗って無事上がってきた。

ろくべえと黒い穴を囲む子供たちの心配そうな顔が並ぶ。聞き手もろくべえが助かるかはらはらする。クッキーが穴の底で、かごから降りて、ろくべえとじゃれあう場面で緊張感が高まり、無事戻って安堵する。特に一年生は、自分のことのように受け止めて、真剣に聞く。

116

ロバのシルベスターとまほうの小石

ウィリアム・スタイク さく せたていじ やく

978-4-566-00835-9

評論社

2006

幼

低

中

高

13分



ロバのシルベスターは、小石を集めるのが大好き。ある日、願いがかなう赤い小石を見つけるが、家に帰る途中ライオンに会い、岩になりたいと願う。岩になったシルベスターは、小石を拾えない。両親は、帰ってこない息子を探すが見つからない。季節が過ぎたある春の日、両親はピクニックに出かけ、シルベスターの岩に座る。お父さんが赤い小石を見つけ、岩の上に乗せると、シルベスターの願いがかない、元の姿に戻る。一家は抱き合っ

聴きごたえのあるしっかりしたお話。独特の言い回しや古い言葉があるので、しっかり練習をして取り組みたい。

117

わゴムはどのくらいのびるかしら？

マイク・サーラー ぶん ジェリー・ジョイナー え きしだえりこ やく

978-4-593-50402-2

ほるぶ出版

2000

幼

低

中

高

3分



ある日、ぼうやは輪ゴムがどれくらいのびるか、確かめてみることにした。ベッドのわくにひっかけた輪ゴムをしっかりとって、ぼうやは部屋の外へでる。自転車に乗って、バスに乗って、汽車や飛行機、船に乗り、ラクダに乗って砂漠を越えて、ロケット発射場へ着いた。ロケットに乗って、とうとう月に到着した。外に出て、歩き出そうとしたとたんに、輪ゴムがポーンとはねて、ぼうやはベッドに着陸した。

小さな輪ゴムが画面いっぱい伸びていく様子に、子供たちはいつはじけるかとときどきしながら、驚きの目を見張る。気軽に楽しめる絵本なので、おはなし会では読み応えのある絵本と組み合わせるとよい。

118

わたしとあそんで

マリー・ホール・エッツ ぶん・え よだじゅんいち やく

978-4-8340-0153-2

福音館書店

1968

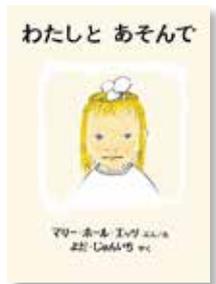
幼

低

中

高

4分



〈わたし〉が原っぱに遊びに行くと、バツが草の葉にとまって夢中で朝ごはんを食べている。「ぼったさん、あそびましょ」と捕まえようとする、飛んでいってしまう。ひなたぼっこをしているカメ、カケスやウサギ、ヘビにも遊ぼうと呼びかけるが、みんな逃げてしまう。〈わたし〉が石に腰かけてじっとしていると、動物たちが静かに戻ってくる。シカの赤ちゃんがほったを舐める。〈わたし〉はみんなが遊んでくれてうれしい。

女の子と動物たちのやりとりが静かに繰り返され、動物たちに囲まれた最後の場面に大きな満足が湧く。クリーム地に柔らかいクレヨンで描かれた絵は、春の暖かい日差しを感じさせる。大きな事件や出来事はないが、読者に深い印象を残す絵本。春先にふさわしい。

119

わたしのワンピース

にしまきかやこ えとぶん

978-4-7721-0018-2

こぐま社

1969

幼

低

中

高

3分



主人公は小さなウサギ。空から落ちてきた白い布で〈わたし〉はミシンを使って、ワンピースを作る。ワンピースを着てお花畑を散歩すると、ワンピースが花模様になる。雨が降ってくれば水玉模様に、草の中を歩けば草の実模様になる。ワンピースが小鳥模様になって空を飛んだり、虹や夕焼けや星の模様になったり。朝になって、眼を覚ました〈わたし〉は散歩を続ける。

ウサギが問いかける「ラランロロンはなもようのワンピース わたしににあうかしら」の繰り返しが、耳に心地よい。子供によっては「似合う似合う」とうなずいたり、少し年齢が高くなると「似合わない」と答えたりする。のびのび描かれたおらかな絵が、お話にぴったり。ごく幼い子供から楽しめる。

120

ワニのライルがやってきた

バーナード・ウェーバー さく 小杉恵子 やく

978-4-477-16281-2

大日本図書

1984

幼

低

中

高

13分



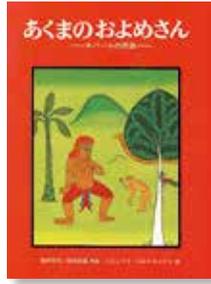
プリムさん一家が引っ越してきた家で、奇妙な音がする。奥さんが風呂場に行くとワニがいる。大騒ぎしていると、〈舞台と映画のスター〉と名乗る男が、ワニのライルをよろしくと書いた手紙を置いていく。ライルは、ボールで芸をしたり、家の手伝いをしたり、すっかり家族の一員になり、町の人気者にもなる。ある日、男がライルを引き取りにくる。一家は涙ながらに別れるが、ライルは悲しくて芸もできなくなり、再びプリムさんの家に返される。

軽いタッチの絵は親しみやすく、ストーリーもまっすぐで、多くの子供に喜ばれる。親切で、芸達者、気立てのよいワニのライルのシリーズは全8冊。

121

あくまのおよめさん ネパールの民話

稲村哲也、結城史隆 再話 イシュワリ・カルマチャリヤ 画



昔ネパールにラージャンという男の子がいた。ある日、拾った銀貨でサルを買った。サルは、悪い悪魔にうまくもちかけて、宝物をもらう代わりにお嫁さんを見つけてやると約束した。サルは、お嫁さんに似せたきれいな人形を作り、悪魔の家に連れて行き、決して姿を見せはけないと注意した。悪魔が我慢できずに、お嫁さんに触れると転げ落ちて動かなくなった。死んだと思い込んだ悪魔は生まれて初めて悲しい思いをして、今までの悪行を反省した。

福音館書店	1997
幼 低 中 高	11分

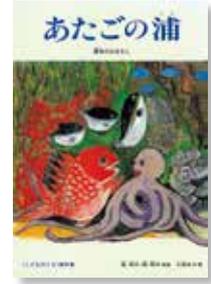
大人たちは拾った銀貨で役に立つものを買うように勧める。しかしラージャンは国中にたった一つしかないものを買おうと考える。そうやって手に入れたサルが智恵を働かせて一家を幸せにする報恩譚。ネパールの伝統的な宗教画家による絵は、繊細で独特な味わいがある。少人数に向く。

122

あたごの浦 讃岐のおはなし

脇和子、脇明子 再話 大道あや 画

978-4-8340-1194-4



あたごの浦では、お月さんの光にうかれてタコとタイが砂浜に上がってきた。演芸会をしようと呼ぶと沖から魚が集まってきた。歌ったり踊ったりした後、かくし芸が始まった。タイが松の枝にびたっとはりついて「松にお日さん、これどうじゃ」。フグが松の木に登って「松にお月さん、これどうじゃ」と次々と披露し、皆がはやしたてた。月がかたむくと魚たちは海の中へ帰っていき、キラキラ光る砂浜と波が寄せては返す静かな浜に戻った。

福音館書店	1993
幼 低 中 高	5分

タイやフグが芸をすると、集まった魚たちが「妙々々々々」とはやし立てる。その繰り返しが話を盛り上げ、のどかで豊かな海辺の雰囲気広がる。方言が入っているが、あまりこだわらずに、自然に読むとよい。もう一冊おまけに読むときに最適。

123

ありがたいこつてす! ユダヤの民話から

マーゴット・ツェマック さく わたなべしげお やく

978-4-924938-27-4



むかし、貧しい男が母親とおかみさんと6人の子供と小さな家に住んでいた。家が狭いので言い争いばかり。ラビに相談すると、ヒナドリ、オンドリ、ガチョウを中に入れて暮らすように言われる。家の中は、前よりひどくなった。男がまた相談に行くと、今度はヤギを、その次はウシを入れるように言われる。とうとう堪忍袋の緒が切れて、男がラビのところへ行くと動物たちを家から出しなさいと言う。すぐに出したら、家の中は静かで平和になった。

童話館出版	1994
幼 低 中 高	10分

状況は始めと変わっていないのに、家が静かでゆったりして「ありがたいこつてす」とラビに感謝する男。このユーモアが笑えるのは中学年以上だろう。生活感あふれる家の細部が生き生きと描かれ、手にとって読むと更に面白い。ラビはユダヤ教の博士のこと。

124

いっすんぼうし

いしいももこ ぶん あきのふく え

978-4-8340-0051-1



昔、おじいさんとおばあさんに親指ほどの大きさの男の子が生まれ、いっすんぼうしと名付け、大切に育てた。いっすんぼうしは都でひと働きしようと川を上っていき、名高い大臣の屋敷で働いた。ある日、姫のお供で清水寺へ参る途中、3匹の鬼に襲われた。針の刀で鬼と戦って勝ち、鬼が捨てていった打ち出の小槌を姫が振ると、いっすんぼうしの体は大きくなった。いっすんぼうしは姫と結婚し、おじいさん、おばあさんも呼び寄せ幸せに暮らした。

福音館書店	1965
幼 低 中 高	12分

誰でも知っていると思いがちだが、一寸法師を知らない子供もいるので、機会を見つけて読み聞かせたい。小さな体で、お椀の舟に乗ったり、下駄のかけから顔を出したりする主人公に身を寄せて聞いている。平安時代の雰囲気を持つ絵は、華やかで暖かい。

125

うさぎのいえ ロシア民話

内田莉莎子 再話 丸木俊 画



ウサギがモミの木の下に小屋を建てると、キツネが入れてほしいとやってきた。一晚泊するとキツネは、ウサギを追いだした。ウサギが泣いていると、犬がわけを聞き、キツネに出て行けと言う。しかしキツネがオオカミの声で答えたので、ふるえあがってしまう。ヒツジも同じように失敗。最後にオンドリが引き受けて、屋根の上で「狩人がやってきた」と歌うと、キツネは逃げ出し、オンドリとウサギは仲良く暮らした。

福音館書店	1973
幼 低 中 高	6分

ロシアの深い森の中での話が、日本画の墨と鮮やかな絵の具で描かれている。画面いっぱい広がる黒いオオカミは墨絵の迫力が生かされている。同じ昔話の絵本に『もりのともだち』（富山房）があり、こちらも読み聞かせに向く。

126

うさぎのみみはなぜながい

北川民次 ぶんとうえ

978-4-8340-0007-8

福音館書店	1962
幼 低 中 高	11分



昔、ウサギは小さな体を大きくしてほしいと神様に頼んだ。神様は、トラとワニとサルの皮を持ってきたら願いをかなえようと約束した。ウサギは、森でトラに会うと、大風が来るとだまして、トラを木に縛りつけ、棒で殴って殺してしまった。ワニとサルもだまして、皮をはいで、神様のところに持っていき、願いをかなえてほしいと頼む。神様は、知恵のあるウサギが大きくなったら森中の動物を殺してしまうと考え、耳だけを大きくしてやる。

長くメキシコに住んだ画家による風土を生かした味わい深い絵本。神様と動物のおおらかな交流を描き、ウサギの耳が長いわけを説いた物語は、幅広い子供たちに喜ばれる。

127

うまかたやまんば

おざわとしお 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0809-8

福音館書店	1988
幼 低 中 高	7分



馬方が山道を登っていると、やまんばが出てきて荷物の魚を置いていけとしわがれ声で言った。馬方は、魚を、次はウマの足を投げるが、やまんばはバリバリと食って追いかけてくる。馬方は逃げて、一軒家の梁に隠れる。するとやまんばが入ってきて、いろりで甘酒を温めながら居眠りを始めたので、萱で吸って飲んでしまう。餅も焼くが、これも馬方が食べてしまう。最後に、やまんばが木のからとに寝ると、馬方は穴を開け、煮え湯をつぎ込み、殺してしまう。

子供は、馬方とやまんばの追いつ追われつにドキドキし、馬方が知恵を使って生き延びて、安堵する。最後の場面を残酷に感じる大人もいるだろうが、昔話のおおらかな世界では、悪いやまんばが退治されてこそ大団円となる。

128

王さまと九人のきょうだい 中国の民話

君島久子 訳 赤羽末吉 絵

978-4-00-110557-5

岩波書店	1969
幼 低 中 高	13分



年寄りの夫婦が、白い髪の老人から子供が生まれる丸薬9粒をもらい、おばあさんが飲むと、9人のそっくりな赤ん坊が生まれ、ちからもち、くいしんぼうなどと名付けられた。9人が大きくなった頃、王様の宮殿の柱が倒れたが、ちからもちが元通りにした。ところが王様は、そんな力持ちなら大飯が食えるだろうと言うので、くいしんぼうが行って平らげた。王様は次々難題を言うが、兄弟が活躍し、とうとう王様は川に流され、皆は平和に暮らした。

9人の赤ん坊がずらりと並ぶ場面では、指差しながら読んでいくと、子供は、赤ん坊の特徴が推理できる。長い話だが、次々とできごとが起こるので、低学年から楽しめる。中国の少数民族イ族に伝わる昔話。

129

おおかみと七ひきのこやぎ グリム童話

フェリクス・ホフマン え せたていじ やく

978-4-8340-0094-8

福音館書店	1967
幼 低 中 高	8分



ある日、お母さんヤギは子ヤギたちに、オオカミに気をつけるようにと言って、食べ物を探しに出かける。まもなくオオカミがお母さんのふりをしてやってきた。子ヤギたちが戸を開けると、オオカミはたちまち6匹を飲み込むが、時計の箱に隠れた末の子ヤギだけは助かる。お母さんヤギと末の子ヤギは、野原で寝ているオオカミのお腹を切り開き、6匹を助け、代わりに石を詰め込む。起きて水を飲もうとしたオオカミは、井戸に落ちて死ぬ。

誰もが知っているグリムの昔話。ヨーロッパの町並みを舞台に、このお話の要点をしっかりと押さえた格調高い絵は、子供たちに強い印象を与える。

130

おおきなかぶ ロシアの昔話

A. トルストイ 再話 内田莉莎子 訳 佐藤忠良 画

978-4-8340-0062-7

福音館書店	1966
幼 低 中 高	3分



おじいさんがカブを植えた。すると、甘い元気のない大きいカブができた。おじいさんはカブを抜こうと引っ張るが抜けない。おばあさんを選んで一緒に引っ張るが、それでも抜けない。そこで孫を選んできたが、まだまだ抜けず、犬、ネコを次々と呼んで、皆で引っ張るがそれでも抜けない。最後にネズミを選んできて引っ張ると、カブはやっと抜けた。

「おばあさんがおじいさんをひっぱって、おじいさんがかぶをひっぱって——うんとこしょ どっこいしょ」の繰り返しが、子供は大好きで、一緒に掛け声をかけることもある。読み終わって、表紙と裏表紙を広げるとカブを担いだおじいさんたちの姿が見えて、子供たちは更に満足する。

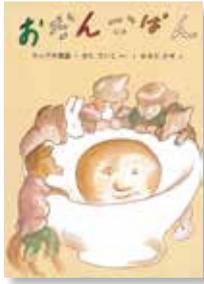
131

おだんごばん ロシアの昔話

せたていじやく わきたかざえ

978-4-8340-0057-3

福音館書店	1966
幼 低 中 高	6分



昔、おじいさんがおいしいものを食べたくなくて、おばあさんにおだんごばんを作ってもらった。ところが、おだんごばんは外に転がり出し、ウサギに会う。「おまえをぱくっとたべてあげよう」というウサギに、歌を聞かせて逃げ、続いてオオカミ、クマからも同じように逃げ出す。最後に会ったキツネに歌をほめられ、いい気持ちになって言われるままに、舌の上に飛び乗ると、キツネは、おだんごばんをぱくっと食べてしまった。

おだんごばんの歌は、簡単な節をつけたり、あるいはリズムカルに読むとよい。最後にぱくっと食べられる場面は感傷的にならないように、あっさり読む。同じお話に『パンはころころ』（富山房）があり、こちらも読み聞かせに向く。

132

おどりトラ 韓国・朝鮮の昔話

金森襄作 再話 鄭淑香 画

978-4-8340-0057-3

福音館書店	1997
幼 低 中 高	6分



山に住むトラたちの中に、踊りの好きなおどりトラがいた。あちこちの村を回って腕をみがき、不思議な力を持つようになった。おどりトラが踊ると、祈りが聞き届けられるのだ。おどりトラは山へ帰って、仲間たちと獲物を探しに行った。木の上にきこりがいたので、とらばしごを作って捕まえようとした。きこりが笛を吹くと、一番下にいたおどりトラは我慢できずに踊りだした。トラたちは地面にたたきつけられてしまい、きこりは村へ逃げ帰った。

韓国・朝鮮の民画風の絵が、力強くユーモラスなトラを生き生きと描いている。フランスの昔話『きこりとおおかみ』ではトラと同じようにオオカミがはしごを組むが、離れた土地で共通した昔話が伝わっているのも興味深い。

133

おなかのかわ

瀬田貞二 再話 村山知義 絵

978-4-8340-0057-3

福音館書店	1977
幼 低 中 高	9分



ネコとオウムがごちそうに呼び合うことにした。けちんぼのネコは、ごちそうをちょっとしか出さない。一方オウムは、すてきなごちそうでネコをもてなす。ネコはごちそうを食べつくすと、オウムまで丸呑みにした。外に出ると、おばあさん、馬方とロバ、王様の一行を飲み込んでしまう。2匹のカニも飲み込まれるが、カニたちがはさみでネコのお腹に穴を開けると、丸呑みされた者たちが皆出てくる。ネコはその後、一日かかってお腹の皮を縫う。

生意気なネコが、会おう人たと会話を重ねながら、ペろりと飲み込んでいく。その繰り返しが、面白い。ネコのお腹からオウムやおばあさん、王様などが飛び出す最後の場面はユーモラスで、おおらか。絵は遠くからよく見える。

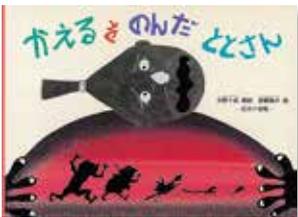
134

かえるをのんだととさん 日本の昔話

日野十成 再話 斎藤隆夫 絵

978-4-8340-2305-3

福音館書店	2008
幼 低 中 高	6分



ととさんの腹が痛くなり、寺の和尚様に相談に行くと、腹の中に虫がいるからカエルを飲むとよいと言われた。カエルを飲むと虫がいなくなって腹痛は治ったが、カエルが腹の中を歩くので気持ちが悪い。和尚様に相談すると、ヘビがよいといわれ、ヘビを飲むと腹の中で動いて気持ちが悪い。こうしてととさんは和尚様に勧められてキジ、獵師、鬼とどんどん飲んでしまう。最後に和尚様がととさんの口の中に豆をまくと、鬼は尻の穴から飛び出した。

繰り返しながら、どんどん展開していくナンセンスな昔話。パンチの効いたデザイン的な絵が話の内容によく合っている。和尚様がまく豆が節分の豆なので、その季節に読んでもよい。

135

かさじぞう 日本の昔話

瀬田貞二 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0071-9

福音館書店	1966
幼 低 中 高	5分



昔、貧しいじいさんとばあさんがいた。じいさんは大晦日に、編み笠を五つ町へ売りに行ったが売れず、正月の餅も買えずに、雪の降るなかを戻ってきた。途中野原で穴蔵様が雪に降られていたので、寒かろうと、笠を全部かぶせて家に帰った。正月の明け方に、そりひきの声が近づいてきて、じいさんの家を探している。雨戸を開けると、6人の編み笠をかぶった人たちが、重い俵を運んできた。中には正月のご馳走や宝がどっさり詰まっていた。

貧しい老夫婦に訪れた幸せが、共感を呼ぶ。年の瀬にふさわしい絵本。墨絵で描かれた雪が変化に富み、美しく、印象に残る。

136

かちかちやま

おざわとしお 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0769-5

福音館書店	1988
幼 低 中 高	7分



じいさまが山でいたずらなタヌキを捕まえたが、タヌキはばあさまをだまして、殺し、じいさまに〈ばあじる〉を食べさせて、山へと逃げていく。ウサギは敵討ちのため、かややまでタヌキとカヤを刈り、背中に火をつける。次にとうがらしやまへ行き、タヌキの背にとうがらしを塗る。最後にまつやまに行って自分は木の舟、タヌキは土の舟に乗って、川へ漕ぎ出す。2匹が舟べりを叩いているうちに、土の舟はくずれ、タヌキもろとも沈んでしまう。

「鳥獣戯画」を思わせるような軽やかな動きのある動物たちは、どこか愉快で愛嬌がある。〈ばあじる〉やウサギの敵討ちが残酷だと感じる人もいるだろうが、動物と人間が間近に暮らしていた昔の人々の素朴な感覚として受け入れたい。子供たちは意外にこだわらない。

137

かにむかし 日本むかしばなし

木下順二 文 清水崑 絵

978-4-00-110577-3

岩波書店	1976
幼 低 中 高	11分



カニが庭で育てた柿の実を取ろうとしていると、サルが木に登り、実を食べ始めた。カニがもいでくれと言うと、サルは青い実を投げつけたので、カニはつぶれ、子供たちが生まれた。子供たちはきびだんごを作り、敵討ちに行く。途中、ぱんぱんグリ、ハチ、ウシのふん、はげぼう、石うすに、きびだんごをやって仲間にし、サルの家で隠れて待っていた。帰ってきたサルはカニに挟まれ、ハチに刺され、最後は石うすにつぶされ、ひしゃげてしまった。

墨と赤の2色で、遠くからでもよく見え、迫力のある挿絵。会話や擬音が巧みで、読み聞かせると一層面白さが際立つ。

『さるとかに』(銀河社)には、サルとカニが柿の種とむすびを交換する始まりがある。この場面は多くの子供が好きなので、こちらを読み聞かせてもよい。

138

ガラスめだまときんのつこのヤギ ベラルーシ民話

田中かな子 訳 スズキコージ 画

978-4-8340-0771-8

福音館書店	1988
幼 低 中 高	7分



おばあさんの畑では麦が青々と茂っていた。ある日、ヤギが畑に入り、麦を食っては踏んづけている。おばあさんが追い出そうとしても、「ガラスめだまときんのつこのがある。ひとつきすれば、いちころさ!」と言って出ていかない。クマが畑に行くが、同じように言われて逃げ出す。オオカミもキツネもウサギも同じことに。最後にハチが来て、ヤギの鼻をチクリと刺した。ヤギはメーメー泣いて逃げていき、麦畑に来ることはなくなった。

「でていけったら、でていけっ!」「なまいきいうない、もじゃげのクマめ!」など動物たちが奔放にやり取りする。その場面が面白さのポイントなので、しっかりと読みたい。コラージュによる個性的な絵が、豊かな畑と森に生きる動物と人間の交流をおおらかに描いている。

139

きこりとおおかみ フランス民話

山口智子 再話 堀内誠一 画

福音館書店	1977
幼 低 中 高	7分



きこりとおかみさんがスープを作っていると、オオカミが来た。きこりは、こいつにスープをぶっかけてやれと叫び、おかみさんがスープをかけると、オオカミは森へ逃げていった。1年後、きこりが森で木を切っていると、頭のはげたオオカミが群れを従えてやってきた。きこりは木に登るが、オオカミたちは1匹ずつ肩の上に乗って、今にも届きそう。きこりは1年前を思い出し、スープをぶっかけると叫ぶと、オオカミたちは転がり落ちた。

きこりとおかみさんとオオカミの3者の考えや行動が、ユーモラスで、舞台を見るような面白さがある。画面を効果的に使った、木の上のきこりとオオカミの応酬は、臨場感にあふれている。この話の持つユーモアは年少の子供でもよくわかる。

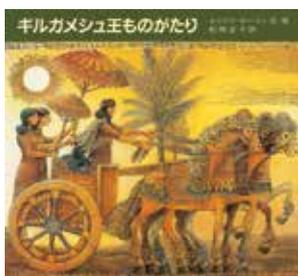
140

ギルガメシュ王ものがたり

ルドミラ・ゼーマン 文・絵 松野正子 訳

978-4-00-110617-6

岩波書店	1993
幼 低 中 高	13分



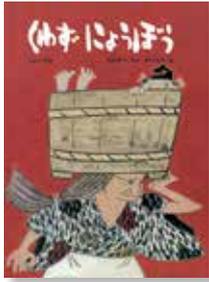
太陽神からこの地に送られてきたギルガメシュ王は、人間の心を知らなかった。王は都に高い城壁を造らせ、人々は疲れて太陽神に助けを求めた。神は優しいエンキドゥを森に送るが、ギルガメシュ王はエンキドゥと敵対し、歌うたいのシャトマを森に行かせ、二人は愛し合うようになる。エンキドゥは都に行き、城壁の上で王と戦う。城壁から落ちた王をエンキドゥは助けあげたので、人間の心が王にもわかり、二人は親友となって、幸せな都作りを始める。

世界最古の物語のひとつ、『ギルガメシュ叙事詩』を絵本にしたもの。壮大な神の物語のなかに、ギルガメシュ王とエンキドゥとの戦いと友情、動物と人間の関係、エンキドゥとシャトマの愛など人間の普遍性が描かれている。続編が2冊ある。

141 くわずにようぼう 日本の昔話

稲田和子 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0789-3



欲張り男が、飯を食わない女房がほしいというと、飯を食わないという娘がきて一緒に暮らす。ところが米俵が減っているの、男がこっそりのぞくと、女房は握り飯を作り、頭のとっぺんの大きな口で全部食べていた。男が出て行くように言うと、女房は鬼婆となって男を桶に入れてかつぎ、山に向かう。男は途中で逃げ出す。鬼婆がすみかに帰ると桶は空っぽ。鬼婆は追いかけるが、男はショウブの茂みに隠れ、鬼婆はヨモギの茂みで転び、体が溶けてしまう。

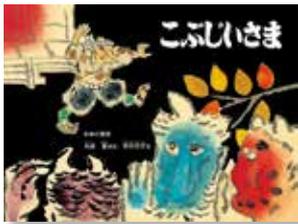
福音館書店	1974
幼 低 中 高	7分

女房が正体を現す場面は迫力があり、最後の鬼婆が溶けてしまう絵も不気味な不思議さがあり、怖い話が好きな子供たちにはうってつけ。後半の文字のない場面では、前のページの最後の文章「おとこはにげてにげて…」を読むとよい。端午の節句の頃に読みたい。

142 こぶじいさま 日本の昔話

松居直 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0788-6



額にこぶのあるじいさまが、山のお堂に泊まっていると、夜中に鬼がやってきて、唄い踊り始めた。こぶじいさまも鬼の唄に続けて唄い、夜明けまで踊りまわる。鬼は明日も来るようにこぶを預かると言って、こぶを取ってしまう。じいさまは身軽になって喜んで帰る。話を聞いた隣の家のこぶじいさまもお堂に行くが、めちゃくちゃに踊り、唄う。鬼は怒って、昨日のじいさまのこぶを隣のじいさまの額に打ち付けてしまった。

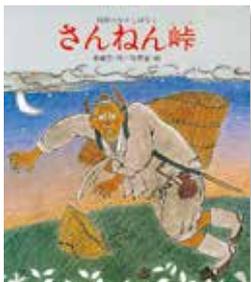
福音館書店	1980
幼 低 中 高	6分

山奥から現れる鬼どもが、怖くもあり、面白みもあり、不思議な雰囲気をかもし出している。鬼の唄は、力強く、リズムカルに読めるように、練習をしておきたい。

143 さんねん峠 朝鮮のむかしばなし

李錦玉 作 朴民宜 絵

978-4-265-91021-2



昔、さんねん峠で転ぶと、3年しか生きられないという言い伝えがあった。おじいさんが隣村へ出かけた帰り道に、さんねん峠で転んでしまい、その日からご飯も食べずに病気になった。ある日、水車屋のトルトリが見舞いに来て、1度転ぶと3年、2度転ぶと6年、3度転べば9年、長生きできるはずだよと言った。おじいさんは嬉しくなって、さんねん峠で何度も転ぶと「十ぺんころべば三十ねん」と歌が聞こえ、すっかり元気になった。

岩崎書店	1981
幼 低 中 高	7分

教科書にも採用されたことのある朝鮮の昔話。最後の歌は、リズムカルに読みたい。朝鮮ののどかな農村や暮らし、道具などの細部がたっぷり描かれている。おじいさんが転んだのが秋なので、その時期に読むとさらに味わい深い。

144 三びきのこぶた イギリスの昔話

瀬田貞二 やく 山田三郎 え

978-4-8340-0097-9



昔、3匹の子ブタが親の家を出て行った。初めの子ブタがワラの家を建てると、オオカミが家を吹き飛ばして子ブタを食べてしまう。枝の家を作った次の子ブタも食べられる。3番目の子ブタがレンガの家を建てると、オオカミは吹き飛ばすことができない。子ブタを外に連れ出そうと、カブ畑や祭に誘うが、子ブタは約束より早く出かけて、いつもオオカミを出し抜く。怒ったオオカミが煙突から降りていくと、子ブタはオオカミを煮て、食べてしまう。

福音館書店	1967
幼 低 中 高	7分

伝承されてきた「3びきのこぶた」は、2匹の子ブタがオオカミに食べられ、3番目の子ブタはオオカミの悪だくみに3回勝ち、最後にオオカミを食べてしまう。悪は滅び、正義の子ブタが勝つお話にこそ子供は満足する。『三びきのこぶた』(童話館)も読み聞かせに向く。

145 三びきのやぎのがらがらどん ノルウェーの昔話

マーシャ・ブラウン え せたていじ やく

978-4-8340-0043-6



昔、大中小の3匹のヤギのがらがらどんがいた。あるとき山の草場へ行こうとして、一番小さいがらがらどんが橋を渡ると、橋の下にすむトルロが食べようとした。小さいヤギはすぐに2番目ヤギが来るから、少し待つようにと言って渡る。2番目のヤギも大きいヤギを待つように言う。そこへ大きいヤギのがらがらどんが現れて、トルロと戦い、谷川へ突き落とす。3匹は草場へ行きとも太る。

福音館書店	1965
幼 低 中 高	5分

小さいヤギが知恵を絞って、困難を切り抜け、最後に大きいヤギがトルロをやっつける。勇壮でまっすぐな結末が子供たちを満足させる不朽の名作。橋を渡る「かたこと」「がたんごん」の擬音やヤギとトルロのやりとりが、声に出すといっそう生きてくる。

146

したきりすずめ

石井桃子 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0888-3

福音館書店	1982
幼 低 中 高	13分



じいさが大事に育てているスズメがのりを食べてしまい、ばあさは怒ってはさみで舌を切ってしまった。じいさはスズメに謝ろうと、山奥のスズメのお宿に行く。立派な家にはスズメたちがいて、じいさをもてなす。次の朝、じいさは小さいつづらを土産にもらい、家に帰って開けてみると、金銀財宝が出てきた。ばあさは宝をもっとほしくなり、スズメの宿へ行き、大きいつづらをもらってくる。帰り道でつづらを開けるとヘビやヒキガエルが出てきた。

じいさがお宿を訪ねる途中で、うしあらいどんとうまあらいどんに出会い、言われるままにウシとウマをきれいに洗い、道を教えてもらう。一方ばあさは、ちょこちょここするだけ。この場面を知らない人は多いが、二人の行動の対比がお話を盛り上げている。

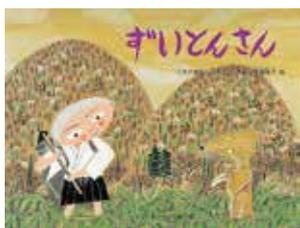
147

ずいといんさん 日本の昔話

日野十成 再話 斎藤隆夫 絵

978-4-8340-2151-6

福音館書店	2005
幼 低 中 高	5分



ある日お寺の小僧ずいといんさんが、一人で留守番をしていると、庫裏（台所）から「ずーいといん ずーいといん」と呼ぶ声がする。庫裏に行ってみたが誰もいない。あちこち探して、キツネのいたずらだとわかり、つかまえようとすると、キツネは本堂に逃げ込んだ。本堂にはご本尊様が二つも並んでいる。本物はお経をあげると舌を出すと、舌を出したご本尊様をたたくと、キツネが姿を現し、「ケーン」と鳴いて山に逃げ去った。

小僧とキツネの頭を使っただましあいがなんともおもしろい。写実的に描かれた寺の中を、表情豊かな主人公たちが活躍する対比が、お話にあっている。場面によっては、遠くから描かれているので、少人数の方が楽しめる。

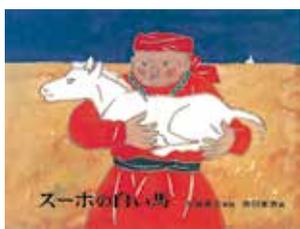
148

スーホの白い馬 モンゴル民話

大塚勇三 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0112-9

福音館書店	1967
幼 低 中 高	13分



昔、モンゴルの草原にスーホという貧しい羊飼いの少年がいた。ある日、白い子ウマを拾い、大切に世話すると、ウマは立派に育ち、競馬の大会で一等になった。それを見た殿様は無理やりウマを奪うが、乗ろうとすると、ウマは凄腕で駆け出した。家来たちは矢を放ち、次々に矢がささった。ウマはスーホのところに帰りつくが、死んでしまう。その夜スーホの夢にウマが現れ、自分の骨や皮で楽器を作るように言う。スーホが楽器を作ると、美しい音が響いた。

教科書でも取り上げられる昔話だが、モンゴルの草原や空の広さが、横長に広がった絵本でこそ味わえる。モンゴルに伝わる馬頭琴のいわれを語る悲しい話であるが、感傷的にならずに、読みたい。

149

せかいいちおいしいスープ

マーシャ・ブラウン 文・絵 こみやゆう 訳

978-4-00-111217-7

岩波書店	2010
幼 低 中 高	11分



はらぺこの3人の兵隊が、ある村を通りかかり、食べ物を求めると、村人は食べ物を隠して、何もないと答えた。すると兵隊たちは石のスープを作ると言いだし、村人は興味津々。大きな鍋に水を沸かして石を入れる。もっとおいしくするにはニンジンがいわれ、村人は隠したニンジンを持ってくる。次はキャベツ、牛肉と材料がどんどん入れられ、おいしいスープができあがり、皆で宴会をする。翌日、3人は村人たちに感謝され、旅を続ける。

石でスープを作るなんて賢い人たちだと感心する村人とちょいと頭を使っただけと答える兵隊たち。笑い話が大真面目に語られるので、石でスープができる信じてしまう子供もいる。熱々のスープがおいしそう、冬に読み聞かせるといっそうふさわしい。

150

だいくとおにろく 日本の昔話

松居直 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0085-6

福音館書店	1967
幼 低 中 高	5分



名高い大工が、急流に橋をかけてくれと頼まれた。大工が川を見つめていると、大きな鬼が現れて、おまえの目玉をよこしたら、代わって橋をかけてやろうと言う。みるみるうちに橋が完成し、鬼は目玉をよこせと迫るが、待ってくれと言う大工に、自分の名前を当てたら許すとなった。大工が山奥へ逃げると、遠くから聞こえてきた子守唄で鬼の名前がわかる。次の日、大工が、鬼の名を叫ぶと、鬼はぽかっと消えてしまった。

鬼と大工の対決が、次第に盛り上がり、緊張感が高まったところで、大工の勝利に終わる。芝居のような起承転結のはっきりした昔話。大工がわざと違う名前を答える最後の場面では、両者のやり取りがわかるように、十分練習しておきたい。

151

太陽へとお矢 インディアンにつたわるおはなし

ジェラルド・マクダーモット さく じんぐうてるお やく

978-4-593-50015-4



昔、太陽の神は命の矢を大地に飛ばし、矢に当たった娘は男の子を生んだ。男の子は大きくなり、お父さんを探しに出かけると、矢作りの老人に会った。老人はその子を矢にして、天に飛ばすが、太陽は自分の子供だと信じない。蜂や稲妻など四つの部屋を通り抜けさせるが、出てきたときには男の子は力がみなぎっていた。神は息子だとわかり、男の子は再び大地に帰ると、村人たちと命の踊りを踊った。

ほるぷ出版	1975
幼 低 中 高	5分

幾何学的で豊かな色彩の絵が、壮大なストーリーにあっている。無駄のない力強い文章なので、しっかりと読みたい。四つの部屋を通りぬける場面は文字がないが、ゆっくりと見せるとよい。

152

だごだごころころ

石黒漢子、梶山俊夫 再話 梶山俊夫 絵

978-4-8340-1218-7



ばあさんは、山の畑で転がり落ちた〈だご〉を追いかけて、川を渡り穴に入ると、赤鬼につかまってしまった。ひとまぜするごとに粉が増える赤鬼のしゃもじで、毎日〈だご〉を作らされた。ある日、昔助けたトンボがおばあさんを舟に乗せて引いてくれた。鬼どもが川の水を飲んで追いかけてきたが、しゃもじで水を漕ぐとどんどん水が増え、鬼の腹が破裂した。無事家に帰ったばあさんは、じいさんと宝のしゃもじでだごやを始め、楽に暮らした。

福音館書店	1993
幼 低 中 高	7分

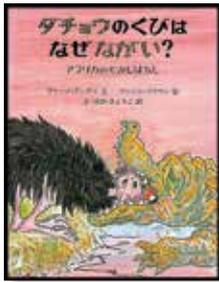
〈だご〉とはだんごのこと。個性的な絵が、鬼と人、動物たちが交流するおらかな昔話の世界を見事に描いている。少し間の抜けた赤鬼たちが愉快。赤トンボがなぜ赤いかの由来譚にもなっているので、秋に読み聞かせると印象深い。

153

ダチョウのくびはなぜながい? アフリカのむかしばなし

ヴァーナ・アーダマ 文 マーシャ・ブラウン 絵 まつおかきょうこ 訳

978-4-572-00362-1



昔ダチョウの首は短かった。ある朝、ワニは虫歯が痛くて、クーズーとヒビに抜いてくれるように頼むが、逃げられてしまう。次にダチョウに頼むと、ダチョウはワニの口に頭を突っ込んで、虫歯を探してくれた。食い意地のはったワニが口を閉じたので、ダチョウは必死で引っ張った。とうとうダチョウはワニを岸に引っ張りあげて、自由になるが、それ以来首が長くなった。

富山房	1996
幼 低 中 高	8分

ダチョウの首が長い由来譚。アフリカの動物たちが勢いのある筆致で生き生きと描かれている。首が短いときには、水を飲むのも苦勞していたダチョウと、首が長くなって、草原を走り回るダチョウとの対比が愉快。

154

たまごからうま ベンガルの民話

酒井公子 再話 織茂恭子 絵

978-4-03-963790-1



ダーという男は、ウマがほしくて市場でウマの卵だといわれてカボチャを買う。帰り道で、カボチャを地面に置いて眠っていると、通りかかったキツネがカボチャにつまづく。目をさましたダーは、キツネをウマと思って追いかける。しつこく追いかけているうちに動物は次々と変わり、気がつくともダーはトラの背にしがみついていた。ダーは驚いて、トラが木の下をくぐりぬけた時に、枝に飛びついて逃げ出す。

偕成社	2003
幼 低 中 高	11分

日本の「ふるやのもり」に似たベンガルの昔話。だまされても少しもへこたれず、今度は何の卵がいいかと考えるダーに、子供は思わず笑ってしまう。おらかな笑い話を色彩鮮やかな素朴な絵で描いている。

155

ちからたろう

いまえよしとも ぶん たしませいぞう え

978-4-591-08315-4



昔、貧しいじいさまとばあさまが風呂に入って、体から出たこんび(あか)で人形を作った。人形は飯を食ってどんどん大きくなり、名前もちからたろうになった。旅に出て、力自慢のみどうつこたろうといしこたろうを負かして、3人で連れ立っていくと、ある村に着いた。村では娘を取って暴れる化け物に困っていたが、ちからたろうが化け物を退治した。3人は助けた娘たちの婿になって、村は豊かに、みんなのんびり静かに暮らした。

ポプラ社	1967
幼 低 中 高	12分

絵の具を盛り上げ、筆使いの跡も残る力強い絵が、百貫目の金棒を振り回したり、松の木を引っこ抜いたりするちからたろうの偉業を見事に表している。子供はちからたろうの怪力ぶりに驚きながら、結末に満足する。

156

チワンのにしき 中国民話

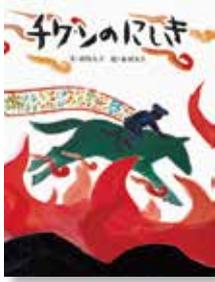
君島久子 文 赤羽末吉 絵

978-4-591-01859-0

ポプラ社

1977

幼 低 中 高 12分



昔、チワンの村に美しい錦を織るおばばがいて、3人の息子と暮らしていた。ある日おばばは美しい村の絵を見つけて手に入れ、その絵を錦に織り始めた。昼も夜も織り続け、見事な織物ができるが、怪しい風に飛ばされてしまう。兄弟は順番に錦を探しに行くが、末っ子の口口だけが、石のウマに乗って、ひので山の仙女から錦を取り返す。口口が家に着いて錦を広げると、錦の中の村がどこまでも広がり、口口は仙女と結婚し、おばばと幸せに暮らした。

おばばが、血を流しながら3年もかけて織り上げた錦が、最後には口口たちが住める本当の村になる。2次元の世界が3次元になる不思議で美しい昔話である。長い話だが、次々と出来事が起こるので、子供たちはしっかりとついてきてくれる。

157

てぶくろ ウクライナ民話

エウゲーニー・M・ラチョフ 文 うちだりさこ やく

978-4-8340-0050-4

福音館書店

1965

幼 低 中 高 4分



おじいさんが森で手袋を落とすと、ネズミが見つめて住み始めた。そこへカエルが来て、誰が住んでいるのかと聞くと、「くいしんぼねずみ。あなたは?」「びよんぴよんがえるよ。わたしもいれて」とカエルも一緒に住み、続いて、ウサギ、キツネ、オオカミと次々動物がやってきて、手袋は満員。落とし物に気づいたおじいさんが戻ってくると、動物たちは驚いて手袋からはいだし、逃げてしまった。

繰り返しながら、登場人物がどんどん増えて膨らんでいく形式の昔話。動物たちのやりとりが楽しい。文章にはないが、手袋にドアやはしご、窓がついて家のように改造されている様子もおもしろい。時の経過に従って、日が暮れていく過程も自然に描かれている。

158

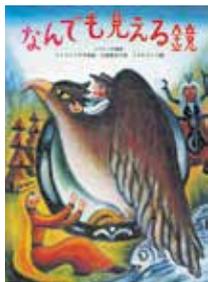
なんでも見える鏡 ジプシーの昔話

フィツォフスキ 再話 内田莉莎子 訳 スズキコージ 画

福音館書店

1989

幼 低 中 高 10分



昔、一人の若者が旅の途中で銀色の魚とワシの子、アリの王様を助けた。ある国で、王女からうまく隠れた者が王女の夫になれると聞き、若者は名乗り出る。銀色の魚とワシの子に助けってもらって隠れるが、王女は「なんでも見える鏡」を持っていて、見つけだしてしまう。3度目にアリのトンネルに隠れると、鏡に王女の心が映り、王女は若者が好きだと悟り、二人は結婚した。

貧しい主人公が動物の恩返しを受けて、美しい王女と結婚するまでをたっぴりと描いた昔話。若者が魚のお腹や空高く飛ぶワシの羽根に隠れるなど読者の想像力をかき立てる。大胆な構図の絵は、遠くから見ても力強く、読み聞かせにぴったりである。

159

ねむりひめ グリム童話

フェリクス・ホフマン 文 せたていじ やく

978-4-8340-0014-6

福音館書店

1963

幼 低 中 高 10分



待ち望んだ姫が生まれ、王様はお祝いの会を開いて占い女たちを招く。女たちは姫に贈り物をするが、呼ばれなかった占い女が現れ、15になったら姫はつむに刺されて死ぬと呪いをかける。別の占い女が姫は100年間眠るだけだと言って、その呪いを軽くする。呪いは本当になり、姫も王様たちも眠りにつき、イバラが城を覆う。100年後、一人の王子がやってきて、姫を見つけ、キスをする。姫も城中も目を覚ます。二人は結婚し幸せに暮らす。

押さえた色彩の厚重な絵が、劇的なストーリーを見事に物語っている。石造りの城やヒツジの丘など、ヨーロッパの風土を感じさせる。誰もが知っている話だが、改めて読み聞かせてもらうと、姫の数奇な運命や時の不思議に心惹かれる。

160

ばけくらべ

松谷みよ子 さく 瀬川康男 絵

978-4-8340-0492-2

福音館書店

1989

幼 低 中 高 5分



タヌキとキツネが化けくらべをした。タヌキたちは花嫁行列に上手に化けて、お宮に着くと、うまそうな饅頭が落ちている。タヌキたちが飛びつくと、饅頭はキツネの姿になった。キツネに笑われたタヌキたちは悔しくて、一計を案じ、キツネを街道に呼び出した。キツネは侍に化けて待っていると、大名行列がやってきた。タヌキが化けたと思い込んだキツネが飛び出すと、本物の侍だったので、キツネは散々な目に合わされた。

タヌキとキツネの化け比べは、お互いに失敗が重なって、勝負がつかない。ユーモラスでのどかな昔話。

161

パンのかけらとちいさなあくま リトアニア民話

内田莉紗子 再話 堀内誠一 画

978-4-8340-1083-1

福音館書店

1992

幼 低 中 高 9分



貧乏なきこりのパンのかけらを盗んだ小さな悪魔は、仲間の悪魔たちに怒られ、おわびにきこりの頼みを聞いて、沼を見事な麦畑に変える。すると地主が来て、麦を持って行ってしまふ。悪魔は、ひと束だけ分けてくれるように頼み、長い縄で麦をすべて縛ってしまう。驚いた地主が雄ウシたちを襲いかからせると、悪魔は雄ウシたちの背に麦を乗せて、きこりのところに持って帰り、地主はひっくり返って死んでしまふ。

本来悪者なのに、この話では悪魔はいたずらっ子のように親しみやすい。ずるい地主をやり込める場面は痛快で、明るくからっとした雰囲気を持っている。

162

ふしぎなやどや

はせがわせつこ 文 いのうえようすけ 画

福音館書店

1990

幼 低 中 高 8分



昔、趙(ちょう)という若い旅商人が、板橋(はんきょう)の町で三娘子(さんじょうし)の宿に泊まった。夜になると客たちは皆眠ったが、趙は眠れず、隣の部屋をのぞくと、三娘子(さんじょうし)が人形とウシに水を吹きかけていた。すると人形たちはソバ畑を作り、ソバ餅をこしらえた。翌日、朝食にソバ餅を食べた客はロバになってしまった。一月後、趙はまたこの宿に泊まり、三娘子をだましてソバ餅を食べさせ、ロバにしてしまった。旅の供をさせるが、4年後、不思議な老人の力で人間に戻る。

人形が撒いたソバがたちまち育ち、ソバ餅になる様子が不気味な魅力を持っている。少し怖い話を聞きたいと言う子供に向く。墨絵で描いた線画に色を重ねた絵は、話の雰囲気にとぴったり。

163

ふるやのもり 日本の昔話

瀬田貞二 再話 田島征三 絵

978-4-8340-0194-5

福音館書店

1969

幼 低 中 高 8分



雨の晩、ウマ泥棒とオオカミは忍び込んだ家のじいさんばあさんから、この世で一番怖いのはふるやのもりだと聞く。雨のしづくに驚いた泥棒とオオカミが土間に飛び出した。泥棒はオオカミをウマと間違えて飛び乗り、オオカミは化け物に取り付かれたと山へ走る。途中オオカミに気づいた泥棒は木の洞に隠れるが、サルが化け物退治にきて、しっぽで洞を探る。木のツルと思った泥棒は這い上がろうと踏ん張り、しっぽは切れてサルはつんめって顔が赤くなる。

「ふるやのもり」が雨漏りとはほとんどの子供は知らないだろうが、読み進むうちに絵を見てわかってくる。ユーモラスなほら話に、土臭い力強い絵があっている。『とらとほしがき』(光村教育図書)は韓国の類話で、読み聞かせに向く。

164

ブレーメンのおんがくたい グリム童話

ハンス・フィッシャー エ せたていじ やく

978-4-8340-0031-3

福音館書店

1964

幼 低 中 高 10分



人間たちにお払い箱にされたロバ、犬、ネコ、オンドリは、音楽隊に入ろうと、ブレーメンに向かい、日暮れに森の中で泥棒の家を見つける。4匹は一齐に叫びながら窓から部屋になだれ込み、泥棒たちを追い出し、ごちそうを食べると、明かりを消して眠る。そこに泥棒の一人が探りにくる。4匹は暗闇の中、ひっかいたり、かみついたり、蹴飛ばしたりして泥棒を追っ払う。恐れをなした泥棒たちは二度と来なくなり、4匹はこの家でずっと暮らす。

動きのある線画に明るい色を添えた絵が、とてもしゃれていて、楽しい。特にロバの上に3匹が次々乗る場面や泥棒の家の内部やベッドを描いた場面は印象深く、ゆっくりと読み聞かせたい。

165

ほしになつたりゅうのきば 中国民話

君島久子 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0015-3

福音館書店

1976

幼 低 中 高 18分



昔、じいさまとばあさまのそばに、大きな石が落ちてきてぱっと割れ、中から赤ん坊が現れ、二人はサンと名づけた。その頃2匹の龍が暴れて天に裂け目を作り、そこから雨や雹が滝のように降ってくる。サンは、皆を救うために、クマ王の娘を嫁にもらいに行く。3番目の白ひめがお嫁になってくれたので、サンは龍の歯やキバを抜き、二人でヒツジに乗って天に昇った。姫が天の裂け目をターバンで覆い、サンがキバや歯を打ちつけると、裂け目は閉じられた。

姫のターバンは天の川に、龍のキバや歯は星になったというスケールの大きい中国の昔話。横長の画面を縦横に使い、流れるような繊細な線と豊かな色彩で、龍や不思議な力を持つ老人や美しい姫を描き出している。

166

みるなのくら

おざわとしお 再話 赤羽末吉 画

978-4-8340-0831-9

福音館書店

1989

幼 低 中 高 4分



ある日、若者がウグイスの声に誘われて山奥へ迷い込んだ。あたりは暗くなり、遠くに明かりが見えたので行ってみると、大きな屋敷に美しい姉様がいて、ご馳走でもてなしてくれた。次の日、留守番を頼まれた若者は、姉様に11の蔵までは見てよいが、12の蔵だけは見てはいけないと言われる。1の蔵は正月、2の蔵は節分と美しい蔵を見ているうちに12の蔵の前に立った。どうしても我慢できず、開けるとウグイスが一羽悲しげに飛び去り、その途端、家も蔵も消えてなくなった。

雛祭り、花見、七夕など1から11までの蔵には、日本の伝統的な風景が美しく広がり、印象に残る。この絵をじっくり味わうには、少人数が望ましい。

167

ももたろう

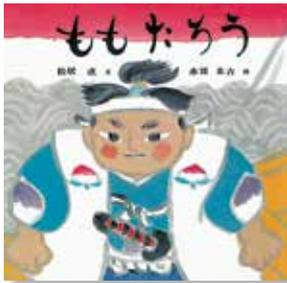
松井直文 赤羽末吉 画

978-4-8340-0039-9

福音館書店

1965

幼 低 中 高 7分



おばあさんが川で洗濯をしていると、桃が流れてきた。持って帰り、おじいさんと二人で割ろうとすると、中から男の子が生まれた。ももたろうと名づけ大切に育てた。ある日、悪い鬼の話を聞いたももたろうは、きびだんごを作ってもらい、鬼退治に出かける。犬とサルとキジにきびだんごをやって、おともにし、鬼が島に着くと、鬼どもを片っ端からやつつけた。大将が謝ったので、ももたろうは、お姫様を連れて帰り、幸せに暮らした。

誰もが知っているももたろうを明るく、元気な男の子として描いて、半世紀以上読まれてきた昔話絵本。「こしにつけたのはなんですか」「にっぽんいちのきびだんご」など、ももたろうと犬やサル、キジのやり取りの繰り返しが、幼い子供に喜ばれる。

168

やまなしもぎ

平野直 再話 太田大八 画

978-4-8340-0707-7

福音館書店

1977

幼 低 中 高 8分



昔、お母さんが3人の息子と暮らしていた。お母さんは病気になり、やまなしを食べたいと言うので、一番目のたろうが出かける。途中で会ったばあさまの言うことをきかずに山に入り、沼の主に飲まれてしまう。2番目の息子も飲まれてしまい、3番目のさぶろうは、ばあさまの願いを聞いてやり、忠告に従って、おいしいやまなしを採る。さぶろうも沼の主に襲われるが、ばあさまからもらった刀で戦い、飲み込まれた兄弟を助ける。

「ゆけっちゃ かさかさ ゆくなっちゃ がさがさ」など笹や鳥が繰り返す鳴く場面は、情性に流されず、リズムをつけて、丁寧に読む。やまなしが歌う歌は、軽く節をつけても、リズムカルに読むだけでもよい。秋の読み聞かせに向く。

169

やまんばのにしき

まつたにみよこ ぶん せがわやすお え

978-4-591-00375-6

ポプラ社

1967

幼 低 中 高 12分



村人が月見をしていると、やまんばが赤ん坊を生んだから、餅をついて持って来いと言う恐ろしい声が山から聞こえた。村人総出で餅をつき、若者二人とあかざばんばという婆様が持っていくが、若者は途中で逃げ出す。あかざばんばが一人で山の頂上まで餅を届けると、やまんばの親子は喜んで、クマのすまし汁をごちそうしてくれた。あかざばんばは21日間、やまんばの世話をし、使ってもなくなる錦をもらって帰り、村人に分けてやった。それから皆は楽に暮らした。

恐ろしいやまんばからよいやまんばへと、やまんばのイメージが変わる昔話で、子供たちも共感を持って聞く。特にうまそうなクマのすまし汁ややまんばの赤ん坊の怪力ぶりを喜ぶ。秋の月見の頃にふさわしい。

170

ゆきむすめ ロシアの昔話

内田莉沙子 再話 佐藤忠良 画

978-4-8340-0093-1

福音館書店

1966

幼 低 中 高 5分



昔、おじいさんとおばあさんが子供のいないことを寂しく思って、雪でかわいい女の子を作った。すると突然ゆきむすめが歩き出し、おじいさんとおばあさんは大喜びで育てた。ゆきむすめは賢く成長するが、春になると元気がなくなる。夏のある日、子供たちに誘われて森に行く。子供たちはいやがるゆきむすめに、焚き火を飛び越えさせる。火を飛び越えたとき、ゆきむすめの姿は消え、白い湯気が立ち上っていた。

厳しい冬から美しい春、短い夏へと続くロシアの自然を舞台にした印象深いお話。画面上の白い部分には、雪の存在がしっかりと感じられる。冬に読むとよい。

171

あなたのいえわたしのいえ

加古里子 ぶん・え

978-4-8340-0317-8

福音館書店

1972

低

中

5分



1階建てや2階建て、色々な家がある。住む家が無いと、人は暮らすのにとても困る。雨の日は濡れ、天気が良ければ太陽に照りつけられる。雨や太陽、風を防ぐ屋根と壁、出入りできる出入り口、この三つは家のとても大事なものだ。ゆっくり休むために床を、食事のために台所を、おしっこやうんこのために便所を、人は暮らしやすいように家を造ってきた。家は人が考え、工夫して造った大きな暮らしの道具。これからも、もっと工夫して便利になるだろう。

家がなぜ必要か、屋根や壁を作ること、鍵をかけることなど、一つ一つに理由をつけて説明しており、子供たちは納得して聞く。絵を見ながら家の役割、暮らしを知ることができる。

172

アリからみると

桑原隆一文 栗林慧 写真

978-4-8340-1989-6

福音館書店

2004

幼

低

中

高

3分



外はいい天気。アリが穴から出ると、大きな足と巨大な体がある。トノサマバッタだ。黒い目が光り、まっすぐな触覚の節が見えるほど大きい。アリが歩いていくと、アマガエル、イナゴ、ショウリヨウバッタ、いろいろな虫や生き物に出会う。海を見つめているトノサマバッタに出会ったアリは、バッタに乗って海を渡れないかなと思った。

独自のカメラを開発して、小さな虫を撮影することに成功した写真家の絵本。アリから見ると、小さな虫や草はこのように見上げるほど大きいのかと感心する。画面いっぱいに広がる迫力のある虫たち。草のにおいや日差しが伝わり、夏の読み聞かせにぴったり。

173

あんな雪こんな氷

高橋喜平 文・写真

講談社

1994

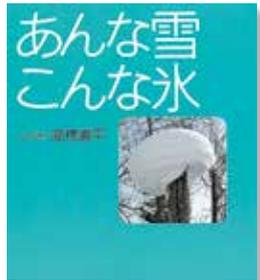
幼

低

中

高

9分



雪国に冬がやってきた。雪がどのように積もるか、探検に行こう。木の枝や杭の頭にこんもりと積もった雪は「冠雪」と呼ばれる。キノコやおまんじゅうのような冠雪。溶けてくると、雪は表面に小さなでこぼこができたり、斜面を転がってバームクーヘンのようになったり、不思議な形になる。地面や川の水が凍ってできる氷も珍しい形になる。暖かい日差しに木の周りの雪が溶け始めると、春はもうすぐだ。

雪国在住の著者は、長年雪や氷の写真の撮り続けてきた。「雪えくぼ」や「雪まくり」など雪国の人たちの豊かな雪の呼称を美しい写真と共に紹介している。なぜそのような形になるかも説明しているので、年齢に応じて楽しむことができる。

174

おかしなゆきふしぎなこおり

片平孝 写真・文

978-4-591-13124-4

ポプラ社

2012

幼

低

中

5分



冬の夜に降り積もった雪は様々な形を見せる。岩の上では大福、ポストの上ではコックさんの帽子のよう。繰り返し積もれば、小屋は大きな帽子をかぶったよう。空気中の水蒸気は凍ると霜になり、木や葉にくっつく。高い山では、湿った雲の粒が雪と一緒に木にぶつかり樹氷となる。樹氷はアイスモンスターとも呼ばれる。滴り落ちる水は、凍るとつららになる。すごく寒いと滝も凍ってしまう。冬が来たら、おかしな雪やふしぎな氷を探してみよう。

まず、表紙の写真に子供たちは惹きつけられる。降り積もった雪や氷の美しい造形が全ページカラー写真で紹介されており、特に子供が興味を示したページはゆっくりと見せてあげるとよい。各ページの文章は短く、簡潔になぜそうなるのかが書かれている。

175

おそらにはてはあるの？

佐治晴夫 文 井沢洋二 絵

978-4-472-40301-9

玉川大学出版部

2003

幼

低

中

高

5分



空に果てはあるのか？ あなたはどちらだと思う？ 夜空を見上げると星が見える。星と星の間の暗いところもよく見ると小さい星がたくさんある。小さい星と小さい星の間にはもっと小さい星くずがある。星くずはいっぱいあるのだから、もし空に果てがなく、どこまでも続いているとしたら、夜空は星で埋め尽くされ、明るく輝くだろう。しかし、夜空は暗い。だから、空には果てがあるということだ。

空に果てがあるかという素朴な疑問に、子供の実体験に即して、論理を重ねながら答を導き出している。読後、さらに疑問がわき、議論が起こりそうだ。本書の考え方は、ドイツの天文学者、H・オルバースの〈オルバースのパラドックス〉である。

176

おちばのしたをのぞいてみたら…

皆越ようせい 写真と文

978-4-591-06501-3

ポプラ社	2000
幼 低 中 高	4分



落ち葉の下をのぞくと、ダンゴムシやワラジムシ、オオゲジ、シーボルトミミズなど小さな虫が生きている。真っ赤なアカケダニや鉄を持ったミツマタカギカニムシなど不思議な色と形の虫がいる。ミミズが落ち葉を食べ、そのミミズをアリが食べる。落ち葉の下に虫たちは、みなウンチをし、そのウンチはやがて土になる。土を養分にして木が育ち、葉を茂らせ、やがて落ち葉となって虫の上に降りつもる。落ち葉の下で命が続いている。

落ち葉は土壌生物に食べられ、カビや細菌によって分解され、次第に土になっていく。その輪廻の一端を見せてくれる写真絵本。見開きには秋の雑木林の写真がある。積もった落ち葉の下にはたくさんの生き物がいることを実感する。

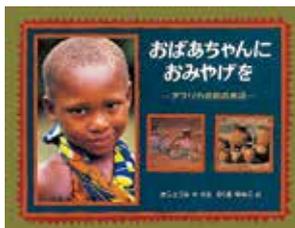
177

おばあちゃんにおみやげを アフリカの数のお話

イフェオマ・オニェフル 作・写真 さくまゆみこ 訳

978-4-03-328490-3

偕成社	2000
幼 低 中 高	8分



男の子のエメカは、隣村に住むおばあちゃんの家遊びに行く。エメカはおばあちゃんにお土産を持って行ってあげたいと思う。エメカが歩いていくと、4本の箒、五つの帽子…おばあちゃんにあげたいものがいろいろある。最後に10人のいとこに迎えられ、おばあちゃんの家に着く。お土産をあげたかたのと言うエメカに、おばあちゃんは、エメカが一番のお土産だよと言って抱きしめる。

副題に「アフリカの数のお話」とあるように、1から10まで数を追いつながら、ナイジェリア南部の人々が作った首飾りや臼と杵など日常の道具や習慣が紹介される。茶色い土に並んだ首飾りや壺の美しさ、人々の笑顔に遠いアフリカへの共感と興味がわくだろう。

178

クマよ

星野道夫 文・写真

978-4-8340-1638-3

福音館書店	1999
幼 低 中 高	6分



作者はクマに〈おまえ〉と呼びかける。〈おまえ〉は谷間の向こうで、俺は夏草の丘で、6月の風を受ける。川にサケが上ってくる夏、〈おまえ〉は山から下りてくる。マッキンレー山の麓で、俺たちは互いの場所を確かめ、秋の実を食ふ。俺たちは同じ森の中で眠る。夜になると少し怖い。どこかに〈おまえ〉がいると思うだけで、秋のツンドラに美しい骨が埋もれていた。俺はそっと触り、匂いを嗅ぐ。冬、俺は雪の下にうずくまった命の気配に耳を澄ます。

雄大な自然とその中で生きるクマの姿が、作者が呼びかける詩のような文章で綴られている。作者の野生のクマへの共感や、自然の厳しさなどは、内容を深く味わうことができる高学年におすすめできる。写真だけのページも、ゆったりと見せたい。

179

こいぬがうまれるよ

ジョアンナ・コール 文 ジェローム・ウェクスラー 写真 つばいいくみ 訳 978-4-8340-0912-5

福音館書店	1982
幼 低 中 高	6分



お隣の家の犬に赤ちゃんが生まれることになった。〈わたし〉が1匹もらうんだ。出産の日が来ると、母犬は箱に入って、中の紙を破いて寝床を作る。犬がいきむと、袋に入った赤ちゃんが次々と出てきた。母犬は赤ちゃんをなめて、へその緒を切る。生まれたての赤ちゃんは目も耳もふさがっている。眠って、おっぱいを飲んで大きくなる。2ヶ月たって歩けるようになり、〈わたし〉は自分の子犬をもらった。これからはいつも一緒だ。

出産から2ヶ月まで、子犬の成長をモノクロの写真で丁寧に描いた絵本。出産の場面もモノクロなので、生々しくならずに見ることができる。手のひらに収まる子犬が、冒険を繰り返して大きくなっていく様子は、多くの子供たちの共感を得る。

180

こうら

内田至 ぶん 金尾恵子 え

福音館書店	1988
幼 低 中 高	8分



今から1億年前、恐竜の時代に生きていたカメは、ゾウと同じくらい大きかった。今も世界中で生き残っているカメは、大きさや形は違っても皆甲羅を持っていて、それが生き残るために役に立っている。甲羅は、背中とおなかの両方にある。さらにウロコの甲羅と骨の甲羅がレンガのように二重に重なり、体を守っているのだ。甲羅の中に手足を引っ込めたり、色が周りと同化したりするカメもいる。

甲羅の視点からカメの進化や生き残るための工夫を描いた科学絵本。写実的な絵と図解的な絵が上手に組み合わせられ、理解をうながしている。何気なく見ているカメの甲羅にこれだけの秘密があったことに誰もが驚くだろう。

181

さくら

長谷川摂子 文 矢間芳子 絵・構成

978-4-8340-2495-1

福音館書店				2010
幼	低	中	高	6分



〈わたし〉はサクラのソメイヨシノ。花盛りにはヒヨドリが蜜を吸いに来る。風に吹かれて花びらを散らすけれど、すぐに緑の小さなとんがり帽子がはじけて、葉っぱが出てくる。小さな緑の玉もできる。それはサクラの実、サクランボだ。夏には虫がにぎやかに集まり、秋には葉を赤や黄色に変え、やがて冬を迎える。そして春を待ちながら、花の芽を膨らませ、春には見事な花を咲かせる。

サクラの1年を写実的で美しい絵と詩情豊かな言葉で綴った絵本。いつの季節でも読めるが、サクラが満開の時に読むとさらに印象深い。

182

さばくのカエル

松井孝爾 ぶん・え

新日本出版社				1993
幼	低	中	高	8分



雨がほとんど降らないオーストラリアの砂漠に、突然雲がわき、ものすごい雨が降ってきた。すると土の中からカエルが次々顔を出した。雨が降る時を待っていたのだ。緑が生き生きし、トカゲやバッタも現れた。カエルはえさを食べ、交尾して、できたばかりの水たまりに卵を生んだ。水がなくなるまでに、オタマジャクシからカエルに成長しなくてはならない。やがてカエルたちは土の中に戻り始める。次の雨までじっと待つのだ。

ほとんど降らない雨を待って、命をつないでいくカエルの生態を描いた絵本。巻末の説明でなぜ砂漠にカエルがいるのかがわかり、中学年以上には、ここも紹介すると興味を持つ。版型は小さいが、比較的遠くからも見える。

183

しずくのぼうけん

マリア・テルリコフスカ さく 波フダン・ブテンコ え うちだりさこ やく 978-4-8340-0208-9

福音館書店				1969
幼	低	中	高	6分



バケツから飛び出した水のしずくは、旅に出た。お日さまが照ると、しずくは見えなくなって、空の雲のところへ昇っていく。雲はしずくたちでいっぱい。雨になって落ちたところは、岩の割れ目。夜には氷になって、岩を砕き、再びしずくに戻って、川を下る。水道取入れ口を通過して蛇口へ。洗濯機の中で回されて、下着と一緒に干されたしずく。水蒸気からあっという間につららになった。春になったら元気に旅に出るだろう。

水の循環を説いた絵本で、半世紀読まれている。リズムカルな文章とユーモラスでデザイン性の高い絵で、しずくの冒険が語られ、お話としても楽しめる。

184

しっぽのはたらき

川田健 ぶん 藪内正幸 え 今泉吉典 監修 978-4-8340-0315-4

福音館書店				1972
幼	低	中	高	6分



紙面の右端に、動物のお尻と尻尾が描かれている。ふさふさした毛が先の方に生えている長い尻尾で、体に止まるハエやアブを追い払っている。「なんのしっぽでしょう？」という問いかけに、ページをめくると、ウシの頭と肩が現れる。ウシの尻尾はハエタタキの役をしているのだ。リスの尻尾はパラシュートの役をするし、カンガルーは体の釣り合いをとり、キツネは走る時のかじ取りに必要なのだ。様々な尻尾の役割を問いと答えで紹介している。

動物画家として評価の高い画家が描いた動物は、生命力にあふれ、1本1本の毛から体温が伝わってくるようだ。問いと答えの形式になっているので、特に幼い子供に喜ばれる。

185

じめんのうえとじめんのした

アーマ E. ウェバー ぶん・え 藤枝滯子 やく 978-4-8340-0129-7

福音館書店				1968
幼	低	中	高	3分



動物は地面の上や下や様々な場所に住んでいる。一方緑色の植物は、地面の上に葉や茎を、地面の下に根を伸ばしている。地面の上には太陽と空気があり、地面の下には鉱物を含んだ水がある。植物はお日さまを浴びて、葉から空気を、根から水を取り入れて、栄養を作る。動物にはこれはできない。動物は、植物や植物を食べる動物を食べている。動物は植物のおかげで生きているのだ。

ページを地面の上と下に分け、白とオレンジ色で明確に描き分けている。そこに、身近な動物や植物を配置して、地面の上か下かという位置関係から描いている。視点がユニークで、動物と植物の特性や相互の関係が自然に理解できる。

186

しょうたとなっとう

星川ひろ子、星川治雄 写真・文 小泉武夫 原案・監修

978-4-591-07887-7



5歳のしょうたは、納豆が嫌い。夏におじいちゃんと畑に青大豆を蒔いた。芽が出て花が咲き、さやができた。ゆでると枝豆になった。おじいちゃんは大豆にはまだおもしろいことがあると言う。秋には茶色くなった大豆を刈り取って、むしろに並べて日に当てた。冬の朝、おじいちゃんのかまどで大豆をゆでて、わらづとに入れた。二日後、大豆はとっておきの変身をした。納豆になったのだ。暖かい御飯にのせて、しょうたはおいしく食べた。

ポプラ社	2003			
幼	低	中	高	8分

しょうたとおじいちゃんが大豆を蒔いてから、納豆ができるまでを丁寧に追った写真絵本。しょうたに心を寄せて聞きながら、大豆が納豆に姿を変える不思議を自然に体験できる。四季それぞれの仕事を繰り返して、おじいちゃんが60年も育てている大豆、ゆったりした気持ちで読み聞かせたい。

187

しろいかみのサーカス

たにうちつねお さく いちかわかつひろ しゃしん

978-4-8340-2395-4



白い紙を折って立たせる。いくつもの折った紙を組み合わせておうちができる。紙に互い違いに切り込みを入れて、引っ張ると「びよーん」と伸びる。紙を丸めて立たせると、その上に石を乗せられる。紙を蛇腹に折って、指で押さえて放すと「びよーん」と飛ぶ。紙の上半分をびりびり破いて丸めると、お日さまのできあがり。白い紙、また遊ぼう。

福音館書店	2009			
幼	低	中	高	2分

白い紙を折ったり、切ったりすることで、紙が立ったり、強くなったり、飛んだりする。弱いと思いついていた紙の力に驚くと同時に、やってみたくなる。シンプルな文章で動作や現象を説明しているので、子供がじっくり画面を見てから、文章を読み聞かせるとよい。

188

タツノオトシゴ ひっそりくらすなぞの魚

クリス・バターワース 文 ジョン・ローレンス 絵 佐藤見果夢 訳

978-4-566-00844-1



暖かな海のかたすみでひっそり暮らすタツノオトシゴ。タツノオトシゴは小さな龍のようにみえるが、魚だ。速く泳げないので、体の色を変えて身を守る。オスとメスは尻尾をからませて求愛ダンスをし、メスがオスのお腹の袋の中に卵を生む。卵は袋の中で大きくなり、やがてオスは何百匹という赤ちゃんを生みだす。小さな赤ちゃんたちは広い海に広がり、やがて海の底に自分の居場所を決める。

評論社	2006			
幼	低	中	高	7分

表紙から裏表紙まで、海の世界が続いている。暖かな味わい深い版画が海や魚の雰囲気をよく伝えている。タツノオトシゴの面白い形や、擬態、オスが卵をかえすなど、不思議な生態は年少の子供から興味を持つだろう。本文以外に小さな文字で詳しい説明があるが、聞き手の年齢に応じて、読むとよい。

189

たんぽぽ

平山和子 ぶん・え 北村四郎 監修

978-4-8340-0470-0



タンポポは、冬の間は地面に葉を広げているが、暖かくなると新しい葉を出して立ち上がる。その根はとても長い。花は昼間開いて、夕方には閉じる。雨の日にも閉じている。1本の花には、たくさんの小さな花が集まっている。花が終わると茎はいったん倒れて、実が熟すと起き上がって、高く伸びる。晴れた日に綿毛を開き、風に乗って、遠くへ飛んでいく。

福音館書店	1976			
幼	低	中	高	5分

土の中で伸びている根を2ページにわたって描いたり、一つの花が小さな花のあつまりであることを花をたくさん並べて示すなど、絵ならではの特性を生かしている。写実的で生き生きした絵と簡潔な文章は子供の興味をかきたてる。

190

ちょう あげはの一生

得田之久 ぶん・え

978-4-8340-2567-5



サンショウの葉にアゲハチョウが卵を産みに来た。卵から生まれた幼虫は、最初は黒いが、葉っぱを食べて大きくなり、4回目の脱皮で緑色になる。やがて幼虫はさなぎになり、成虫になる。成虫になったアゲハチョウは、花の蜜を吸って生きる。チョウの道、蝶道で出会ったオスと交尾をし、また卵を産み付ける。卵を産んだメスは死んで、アリたちのエサになった。

福音館書店	2010			
幼	低	中	高	5分

アゲハチョウの生態を、写実的な絵と、事実のみを述べた文章で説明している。全文平仮名だが、脱皮、交尾などの用語は言い換えをせずを使い、チョウの一生を、産卵と死まで描いている。他のチョウの生態等に言及する注釈があるが、読み聞かせでは省いたほうが良い。1970年に刊行された同書の新版。

191 てのひらかいじゅう
松橋利光 しゃしんとぶん

978-4-88264-450-7



庭で見つけた怪獣みたいな3種の生き物。カナヘビは大きな口に長い尻尾。つるつるうろこのトカゲは、派手な色をしている。夜になったら現れる平べったい体のヤモリ。どれも手のひらにのるから〈てのひらかいじゅう〉だ。カナヘビとトカゲとヤモリの前足やうろこを並べてみると、それぞれ違っている。春になると卵を生み、カナヘビとヤモリはほったらかしだが、トカゲは親が卵を守る。

そうえん社				2008
幼	低	中	高	5分

身近な爬虫類の写真絵本。庭先でちらりと見かけても、じっくり観察したり、比べたりすることはなかなかできない。大きく写したうろこや顔を見比べるとおもしろい。小さな写真が並んでいる場面は、指差してゆっくりと子供たちに見せたい。

192 どうぶつえんのおいしゃさん
降矢洋子 さく 増井光子 監修

978-4-8340-0865-4



動物園のお医者さんの仕事は、園内の見回りから始まる。動物病院に戻り、入院中の動物たちのえさを作る。その後、顔に怪我をしたライオンや皮膚病の水牛、結膜炎のキツネなど、いろいろな種類の動物たちの怪我や病気を治す。お医者さんは大変だ。風邪をひいたチンパンジーが元気になり、いたづらをするようになる。それを見て、お医者さんはほっとする。

福音館書店				1891
幼	低	中	高	7分

動物園獣医の仕事のわかりやすく描いた絵本。動物たちが次々と治療される様子が描かれ、最後にチンパンジーが良くなった場面で、お医者さんも読者もようやくほっとする。文章、絵共に落ち着きを感じられる。幼い子供でもおどろくほど集中してじっくりと聞く。

193 どこにいるの？シャクトリムシ
新開孝 写真・文

978-4-591-09811-0



春になって木の芽が開く頃、体を縮めたり、伸ばしたりして歩いている虫がいる。シャクトリムシだ。シャクトリムシは、脱皮してさなぎになって、シャクガという蛾になる。忍者のように木の葉や枝に姿を似せて、隠れている。ダンゴムシに枝と間違われて、体の上を歩かれてもじっとしている。大きな目玉のような模様をつけて、敵をおどかさずシャクトリムシもいる。たくさんのシャクトリムシが食べられるが、林にはまだあちこちに隠れている。

ポプラ社				2007
幼	低	中	高	4分

「どこにいるかさがしてごらん」と呼びかけている場面では、子供が探せるまで、じっくり見せてあげよう。どれが虫で、どれが枝かわからないような見事な擬態を見ると、林に探しに行きたくなる。シャクトリムシが活躍する春先に読み聞かせたい。

194 とりになったきょうりゅうのはなし
大島英太郎 さく

978-4-8340-2554-5



大昔、地球には草食や肉食などいろいろな種類の恐竜がいた。大きさも様々だったが、小さな恐竜の中には羽毛が生えているものがいた。やがて羽毛の生えている恐竜の中から、木の上に登って暮らすものが現れた。何千万年もたつと、手足に生えていた羽毛が翼の形になり、空を飛べるようになった。今から6500万年前、恐竜の仲間ほとんど死に絶えたが、空を飛ぶ小さな恐竜の子孫は生き残り、鳥に姿を変えて暮らしている。

福音館書店				2010
幼	低	中	高	5分

羽毛恐竜が、鳥として生き残ってくる進化の過程をわかりやすく説いた絵本。巨大な恐竜と小さな鳥との共通性や鳥のように色鮮やかな恐竜がいたかもしれないと言う説など、恐竜好きならずとも、興味深い。巻末に、絵本に登場する生き物の名前が記されている。

195 はなのあなのはなし
やぎゅうげんいちろう さく

978-4-8340-0891-3



人の鼻の穴は、大きさも形もいろいろある。動物では、イルカは鼻の穴が一つだし、アザラシやカバは穴を開けたり閉じたりできる。鼻の穴の役目は、空気を吸ったり吐いたりすること、匂いをかぐこと。鼻が詰まると匂いもかげなくなるし、はっきり話せなくなる。鼻の穴にゴミが入らないように鼻毛が生えている。ゴミは鼻くそになって出てくる。鼻の穴やそのほかの体の穴は大事なものだから、きれいにしておこう。

福音館書店				1982
幼	低	中	高	7分

親しみやすい絵で、ユーモアたっぷりに鼻の穴の役目を伝えている。冒頭の「はなのあなをしっかりふくらましてよんでください」の一文から、鼻の穴を膨らませる子供もいるくらいだ。随所に入っている手書きの文字も自然に読めるように十分練習しておきたい。

196

はははのはなし
加古里子 ぶん・え

978-4-8340-0319-2

福音館書店	1972
幼 低 中 高	5分



みんなが「ははは」と笑っているのに、一人だけ虫歯が痛くて泣いている子がいる。痛い歯なんてないほうがよいと思うかもしれないが、歯がご馳走を細かくちぎり、すりつぶすから、栄養になるのだ。歯が虫歯になるのは、食べ物の残りかすをえさに、ばい菌が増え、歯を溶かすから。虫歯にならないためには、歯を磨き、丈夫な歯を作ること。そのためには何でも食べて、丈夫な体を作り、元気に運動しよう。

長い間読み継がれている科学絵本。はっきりした絵で、歯の大切さをストレートに伝えている。歯が虫歯になっていく過程を大きく図示したり、「は」の字を歯の数だけ並べて、大人と子供の歯の違いを比べるなど、具体的でわかりやすい。

197

びっくりまつぼっくり
多田多恵子 ぶん 堀川理万子 え

978-4-8340-2581-1

福音館書店	2010
幼 低 中 高	3分



〈ぼく〉はマツボックリを見つけて、いくつも拾う。花びらみたいに開いたマツボックリから、薄い羽みみたいなものが飛んでいく。柵にマツボックリを10個並べる。雨の日に見てみると、小さくなっていく。〈ぼく〉は、その中の二つを家に持って帰る。翌朝見ると、また開いて元通り。マツボックリを水に入れると1時間位でしょんぼり閉じる。水を拭き取り空き瓶に入れて二、三日置けば、「びっくりびんづめまつぼっくり」に。逆さにしても落ちない。

ストーリーに沿ってマツボックリの特徴がわかりやすく書かれている。秋の読み聞かせにぴったりな1冊。おはなし会で、実際のマツボックリや、「びっくりびんづめまつぼっくり」を見せると、子供たちは更に興味を持つ。

198

富士山にのぼる
石川直樹 著

978-4-7746-1147-1

教育画劇	2009
幼 低 中 高	9分



〈ぼく〉は、冬の富士山に登った。誰も歩いていない雪原を一人で歩き、日暮れにはテントをはって、食事を作り、寝袋にもぐりこんだ。強い風がテントに体当たりしてくる。翌朝、日の出前に氷と雪と風の中を一步一步進んで、ついに登りきった。頂上からは、はるか下に町が見える。富士山に行こう。そこでは1年中、新しい世界、樹海・氷穴・溶岩などに会うことができる。

読んでいくと、著者とともに風の吹き荒れる冬の富士山に登った気持ちになり、富士山が身近に感じられる。富士山の雄大な自然と登山家の様子をとらえた写真が、上手に組み合わせ、興味を惹きつける。見開きに「冬の富士山にのぼるぼくの装備一式」が載っている。

199

ふゆめがっしょうだん
富成忠夫、茂木透 写真 長新太 文

978-4-8340-1020-6

福音館書店	1990
幼 低 中 高	3分



「みんなは みんなは きのみだよ」で始まる。文章の一文一文に、冬の木の芽の正面の写真が付いている。オニグルミ、ゴシュユ、ムクノキ、アズサなどほとんどの木が身近に見られる。その一つ一つが、まるで人や動物の顔のように見えて、冬芽たちが言葉を叫んだり、しゃべったりしているようだ。「パッパッパッパッ」の繰り返しには、顔がずらりと並んだように見えるアズサがいつも登場する。

冬芽のとぼけた表情に、ぴったりの言葉が添えられている。子供たちは、普段目に留めない冬芽に、人や動物の豊かな表情を発見し、驚いたり、笑ったりする。木はそれぞれ冬芽が決まっているので、実際に見ることができる。春を待つ時期に読みたい。

200

ペンギンのヒナ
ベティ テイサム さく ヘレン K. デイヴィー え はんざわのりこ やく 978-4-8340-2358-9

福音館書店	2008
幼 低 中 高	9分



吹雪と氷におおわれた南極大陸で、コウテイペンギンのメスが卵を生んだ。オスは、足の上にある抱卵嚢（ほうらんのおう）に卵を入れ、立ったまま2ヶ月間温め続ける。一方メスは氷の上を歩いたり滑ったりして遠い海に行き、魚やオキアミをたくさん食べ、再びヒナの所に戻ってエサをやる。両親が交代で育てたヒナは、大きくなると同年齢同士で集まって過ごす。やがて大人の羽根に替わって、一人前に海で魚をとるようになる。

真冬に卵を生むコウテイペンギンの過酷な子育てを描いた絵本。集団で子育てをするコウテイペンギンの知恵に驚く。氷やオーロラ、青い海を背景に、白と黒の鮮やかなペンギンたちが活躍する様子が魅力的。

201

ぼくのぱんわたしのぱん

神沢利子ぶん 林明子 え

978-4-8340-0849-4

福音館書店

1981

幼	低	中	高	6分
---	---	---	---	----



パン屋さんに並んだパン。ぼくたちもパンを作る。パンは小麦粉、塩、砂糖、水でできている。ミルクや卵やバターを入れるともっとおいしい。パンを作るにはイーストが必要だ。砂糖を溶かした湯にイーストを入れて膨らんだら、材料を混ぜてよくこねる。ボールに入れて置くと、生パンはおもしろいように膨れる。くるっと巻いたり、ねじったり、形を作って休ませて、卵の黄身を塗り天火へ。パンの焼けるいい匂い。ぼくたちのパンが焼けた。

3人の子供がパンを作る様子を描いた絵本。登場人物が張り切って生パンをこねる様子を経て、おいしそうに焼きあがったパンを見ると、子供たちは満足感を覚える。身近なテーマが、すっきりとしたテンポの良い文章で書かれており、幅広い年代の子供に好まれる。

202

干し柿

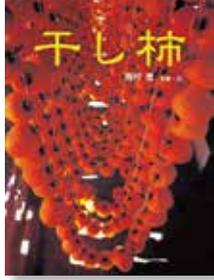
西村豊 写真・文

978-4-251-00950-0

あかね書房

2006

幼	低	中	高	8分
---	---	---	---	----



昔の人は、渋柿をおいしくするために干すという方法を思いついた。干し柿を作るには、柿の皮をむき、縄や紐でつなぎ、軒下に干す。軒下に下がった柿が太陽の光をあびて輝いている。柿は段々小さくなり、白い粉をふいてくる。最後は藁の上に平らに干して、できあがり。渋柿があれば、子供も干し柿を作ることができる。雨で腐らないように、気をつけて世話をする。できあがったら食べてみる。干し柿は、昔の人の智恵が作り出した保存食だ。

日本の伝統的な保存食、干し柿のできるまでを写真で追った本。軒先にずらりと干された柿は、太陽と自然の恵みを受けて、美しく、印象に残る。後半は子供たちが干し柿を作っている様子をとらえているので、聞き手の興味を惹くだろう。秋の読み聞かせに。

203

干したから…

森枝 卓士 写真・文

978-4-577-04371-4

フレーベル館

2016

幼	低	中	高	7分
---	---	---	---	----



トマトが太陽の下でしわしわになった。それは、干したから。野菜や果物、魚に肉、色々なものが干されて、世界中で食べられている。水分のある食べ物は、そのまま置いておくと腐ってしまうが、干すと水分が抜けて堅く、軽くなる。干すことは食べ物が腐らないように、長く食べられるようにする工夫の一つだ。主食として毎日食べている米や麦も干したものだ。干したものは自然の恵みと人の工夫の結晶。それを、私たちは食べている。

食べ物を干すことを、豊富な写真で説明した絵本。末尾には干し野菜の作り方が紹介されているので、子供が自分で試すことができる。一部に細かな写真があるため、子供の興味に合わせて、ページをじっくり見せると良い。最後の食卓の写真は、干したものを当てるクイズにして楽しむことができる。

204

ほね

堀内誠一 さく

978-4-8340-0864-7

福音館書店

1982

幼	低	中	高	3分
---	---	---	---	----



魚の肉を取ると骨が残る。でも、タコには骨がない。もし、きみの体に骨が無かったら、ぐにやぐにやで、立ってられない。人間は骨格を持ち、筋肉と一緒に関節を使い動くことができる。骨は脳や内臓を守る。体の発達した動物は、たくさんの骨が組み合わさった骨格を持ち、それに筋肉や皮膚などがついている。人間が工夫して作ったものには、動物の骨格の構造と同じものがたくさんある。骨は大昔の様子を知るための手掛かりにもなる。

人間と動物の骨、骨格などが動く仕組みなど、複雑なテーマを幼児にもわかる易しい言葉で解説している。はっきりとした色彩とユーモラスな絵が子供をよく惹き付ける。表紙と裏表紙の絵は対になっているので、最後に大きく開いて見せると良い。

205

ホネホネどうぶつえん

西澤真樹子 監修・解説 大西成明 シャレン 松田素子 ぶん

978-4-7520-0450-9

アリス館

2009

幼	低	中	高	8分
---	---	---	---	----



表題紙には、二つの骨の写真。「ぼくがだれだかわかるかな？」という問いかけに、ページを開けると、動物の全身の骨が立っている。二つの骨は、シマウマの足と蹄だという。次はコビトカバ。骨の形はカバと変わらないが、目鼻の位置はカバの方が上について、出っ張っている。カバはいつも水の中にいるからだ。続いてゾウ、コウモリ、ライオン…と骨の動物が登場し、骨の秘密が語られる。

本物の標本を並べ、生態に即して骨の形や仕組みが説明される。ゾウがつま先立ちだったり、パンダに7本の指があるなど骨ならではの発見がある。文章が問いと答えになっているので、聞き手とやり取りを楽しむこともできる。吹きだしは読んだ方がわかりやすい。

206

みかんのひみつ

鈴木伸一 監修 岩間史朗 写真撮影

978-4-89325-068-1



ミカンの皮は、大事なものを包んでいる。剥いてみるといくつもの実。一つ一つの実は袋に包まれている。その袋を剥くと橙色の実で、たくさんの小さなつぶの袋からできている。袋にはジュースがいっぱい含まれている。ミカンの白い花が咲いた後は緑色の実ができる。夏から秋へ、実は大きくなり色も変わる。皮の中の白い筋は栄養を運び、おいしいジュースいっぱいのミカンになる。ミカンにはたくさんの種類がある。どれを食べたい？

ひさかたチャイルド	2007
幼 低 中 高	5分

最初のページで「これなーんだ？」と子供たちに問いかけると、「ミカン！」と答えてくれる。読み手と聞き手のやりとりも楽しめる。語り口はやや幼いが、ミカンは幅広い年代の子供が興味を持つ。元になった『サンチャイルド・ビッグサイエンス』2006年2月号は判型が大きく、人数の多いおはなし会に使用できる。

207

みんなうんち

五味太郎 さく

978-4-8340-0848-7



「おおきいぞうは おおきいうんち ちいさいねずみはちいさいうんち」で、ゾウとネズミのうんちを並べている。魚、鳥、虫など動物によって、うんちの形も大きさも臭いも違う。止まってうんちをするカバ、歩きながらするシカ、あちこちでするウサギ、決めたところするタヌキなど、人間も含めた動物たちのうんちの仕方もいろいろだ。生き物は食べるからみんなうんちをするのだ。

福音館書店	1981
幼 低 中 高	3分

幼い子供はうんちの話が大好き。単純で明るい絵が親しみやすく、誰もが楽しめる。

208

もうどうけんドリーナ

土田ヒロミ さく 日紫喜均三 監修



盲導犬訓練所で生まれた子犬のドリーナは、パピーウォーカーの家で育てられ、一歳になると訓練が始まった。盲導犬は大きな音を怖がったり、ほかの犬とけんかをするようでは失格。小さな段差でも止まるように、どんな道も安全に歩くことができるように訓練する。ドリーナは、ましまさんという女の人の犬に決まり、二人で歩く訓練を重ねる。ましまさんはドリーナと暮らすようになり、行きたいときにどこへでも行けるようになった。

福音館書店	1983
幼 低 中 高	6分

盲導犬の訓練や盲導犬とともに生活する一家の様子が丁寧に描かれた写真絵本。淡々と事実を追っているなかにも、訓練の困難さが伝わってくる。

209

雪の写真家ベントレー

ジャクリーン・ブリッグズ・マーティン 作 メアリー・アゼアリアン 絵 千葉茂樹 訳 978-4-89238-752-4



ウィリーは、雪が大好きで、雪の日はいつも結晶を観察していた。顕微鏡を手に入れてからは、同じ形をした結晶がないことに気づき、スケッチを始めるが、完成前に溶けてしまう。顕微鏡付のカメラがあることを知り、両親に買ってもらう。毎日寒い納屋で写真を撮る。1年目は失敗ばかり。2年目にやっと成功し、美しい写真を少しずつためていく。ウィリーは家族や村人に写真を見せていたが、やがて世界的な雪の専門家として認められる。

BL 出版	1999
幼 低 中 高	11分

アメリカの豪雪地帯バーモントに生まれ、農夫として働きながら世界的な雪の写真家として名を残したウィリアム・ベントレーの伝記。素朴で力強い版画が、ウィリー本人や家族の暖かく、誠実な生き方を伝えてくれる。高学年に勧めたい。

210

わたし

谷川俊太郎 ぶん 長新太 え

978-4-8340-0847-0



〈わたし〉は、やまぐちみちこ。男の子から見ると女の子。お母さんとお父さんからみると娘のみちこ。おばあちゃんから見ると孫のみちこ。先生から見ると生徒。犬から見ると人間。絵描きさんから見るとモデル。宇宙人から見ると地球人、知らない人から見ると誰？ 歩行者天国では大勢の一人。

福音館書店	1981
幼 低 中 高	3分

見開きの左ページに〈わたし〉が立ち、右ページにいろいろな人が登場し、その人から見ると〈わたし〉が誰なのかが書かれている。視点を変えると同じ人が異なって呼ばれることを子供たちに再認識させている。

お はなし会のプログラムの作り方

おはなし会など、少しまとまった時間のあるときには、プログラムをどのように組んだらよいでしょうか？

● まず中心となる絵本を選びます。

聞き手の子供たちの年齢や興味、関心を考えて、これはと思う絵本を選んでください。特定の作者の本を読んでもらいたいなど先生からの希望でその1冊が決まることもあります。

● プログラムは、料理のコースのように絵本を組み合わせます。

中心となる絵本が決まったら、それに組み合わせる絵本を選びます。料理のコースでは、主菜、副菜、デザートがあるように、おはなし会でもしっかりしたストーリーの絵本から気軽に読める絵本まで、コースを作るように組み合わせます。聞きごたえのある絵本が何冊も続くと聞き手も集中力が下がるし、気軽に読める絵本ばかりでは物足りなくなります。

● バラエティにとんだ絵本を選びます。

聞き手の子供たちは、好みも理解力も幅があるので、絵本の内容もバラエティに富んだものにします。昔話と創作、主人公が人間のものと動物のもの、物語絵本と知識の絵本、季節感のある絵本など、どの子供にも1冊は気に入る絵本が見つかるように、全体のバランスに配慮してください。

● プログラムはシンプルに。

複数の人でプログラムを企画すると、どうしても盛りだくさんになりがちです。聞き手の立場に立って、ときにはプログラムを短くする勇気も持ちたいものです。また、凝った演出より、素直に読み聞かせをする方が、子供たちの心にまっすぐ届きます。子供は聞かないのではないかと心配せずに、子供の力、本の力を信じましょう。

● 読み聞かせを読書につなぎます。

読み聞かせをした絵本は、その後子供たちが自由に読めるように置いておくとよいでしょう。子供は、読んでもらった本を自分でもう一度読みたいと思うものです。また続編のある本を紹介するのも効果的です。『どろんこハリー』を読んだ後で、『うみべのハリー』と『ハリーのセーター』を紹介すれば、子供はこれらを読みたくなります。読み聞かせは読書への第一歩です。

プログラム事例1 ■ 小学校低学年向け

◆ 読み聞かせをする絵本

『しずかに！ここはどうぶつのとしょかんです』

ドン・フリーマン 作 なかがわちひろ 訳 BL 出版

『おおかみと七ひきのこやぎ グリム童話』

フェリクス・ホフマン え せたていじやく 福音館書店

『そらいろのたね』

なかがわりえこ さく おおむらゆりこ え 福音館書店

◆ おはなし会の時間 20分程度

読み聞かせに慣れていない低学年に向けてプログラムを組んでみました。

読み手と子供たちが初顔合わせの時には、「こんにちは」と挨拶するだけではなく、子供たちがリラックスできるように、少し個人的なことを話すとよいでしょう。例えば、このプログラムなら、「私は図書館が好きです。皆さんも好きですか？ もしこんな図書館があったらいいなと思いませんか」などと話して『しずかに！ここはどうぶつのとしょかんです』を読み始めると、子供たちは興味を持って聞きます。

よく知っているお話や絵本を取り上げるのも効果的です。子供たちは「知っている」と言いながら、安心して聞くことができます。『おおかみと七ひきのこやぎ』や『三ひきのこぶた』『おおきなかぶ』『てぶくろ』『ももたろう』『いっすんぼうし』などおなじみの昔話を取り上げるのもよいでしょう。『そらいろのたね』や『ぐりとぐら』『どろんこハリー』など、親しみやすい主人公の絵本も初めての読み聞かせには最適です。

◆ 絵本の紹介



カリーナは、図書館で本を読んでいるうちに、もし動物たちが図書館に来たらとあれこれ考え始めた。クマが来たら、クマの絵本を見せてあげよう、ゾウが来たら椅子を四つ使ってもらおう。夢中になって考えているうちにうっかり「しずかにしてください！」と叫んでしまい…。

ドン・フリーマン 作 なかがわちひろ 訳 BL 出版
2008 ISBN978-4-7764-0286-2

プログラム事例2 ■ 小学校中学年向け

◆ 読み聞かせをする絵本

『サリーのこけももつみ』

ロバート・マックロスキー 文・絵 石井桃子 訳 岩波書店

『おばあちゃんにおみやげを』

イフェオマ・オニェフル 作・写真 さくまゆみこ 訳 偕成社

『木はいいなあ』

ジャニス＝メイ＝ユードリイ さく マーク＝シーモント え さいおんじさちこ やく 偕成社

『うまかたやまんば』

おざわとしお 再話 赤羽末吉 画 福音館書店

◆ おはなし会の時間 35分程度

読み聞かせに慣れてきた中学年の子供たちの二学期を想定してみました。秋なので、『サリーのこけももつみ』を中心に、昔話と知識の本をいれて、組み立てました。アフリカの男の子の日常を描いた写真絵本『おばあちゃんにおみやげを』、木の四季を美しく描いた『木はいいなあ』を楽しんで、最後に日本の昔話『うまかたやまんば』で怖い思いと満足感を味わいます。

もう少し気軽に楽しめる本を入れたいなら、『木はいいなあ』の代わりに『びっくりまつぼっくり』を読むのもよいでしょう。松ぼっくりが湿度によって開いたり閉じたりする現象を取り上げた絵本です。おはなし会で、実際の松ぼっくりを見せると、子供たちは更に興味を持ちます。

絵本を使わずに、昔話などをそのまま読み聞かせるのもよい方法です。絵本の読み聞かせでは、遠くの席の子供が見えにくくなりますが、この方法なら、どの席の子供でも楽しめます。お話だけでは、聞いてくれるだろうかと心配に思うかもしれませんが、実際に語ってみると、子供は喜んで聞きます。聞いて楽しめる昔話や創作物語を探すには『おはなしのろうそく』のシリーズが便利です。

◆ 絵本の紹介



『愛蔵版おはなしのろうそく』は、語りのテキストとして東京子ども図書館が編集刊行したもので、現在10巻まで出ている。世界の昔話や創作物語、わらべ歌などが豊富に納められている。

東京子ども図書館 編・刊行

1997 ISBN978-4-88569-050-1

プログラム事例3 ■ 小学校高学年向け

◆ 読み聞かせをする絵本

『ロバのシルベスターとまほうの小石』

ウィリアム・スタイグ さく せたていじ やく 評論社

『こうら』 内田至 ぶん 金尾恵子 え 福音館書店

『ふしぎなやどや』 はせがわせつこ 文 いのうえようすけ 画 福音館書店

◆ おはなし会の時間 30分程度

高学年になると、子供っぽい絵本は聞かないと思って、軽い言葉で、ウィットの効いた絵本などを選んだりしがちです。けれども、人生の不思議を描いたスケールの大きい物語や昔話を一番楽しめるのが、この年齢なのです。長い話だと聞かないのではと不安がらずに、しっかりしたストーリーの絵本に挑戦してください。

このプログラムでは、『ロバのシルベスターとまほうの小石』を中心に、知識の絵本『こうら』と不思議でちょっと怖い昔話『ふしぎなやどや』を組み合わせました。『よあけ』、『あんな雪こんな氷』、『富士山にのぼる』など自然を描いた絵本や『雪の写真家ベントレー』、『メアリー・スミス』など実在の人物を描いた絵本も高学年ならではの深い共感や理解力を持って聞くことができます。

◆ 絵本の紹介



夜明け前、メアリー・スミスは家を出た。ポケットから豆を取り出すと、チューブに込めて、プッ！とひと吹き。豆はパン屋の窓に命中。もうひと吹きすると、明かりがともり、パン屋が目を覚ました。メアリー・スミスは次の家へ歩いていく。

目覚まし時計が普及する前のイギリスで、「めざまし屋」として働いた実在の人物をモデルにした絵本。

アンドレア・ユーレン 作 千葉茂樹 訳

光村教育図書

2004 ISBN978-4-89572-640-5

プログラム事例 4 ■ 幅広い年齢の子供が聞き手の場合

◆ 読み聞かせをする絵本

『きつねのホイティ』 シビル・ウェッタシンハ さく まつおかきょうこ やく 福音館書店

『わゴムはどのくらいのびるかしら?』

マイク・サーラー ぶん ジェリー・ジョイナー え きしだえりこ やく ほるぷ出版

『だごだごころころ』 石黒渚子、梶山俊夫 再話 梶山俊夫 絵 福音館書店

◆ おはなし会の時間 20分程度

聞き手の年齢に幅があるときには、下の年齢にあわせて絵本を選びます。ただし、高学年が子供っぽいと思わないように、幅広い年代に受け入れられる絵本を入れます。

昔話は、聞き手の年齢をあまり選びません。誰もが興味を持つしっかりした筋立てで、大団円で聞き手を満足させてくれます。また単純なユーモアのある絵本やナンセンスな絵本は、年少の子供にも年長の子供にも歓迎されます。

そこで、ユーモラスな鬼が登場する日本の昔話『だごだごころころ』を中心に組み立ててみました。『きつねのホイティ』は、キツネの歌が愉快で耳を楽しませてくれます。高学年には、スリランカの人々の服装や食事が興味深いかもかもしれません。『わゴムはどのくらいのびるかしら?』は、からっとしたナンセンスがあり、誰もが楽しめます。

人数が多かったりして、落ち着かない時には、詩を読み聞かせたり、みんなで声を合わせて唱えたりするのも楽しく、気持ちが集中します。現在、子供のための詩のアンソロジーがいろいろ出ていますので、そこから選ぶとよいでしょう。一度だけ読むのではなく、同じ詩を二度、三度と繰り返し読むと楽しさが増します。『かぞえうたのほん』には、面白くて楽しい数え歌が収められています。

◆ 絵本の紹介



「いちくん いちごの たねだけ たべたにーくん にぼしの かばやき たべた」など、笑ってしまうおかしい数え歌が6篇入っている。絵がなくても、詩だけで楽しむことができる。

岸田衿子 作 スズキコージ 絵 福音館書店
1990 ISBN978-4-8340-1043-5

プログラム事例 5 ■ 行事をテーマに

◆ 読み聞かせをする絵本

- お正月** 『かさじぞう』 瀬田貞二 再話 赤羽末吉 画 福音館書店
『ふゆめがっしょうだん』 富成忠夫、茂木透 写真 長新太 文 福音館書店
- 節分** 『かえるをのんだととさん』 日野十成 再話 斎藤隆夫 絵 福音館書店
『ふきまんぶく』 田島征三 文と絵 偕成社
- ひな祭り** 『もりのひなまつり』 こいでやすこ さく 福音館書店 ISBN978-4-8340-1654-3
『さくら』 長谷川摂子 文 矢間芳子 絵・構成 福音館書店
- 端午の節句** 『くわずにょうぼう』 稲田和子 再話 赤羽末吉 画 福音館書店
『どうながのプレツェル』 マーグレット・レイ ぶん
H.A.レイ え わたなべしげお やく 福音館書店
- 七夕** 『たなばた』 君島久子 再話 初山滋 画 福音館書店
『おそらにはてはあるの?』 佐治晴夫 文 井沢洋二 絵 玉川大学出版部
- 夏休み** 『はちうえはぼくにまかせて』 ジーン・ジオン さく
マーガレット・ブロイ・グレアム え もりひさし やく ペンギン社
『アリからみると』 桑原隆一文 栗林慧 写真 福音館書店

創作や昔話、知識の本から、行事に関連のある絵本や季節感のある絵本を選び、プログラムを作ってみました。読み聞かせの前に、少し行事について話したりすると、おはなし会への親しみや興味も深まります。

◆ 絵本の紹介



中国の七夕伝説を元にした絵本。象徴的な絵で、遠くからでは見えにくいので、少人数向き。大勢の場合は、絵を見せずに読み聞かせるだけでも十分楽しめる。

君島久子 再話 初山滋 画 福音館書店
1977 ISBN978-4-8340-0512-7

件名索引

件名は50音順です。

件名	番号	絵本のタイトル
あいさつ	15	おかえし
	45	ごきげんならいおん
秋	13	おおきなおおきなおいも
	40	ぐりとぐら
	49	サリーのこけももつみ
	76	にぐるまひいて
	143	さんねん峠
	168	やまなしもぎ
	169	やまんばのにしき
	197	びっくりまつぼっくり
	202	干し柿
悪魔	121	あくまのおよめさん
	161	パンのかけらとちいさなあくま
遊び	104	めっきらもつきらどおんどん
	106	もりのなか
	109	ゆきのひ
	118	わたしとあそんで
穴	71	どうながのプレツェル
	104	めっきらもつきらどおんどん
	115	ろくべえまってるよ
アヒル	6	アンガスとあひる
アフリカ	66	ちいさなヒッポ
	91	ハンダのびっくりプレゼント
	153	ダチョウのくびはなぜながい？
	177	おばあちゃんにおみやげを
雨	16	おさをあらわなかったおじさん
	18	おじさんのかさ
	183	しずくのぼうけん
	197	びっくりまつぼっくり
アメリカ	33	かもさんおとおり
	76	にぐるまひいて
	151	太陽へとぶ矢
	209	雪の写真家ベントレー
アリ	172	アリからみると
家	23	おばけのジョージ
	61	そらいろのたね
	64	ちいさいおうち
	144	三びきのこぶた
	157	てぶくろ
	171	あなたのいえわたしのいえ
イギリス	144	三びきのこぶた
石	116	ロバのシルベスターとまほうの小石
	129	おおかみと七ひきのこやぎ
	165	ほしになつたりゅうのきば
医者	82	歯いしゃのチュー先生
	192	どうぶつえんのおいしゃさん
椅子	27	かあさんのいす
いたずら	4	あくたれラルフ
	9	いたずらきかんしゃちゅうちゅう
	10	いたずらこねこ
	19	おしゃべりなたまごやき
	28	かいじゅうたちのいるところ
	92	ひとまねこざる
一年生	115	ろくべえまってるよ
一生	190	ちょうあげはの一生
	209	雪の写真家ベントレー
犬	6	アンガスとあひる
	21	おとなしいめんどり
	71	どうながのプレツェル
	74	どろんこハリール
	115	ろくべえまってるよ

件名	番号	絵本のタイトル
	125	うさぎのいえ
	164	プレーメンのおんがくたい
	167	ももたろう
	179	こいぬがうまれるよ
	208	もうどうけんドリーナ
芋色	13	おおきなおおきなおいも
	1	あおい目のこねこ
	2	あおくとときいろちゃん
	97	フレデリック
うぐいす	166	みるなのくら
ウサギ	44	子うさぎましろのお話
	55	しろいうさぎとくろいうさぎ
	56	しんせつなともだち
	75	なにをかこうかな
	119	わたしのワンピース
	125	うさぎのいえ
	126	うさぎのみみはなぜながい
	136	かちかちやま
ウシ	37	くいしんぼうのはなこさん
	87	はなのすきなうし
歌	40	ぐりとぐら
	46	こぎつねコンとこだぬきボン
	52	11びきのねこ
	104	めっきらもつきらどおんどん
	125	うさぎのいえ
	131	おだんごぱん
	140	ギルガメシュ王ものがたり
	142	こぶじいさま
	143	さんねん峠
	150	だいくとおにろく
	168	やまなしもぎ
うちわ	63	だるまちゃんとてんぐちゃん
ウマ	127	うまかたやまんば
	148	スーホの白い馬
	154	たまごからうま
馬方	127	うまかたやまんば
海	62	ターちゃんと呼びかん
	68	チムとゆうかんなせんちょうさん
	95	ふしぎなたけのこ
	122	あたごの浦
ウンチ	207	みんなウンチ
絵	13	おおきなおおきなおいも
	75	なにをかこうかな
	90	はろるとむらさきのくれよん
	101	ぼくのくれよん
	156	チワンのにしき
演芸会	122	あたごの浦
遠足	13	おおきなおおきなおいも
王様	19	おしゃべりなたまごやき
	128	王さまと九人のきょうだい
	140	ギルガメシュ王ものがたり
王子	159	ねむりひめ
オウム	133	おなかのかわ
オオカミ	51	しずかなおはなし
	129	おおかみと七ひきのこやぎ
	139	きこりとおおかみ
	144	三びきのこぶた
	163	ふるやのもり
オーストラリア	182	さばくのカエル
お母さん	27	かあさんのいす
	49	サリーのこけももつみ

件名	番号	絵本のタイトル
	60	せんたくかあちゃん
	66	ちいさなヒッポ
贈物	15	おかえし
	44	子うさぎましろのお話
	56	しんせつなともだち
	91	ハンダのびっくりプレゼント
	99	へびのクリクター
	103	まいごになったおにぎょう
おじいさん	177	おばあちゃんにおみやげを
	93	100まんびきのねこ
	110	よあけ
	130	おおきなかぶ
	131	おだんごぼん
	135	かさじぞう
	136	かちかちやま
	142	こぶじいさま
	143	さんねん峠
	146	したきりすずめ
	170	ゆきむすめ
	186	しょうたとなつとう
おじさん	16	おさらをあらわなかったおじさん
	18	おじさんのかさ
	34	ガンピーさんのふなあそび
	92	ひとまねこざる
お正月	135	かさじぞう
和尚様	134	かえるをのんだととさん
落ち葉	36	木はいいなあ
	176	おちばのしたをのぞいてみたら…
おつかい	69	つきのぼうや
	84	はじめてのおつかい
オットセイ	24	おふろだいすき
お父さん	188	タツノオトシゴ
	200	ペンギンのヒナ
踊り	28	かいじゅうたちのいるところ
	55	しろいうさぎとくろいうさぎ
	79	ねこのくにのおきやくさま
	132	おどりトラ
	142	こぶじいさま
鬼	50	じごくのそうべえ
	124	いっすんぼうし
	134	かえるをのんだととさん
	142	こぶじいさま
	150	だいくとおにろく
	152	だごだごころころ
	167	ももたろう
おばあさん	22	おばあさんのすぷーん
	25	おまたせクッキー
	48	こねこのぴっち
	138	ガラスめだまときんのつののヤギ
	152	だごだごころころ
	156	チワンのにしき
	169	やまんばのにしき
	170	ゆきむすめ
	177	おばあちゃんにおみやげを
お化け	23	おばけのジョージ
お姫様	124	いっすんぼうし
	158	なんでも見える鏡
	159	ねむりひめ
	165	ほしになつたりゅうのきば
織物	156	チワンのにしき
恩返し	135	かさじぞう
	146	したきりすずめ
オンドリ	125	うさぎのいえ
	164	プレーメンのおんがくたい
怪獣	28	かいじゅうたちのいるところ

件名	番号	絵本のタイトル
	191	てのひらかいじゅう
カエル	108	ゆかいなかえる
	134	かえるをのんだととさん
	182	さばくのカエル
鏡	69	つきのぼうや
	158	なんでも見える鏡
柿	137	かにむかし
	202	干し柿
傘	18	おじさんのかさ
	29	かさどろぼう
	135	かさじぞう
菓子	21	おとなしいめんどり
	25	おまたせクッキー
	40	ぐりとぐら
	152	だごだごころころ
家事	60	せんたくかあちゃん
火事	27	かあさんのいす
	53	しょうぼうじどうしゃじぶた
風	54	ジルベルトと風
家族	27	かあさんのいす
	76	にぐるまひいて
	120	ワニのライルがやってきた
カタツムリ	88	はなをくくん
家畜	123	ありがたいこつてす!
ガチョウ	31	がちょうのペチューニア
楽器	11	ウルスリのすず
	106	もりのなか
	132	おどりトラ
	148	スーホの白い馬
カナヘビ	191	てのひらかいじゅう
カニ	137	かにむかし
カバ	24	おふろだいすき
	32	かばくん
	66	ちいさなヒッポ
カブ	56	しんせつなともだち
	130	おおきなかぶ
カボチャ	154	たまごからうま
紙	187	しろいかみのサーカス
髪	102	まあちゃんのながいかみ
神様	126	うさぎのみみはなぜながい
	140	ギルガメシュ王ものがたり
雷	60	せんたくかあちゃん
カメ	10	いたずらこねこ
	24	おふろだいすき
	32	かばくん
	180	こうら
カモ	33	かもさんおとおり
体	195	はなのあなのはなし
	196	はははのはなし
	204	ほね
	207	みんなうんち
軽業師	50	じごくのそうべえ
川	66	ちいさなヒッポ
	145	三びきのやぎのらがらどん
	150	だいくとおにろく
	152	だごだごころころ
	153	ダチョウのくびはなぜながい?
乾物	202	干し柿
	203	干したから
木	14	大雪
	36	木はいいなあ
	44	子うさぎましろのお話
	199	ふゆめがっしょうだん
機関車	9	いたずらきかんしゃちゅうちゅう
きこり	132	おどりトラ

件名	番号	絵本のタイトル
	139	きこりとおおかみ
	161	パンのかげらとちいさなあくま
擬態	193	どこにいるの？シャクトリムシ
キツネ	15	おかえし
	35	ぎつねのホイティ
	46	こぎつねコンとこだぬきポン
	61	そらいろのたね
	82	菌いしゃのチュー先生
	125	うさぎのいえ
	131	おだんごばん
	147	ずいとんさん
	154	たまごからうま
	160	ばけくらべ
行商人	17	おさるとぼうしうり
兄弟	5	あたしもびょうきになりたいな
	14	大雪
	70	ティッチ
	128	王さまと九人のきょうだい
恐竜	194	とりになったきょうりゅうのはなし
巨大	13	おおきなおおきなおいも
	41	ぐるんぱのようちえん
	61	そらいろのたね
	95	ふしぎなたけのこ
	101	ぼくのくれよん
	172	アリからみると
禁忌	166	みるなのくら
食いしん坊	12	おおきくなりすぎたくま
	20	おちやのじかんにきたとら
	37	くいしんぼうのはなこさん
	52	11びきのねこ
	128	王さまと九人のきょうだい
	133	おなかのかわ
クジラ	24	おふろだいすき
果物	49	サリーのこけももつみ
	91	ハンダのびっくりプレゼント
	114	りんごのき
	168	やまなしもぎ
	206	みかんのひみつ
クッキー	25	おまたせクッキー
クマ	12	おおきくなりすぎたくま
	38	くまのコールテンくん
	39	くまのピーディーくん
	42	くんちゃんのだいらよこ
	49	サリーのこけももつみ
	77	二ひきのこぐま
	88	はなをくんくん
	98	ふわふわくんとアルフレッド
	178	クマよ
雲	183	しずくのぼうけん
蔵	166	みるなのくら
クリスマス	8	アンナの赤いオーバー
	44	子うさぎましろのお話
グリム	129	おおかみと七ひきのこやぎ
	159	ねむりひめ
	164	プレーメンのおんがくたい
車	53	しょうぼうじどうしゃじぶた
	59	スモールさんののうじょう
	81	のろまなローラー
	85	はたらきもののじよせつしゃけいていー
クレヨン	90	はろるとむらさきのくれよん
	101	ぼくのくれよん
けちんぼ	141	くわずにようぼう
結婚	55	しろいうさぎとくろいうさぎ
	71	どうながのプレッツェル
	158	なんでも見える鏡

件名	番号	絵本のタイトル
	159	ねむりひめ
けんか	3	あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま
	34	ガンピーさんのふなあそび
	93	100まんびきのねこ
	98	ふわふわくんとアルフレッド
健康	195	はなのあなのはなし
	196	はははのはなし
	204	ほね
	207	みんなうち
好奇心	6	アンガスとあひる
	92	ひとまねこざる
工作	187	しろいかみのサーカス
工事	81	のろまなローラー
甲羅	10	いたずらこねこ
	180	こうら
氷	173	あんな雪こんな氷
	174	おかしなゆきふしぎなこおり
5月	71	どうながのプレッツェル
	116	ロバのシルベスターとまほうの小石
	141	くわずにようぼう
コケモモ	8	アンナの赤いオーバー
	49	サリーのこけももつみ
小僧さん	147	ずいとんさん
子育て	33	かもさんおとおり
	188	タツノオトシゴ
	200	ペンギンのヒナ
ゴリラ	67	ちびゴリラのちびちび
採集	49	サリーのこけももつみ
災難	107	ゆうかんなアイリーン
	111	よかったねネッドくん
	115	ろくべえまってるよ
	116	ロバのシルベスターとまほうの小石
裁縫	3	あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま
	38	くまのコールテンくん
	103	まいごになったおにんぎょう
	119	わたしのワンピース
探し物	69	つきのぼうや
	73	どろんこごぶた
	151	太陽へとぶ矢
魚	52	11びきのねこ
	122	あたごの浦
サクラ	181	さくら
砂漠	182	さばくのカエル
サル	17	おさるとぼうしうり
	29	かさどろぼう
	91	ハンダのびっくりプレゼント
	92	ひとまねこざる
	121	あくまのおよめさん
	126	うさぎのみみはなぜながい
	137	かにむかし
	163	ふるやのもり
	167	ももたろう
参加型	78	ねえ、どれがいい？
三人兄弟	144	三びきのごぶた
	156	チワンのにしき
	168	やまなしもぎ
三人組	9	いたずらきかんしゃちゅうちゅう
	58	すてきな三にんぐみ
	104	めっきらもつきらどおんどん
	145	三びきのやぎのからがらどん
	149	せかいいちおいしいスープ
	155	ちからたろう
散歩	90	はろるとむらさきのくれよん
	119	わたしのワンピース
詩	97	フレデリック

件名	番号	絵本のタイトル
	110	よあけ
四季	36	木はいいなあ
	59	スモールさんののうじょう
	64	ちいさいおうち
	94	ふきまんぶく
	114	りんごのき
	166	みるなのくら
	181	さくら
地獄	50	じごくのそうべえ
仕事	41	ぐるんぼのようちえん
	53	しょうぼうじどうしゃじぶた
	59	スモールさんののうじょう
	68	チムとゆうかんなせんちょうさん
	72	時計つくりのジョニー
	76	にぐるまひいて
	82	菌いしゃのチュー先生
	85	はたらきもののじよせつしゃけいていー
	86	はちうえはぼくにまかせて
	92	ひとまねこざる
	192	どうぶつえんのおいしゃさん
しずく	183	しずくのぼうけん
自然	36	木はいいなあ
	54	ジルベルトと風
	110	よあけ
	178	クマよ
	197	びっくりまつぼっくり
地蔵	135	かさじぞう
嫉妬	5	あたしもびようきになりたいな
しっぽ	184	しっぽのはたらき
地主	161	パンのかけらとちいさなあくま
シャクトリムシ	193	どこにいるの？シャクトリムシ
写真	209	雪の写真家ベントレー
ジャングル	67	ちびゴリラのちびちび
獣医	37	くいしんぼうのはなこさん
	192	どうぶつえんのおいしゃさん
10月	76	にぐるまひいて
寿命	143	さんねん峠
障がい者	208	もうどうけんドリーナ
消防署	53	しょうぼうじどうしゃじぶた
植物	36	木はいいなあ
	86	はちうえはぼくにまかせて
	87	はなのすきなうし
	94	ふきまんぶく
	95	ふしぎなたけのこ
	114	りんごのき
	181	さくら
	185	じめんのうえとじめんのした
	189	たんぼぼ
	199	ふゆめがっしょうだん
	206	みかんのひみつ
食物連鎖	185	じめんのうえとじめんのした
除雪車	85	はたらきもののじよせつしゃけいていー
食器	22	おばあさんのすぷーん
食器洗い	16	おさをあらわなかったおじさん
進化	180	こうら
	194	とりになったきょうりゅうのはなし
スイス	11	ウルスリのすず
	14	大雪
睡眠	26	おやすみみみずく
スープ	139	きこりとおおかみ
	149	せかいいちおいしいスープ
スキー	57	スキーをはいたねこのヘンリー
スズメ	47	こすずめのぼうけん
	146	したきりすずめ
スペイン	87	はなのすきなうし

件名	番号	絵本のタイトル
スリランカ	29	かさどろぼう
	35	きつねのホイティ
成長	67	ちびゴリラのちびちび
	89	はらぺこあおむし
	108	ゆかいなかえる
	179	こいぬがうまれるよ
	182	さばくのカエル
	188	タツノオトシゴ
	206	みかんのひみつ
節分	134	かえるをのんだととさん
戦争	8	アンナの赤いオーバー
せんたく	60	せんたくかあちゃん
ゾウ	41	ぐるんぼのようちえん
	101	ぼくのくれよん
掃除	73	どろんここぶた
遭難	14	大雪
	68	チムとゆうかんなせんちょうさん
	105	ものぐさトミー
空	175	おそらにはてはあるの？
	183	しずくのぼうけん
タイ	122	あたごの浦
大工	150	だいくとおにろく
太陽	151	太陽へとぶ矢
タケノコ	95	ふしぎなたけのこ
タコ	122	あたごの浦
ダチョウ	153	ダチョウのくびはなぜながい？
タツノオトシゴ	188	タツノオトシゴ
タヌキ	15	おかえし
	46	こぎつねコンとこだぬきポン
	136	かちかちやま
	160	ばけくらべ
タネ	61	そらいろのたね
	70	ティッチ
食べ物	13	おおきなおおきなおいも
	19	おしゃべりなたまごやき
	20	おちやのじかんにきたとら
	21	おとなしいめんどり
	35	きつねのホイティ
	40	ぐりとくら
	52	11びきのねこ
	89	はらぺこあおむし
	95	ふしぎなたけのこ
	131	おだんごぼん
	149	せかいいちおいしいスープ
	186	しょうたとなつとう
	201	ぼくのぱんわたしのぱん
	202	干し柿
	203	干したから
卵	19	おしゃべりなたまごやき
	33	かもさんおとり
	40	ぐりとくら
	154	たまごからうま
騙す	35	きつねのホイティ
	44	子うさぎましろのお話
	82	菌いしゃのチュー先生
	126	うさぎのみみはなぜながい
	129	おおかみと七ひきのこやぎ
	131	おだんごぼん
	136	かちかちやま
だるま	63	だるまちゃんとてんぐちゃん
だんご	152	だごだごころころ
	167	ももたろう
端午の節句	141	くわずにようぼう
誕生	179	こいぬがうまれるよ
	182	さばくのカエル

件名	番号	絵本のタイトル
誕生日	188	タツノオトシゴ
	67	ちびゴリラのちびちび
	111	よかったねネッドくん
たんぽぽ 知恵	189	たんぽぽ
	121	あくまのおよめさん
	123	ありがたいこってす!
	127	うまかたやまんば
	136	かちかちやま
	143	さんねん峠
	149	せかいいちおいしいスープ
	202	干し柿
知恵比べ	203	干したから…
	144	三びきのこぶた
	147	ずいとんさん
	160	ばけくらべ
	161	パンのかけらとちいさなあくま
力持ち	162	ふしぎなやどや
	85	はたらきものじよせつしゃけいていー
	128	王さまと九人のきょうだい
中国	155	ちからたろう
	128	王さまと九人のきょうだい
	156	チワンのにしき
チョウ	162	ふしぎなやどや
	165	ほしになつたりゅうのきば
	89	はらべこあむし
朝鮮・韓国	190	ちょうあげはの一生
	3	あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま
	132	おどりトラ
チョッキ 月	143	さんねん峠
	80	ねずみくんのチョッキ
	69	つきのぼうや
土	90	はるどとむらさきのくれよん
	122	あたごの浦
	176	おちばのしたをのぞいてみたら…
手柄	185	じめんのうえとじめんのした
	7	アンディとらいおん
	53	しょうぼうじどうしゃじぶた
手品 手づくり	99	へびのクリクター
	197	びっくりまつぼっくり
	8	アンナの赤いオーバー
手伝い	14	大雪
	21	おとなしいめんどり
	63	だるまちゃんとてんぐちゃん
	72	時計づくりのジョニー
	76	にぐるまひいて
	100	ペレのあたらしいふく
	103	まいごになったおにんぎょう
	201	ぼくのぼんわたしのぼん
	202	干し柿
	44	子うさぎましろのお話
てぶくろ 寺	84	はじめてのおつかい
	100	ペレのあたらしいふく
	107	ゆうかななアイリーン
	120	ワニのライルがやってきた
	157	てぶくろ
てんぐ 闘牛 東京 道具	147	ずいとんさん
	63	だるまちゃんとてんぐちゃん
	87	はなのすぎなうし
動物園	94	ふきまんぶく
	3	あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま
	58	すてきな三にんぐみ
	72	時計づくりのジョニー
	124	いっすんぼうし

件名	番号	絵本のタイトル
動物たち	45	ごきげんならいおん
	192	どうぶつえんのおいしゃさん
	205	ホネホネどうぶつえん
	31	がちょうのペチューニア
	34	ガンピーさんのふなあそび
	40	ぐりとぐら
	48	こねこのぴっち
	61	そらいろのたね
	67	ちびゴリラのちびちび
	75	なにをかこうかな
	80	ねずみくんのチョッキ
	88	はなをくんくん
	91	ハンダのびっくりプレゼント
	106	もりのなか
	112	よるのねこ
冬眠	118	わたしとあそんで
	130	おおきなかぶ
	157	てぶくろ
	184	しっぽのはたらき
	185	じめんのうえとじめんのした
	192	どうぶつえんのおいしゃさん
	205	ホネホネどうぶつえん
	207	みんなうち
	42	くんちゃんのだいいりょう
	88	はなをくんくん
トカゲ 時計	191	てのひらかいじゅう
	72	時計づくりのジョニー
	129	おおかみと七びきのこやぎ
登山 都市化 図書館	198	富士山にのぼる
	64	ちいさいおうち
友達	7	アンディとらいおん
	86	はちうえはぼくにまかせて
	2	あおくんときいろちゃん
	7	アンディとらいおん
	25	おまたせクッキー
	38	くまのコールテンくん
	39	くまのビーディーくん
	45	ごきげんならいおん
	46	こぎつねコンとこだぬきポン
	69	つきのぼうや
トラ	72	時計づくりのジョニー
	79	ねこのくにおおきやくさま
	98	ふわふわくんとアルフレッド
	104	めっきらもつきらどおんどん
	140	ギルガメシュ王ものがたり
	20	おちやのじかんにきたとら
	98	ふわふわくんとアルフレッド
	126	うさぎのみみはなぜながい
	132	おどりトラ
	154	たまごからうま
鳥	6	アンガスとあひる
	26	おやすみみみずく
	33	かもさんおとり
	47	こすずめのぼうけん
	62	ターちゃんとペリカン
泥 泥棒	167	ももたろう
	194	とりになったきょうりゅうのはなし
	200	ペンギンのヒナ
	73	どろんここぶた
	74	どろんこハリー
動物園	29	かさどろぼう
	58	すてきな三にんぐみ
	99	へびのクリクター
	163	ふるやのもり
	164	プレーメンのおんがくたい

件名	番号	絵本のタイトル
トンボ	152	だごだごころころ
ナイフ	96	ふしぎなナイフ
長いもの	99	へびのクリクター
	102	まあちゃんのながいかみ
仲直り	3	あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま
	98	ふわふわくんとアルフレッド
鳴き声	26	おやすみみみずく
	47	こすずめのぼうけん
	66	ちいさなヒッポ
失くしもの	62	ターちゃんとペリカン
夏	104	めっきらもっきらどおんどん
	172	アリからみると
納豆	186	しょうたとなつとう
夏休み	86	はちうえはぼくにまかせて
名前	150	だいくとおにろく
なまけもの	16	おさらをあらわなかったおじさん
	21	おとなしいめんどり
	105	ものぐさトミー
南極	200	ペンギンのヒナ
ナンセンス	78	ねえ、どれがいい？
	80	ねずみくんのチョコッキ
	96	ふしぎなナイフ
	117	わゴムはどのくらいのびるかしら？
	133	おなかのかわ
	134	かえるをのんだととさん
難題	126	うさぎのみみはなぜながい
	128	王さまと九人のきょうだい
	150	だいくとおにろく
	151	太陽へとぶ矢
	158	なんでも見える鏡
錦	156	チワンのにしき
	169	やまんばのにしき
日本	122	あたごの浦
	124	いっすんぼうし
	127	うまかたやまんば
	134	かえるをのんだととさん
	135	かさじぞう
	136	かちかちやま
	137	かにむかし
	141	くわずにようぼう
	142	こぶじいさま
	146	したぎりすずめ
	147	ずいとんさん
	150	だいくとおにろく
	152	だごだごころころ
	155	ちからたろう
	160	ばけくらべ
	163	ふるやのもり
	166	みるなのくら
	167	ももたろう
	168	やまなしもぎ
	169	やまんばのにしき
ニワトリ	19	おしゃべりなたまごやき
	21	おとなしいめんどり
	125	うさぎのいえ
	164	プレーメンのおんがくたい
人形	30	かしこいビル
	103	まいごになったおにんぎょう
人間	210	わたし
ぬいぐるみ	38	くまのコールテンくん
	39	くまのビーディーくん
	98	ふわふわくんとアルフレッド
沼	168	やまなしもぎ
願い	27	かあさんのいす
	55	しろいうさぎとくろいうさぎ

件名	番号	絵本のタイトル
	102	まあちゃんのながいかみ
	116	ロバのシルベスターとまほうの小石
	124	いっすんぼうし
ネコ	1	あおい目のこねこ
	4	あくたれラルフ
	5	あたしもびょうきになりたいな！
	10	いたずらこねこ
	21	おとなしいめんどり
	48	こねこのぴっち
	52	11びきのねこ
	57	スキーをはいたねこのヘンリー
	65	ちいさなねこ
	79	ねこのくにのおきゃくさま
	93	100まんびきのねこ
	112	よるのねこ
	133	おなかのかわ
	164	プレーメンのおんがくたい
ネズミ	1	あおい目のこねこ
	21	おとなしいめんどり
	22	おばあさんのすぶーん
	40	ぐりとぐら
	79	ねこのくにのおきゃくさま
	80	ねずみくんのチョコッキ
	82	歯いしゃのチュー先生
	88	はなをくんくん
	97	フレデリック
ネパール	121	あくまのおよめさん
農場	31	がちょうのペチューニア
	59	スモールさんのうじょう
	73	どろんここぶた
	76	にぐるまひいて
	112	よるのねこ
ノルウェー	145	三びきのやぎのがらがらどん
呪い	159	ねむりひめ
歯	82	歯いしゃのチュー先生
	196	はははのはなし
歯医者	82	歯いしゃのチュー先生
履物	63	だるまちゃんとてんぐちゃん
化け物	104	めっきらもっきらどおんどん
	145	三びきのやぎのがらがらどん
	155	ちからたろう
	168	やまなしもぎ
化ける	35	ぎつねのホイティ
	44	子うさぎましろのお話
	46	こぎつねコンとこだぬきポン
	79	ねこのくにのおきゃくさま
	136	かちかちやま
	147	ずいとんさん
	160	ばけくらべ
橋	145	三びきのやぎのがらがらどん
	150	だいくとおにろく
蜂	138	ガラスめだまときんのつのヤギ
鉢植え	86	はちうえはぼくにまかせて
爬虫類	191	てのひらかいじゅう
鼻	63	だるまちゃんとてんぐちゃん
	88	はなをくんくん
	195	はなのあなのはなし
パリ	43	げんきなマドレーヌ
ハリネズミ	51	しずかなおはなし
春	11	ウルスリのすず
	15	おかえし
	37	くいしんぼうのはなごさん
	88	はなをくんくん
	94	ふきまんぶく
	95	ふしぎなたけのこ

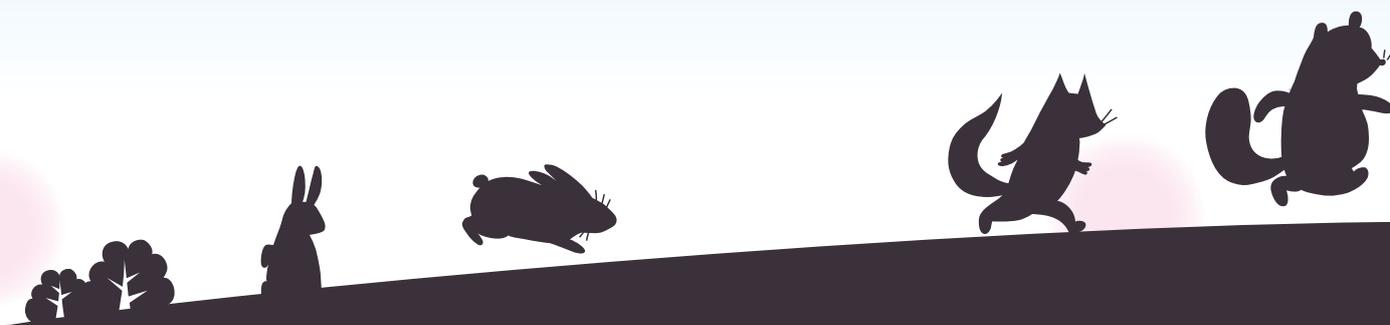
件名	番号	絵本のタイトル
	181	さくら
	189	たんぽぽ
パン	193	どこにいるの？シャクトリムシ
	131	おだんごぱん
	161	パンのかけらとちいさなあくま
	201	ぼくのぱんわたしのぱん
パンツ	83	はけたよはけたよ
引っ越し	15	おかえし
	64	ちいさいおうち
	120	ワニのライルがやってきた
ヒツジ	8	アンナの赤いオーバー
	100	ペレのあたらしいふく
人まね	92	ひとまねこざる
病気	5	あたしもびょうきになりたいな
	43	げんきなマドレーヌ
	48	こねこのぴっち
	143	さんねん峠
落服	94	ふきまんぶく
	8	アンナの赤いオーバー
	80	ねずみくんのチョッキ
	83	はけたよはけたよ
	100	ペレのあたらしいふく
	103	まいごになったおにんぎょう
	107	ゆうかんなアイリーン
	119	わたしのワンピース
不思議な出生	124	いっすんぼうし
	128	王さまと九人のきょうだい
	151	太陽へとぶ矢
	155	ちからたろう
	165	ほしになつたりゅうのきば
	167	ももたろう
	170	ゆきむすめ
ブタ	73	どろんこぶた
	144	三びきのぶた
船乗り	68	チムとゆうかんなせんちょうさん
船	34	ガンピーさんのふなあそび
	68	チムとゆうかんなせんちょうさん
	136	かちかちやま
冬	14	大雪
	42	くんちゃんのだいりょこう
	44	子うさぎましろのお話
	56	しんせつなともだち
	57	スキーをはいたねこのヘンリー
	85	はたらきものじよせつしゃけいていー
	97	フレデリック
	107	ゆうかんなアイリーン
	109	ゆきのひ
	135	かさじぞう
	139	きこりとおおかみ
	149	せかいいちおいしいスープ
	157	てぶくろ
	170	ゆきむすめ
	173	あんな雪こんな氷
	174	おかしなゆきふしぎなこおり
	199	ふゆめがっしょうだん
	209	雪の写真家ベントレー
フランス	43	げんきなマドレーヌ
	45	ごきげんならいおん
	99	へびのクリクター
	139	きこりとおおかみ
風呂	24	おふるだいき
	74	どろんこハリー
	105	ものぐさトミー
兵隊	149	せかいいちおいしいスープ
ベット	4	あくたれラルフ

件名	番号	絵本のタイトル
	99	へびのクリクター
ヘビ	99	へびのクリクター
ベラルーシ	138	ガラスめだまときんのつこのヤギ
ペリカン	62	ターちゃんとペリカン
ベンガル	154	たまごからうま
ペンギン	24	おふるだいき
	200	ペンギンのヒナ
変身	2	あおくとときいるちゃん
	147	ずいとんさん
	162	ふしぎなやどや
	197	びっくりまつぼっくり
冒険	1	あおい目のこねこ
	11	ウルスリのすず
	28	かいじゅうたちのいるところ
	38	くまのコールテンくん
	39	くまのビーディーくん
	47	こすずめのぼうけん
	57	スキーをはいたねこのヘンリー
	65	ちいさなねこ
	77	二ひきのこぐま
	198	富士山にのぼる
帽子	17	おさととぼうしうり
	58	すてきな三にんぐみ
	63	だるまちゃんとてんぐちゃん
牧場	37	くいしんぼうのはなこさん
星	165	ほしになつたりゅうのきば
	175	おそらにはてはあるの？
干し柿	202	干し柿
骨	204	ほね
	205	ホネホネどうぶつえん
本	31	がちょうのペチューニア
迷子	77	二ひきのこぐま
	103	まいごになったおにんぎょう
祭	11	ウルスリのすず
	14	大雪
	140	ギルガメシュ王ものがたり
	152	だごだごころころ
マツボックリ	197	びっくりまつぼっくり
まね	17	おさととぼうしうり
	48	こねこのぴっち
魔法	116	ロパのシルバスターとまほうの小石
ミカン	91	ハンダのびっくりプレゼント
	206	みかんのひみつ
水	10	いたずらこねこ
	183	しずくのぼうけん
店	38	くまのコールテンくん
	84	はじめてのおつかい
	103	まいごになったおにんぎょう
ミミズク	26	おやすみみずく
麦	138	ガラスめだまときんのつこのヤギ
	161	パンのかけらとちいさなあくま
虫	89	はらぺこあおむし
	172	アリからみると
	176	おちばのしたをのぞいてみたら…
	190	ちょうあげはの一生
	193	どこにいるの？シャクトリムシ
虫歯	82	歯いしゃのチュー先生
	153	ダチョウのくびはなぜながい？
	196	はははのはなし
娘	166	みるなのくら
	170	ゆきむすめ
芽	199	ふゆめがっしょうだん
メキシコ	126	うさぎのみみはなぜながい
メソポタミア	140	ギルガメシュ王ものがたり
メンドリ	19	おしゃべりなたまごやき

東京都立多摩図書館児童青少年資料担当では、
子供の本や読書についての
御質問、御相談をお受けしております。

いつでも気軽に御利用ください。

東京都立多摩図書館
電話 042-359-4109 (児童青少年資料担当ダイヤルイン)



東京都子供読書活動推進資料

読み聞かせABC 集団の子供たちへの読み聞かせに 改訂版

平成24年 3月 1日 初版発行

登録番号 (30) 16

平成31年 3月 1日 改訂版発行

編集発行 東京都立多摩図書館

〒185-8520 国分寺市泉町2-2-26

電話 042-359-4109

ファクシミリ 042-359-4121